ロイヤル・ハイネス

久芳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ロイヤル・ハイネス

【Ｎコード】
Ｎ８２１８Ｈ

【作者名】
久芳

【あらすじ】
かつて、“仔犬の町”の人々を襲い、多くの命を奪ってきた吸血鬼・フェリ伯爵は、ある事件を最後に突然姿を消した。そのフェリに十七年間育てられてきたエルは、自分の生い立ちを知らぬまま、吸血鬼が住むと恐れられる館に二人で暮らしていた。フェリは血を吸わない吸血鬼で、エルの知る彼と、町で聞くフェリ伯爵の話はまったく違う。エルはそれが気になり、密かに調べていた……。

プロローグ

プロローグ

月夜の晩が、エルはいつも楽しみだった。

いつもエルに早く寝なさいと怒るフェリが、満月の日だけは、夜更かししても怒らないからだ。

部屋の窓を開け放ち、そこからのぞく満ちた月を見ながら、ワインを飲むのが彼の習慣だった。部屋の真ん中に猫脚のテーブルを置き、おそろいの椅子を置き、そこに座ってくつろぐ彼は、エルが近づくと抱き上げて膝に乗せてくれた。

温めたミルクに砂糖を入れて、薔薇の砂糖漬けをひとつ浮かべてくれる。それを飲み終えるまでが、エルが起きていてもいい時間だった。

町のはずれにある古びた洋館の、屋根裏部屋。そこがエルたちの家だった。決して天井は高くないけれど、豪華な家具も置いてはいないけれど。くもの巣とほこりだらけで床板も腐って抜け落ちたダンスホールより、この狭くもぬくもりの感じられる部屋がエルは大好きだった。

テーブルの上に置かれた花瓶には、大輪の花を咲かせる真っ白な薔薇が飾られている。月光を浴びて卵色に光る薔薇が綺麗で、エルはじっと、それを見つめていた。

自分を抱く長い腕は、彼の呼吸に合わせてゆったりと揺れる。まるでゆりかごのような揺れにいつも睡魔がおとずれるのだけど、エルは眠らないように必死に目を開いていた。

『……ねぇ、フェリ』
『なに？』
彼の声は、木々のざわめきのように、深みがあり、静けさがある。見上げた顔は、銀色の前髪に隠れてよく見えない。抜けるように白い肌が、花瓶の中の薔薇のように、淡い光を映していた。
『フェリは、吸血鬼なんだもんね？』
『そうだよ』
『じゃあ、エルの血も吸っちゃうの？』
見上げるエルの瞳に、フェリがぱちくりと目をしばたかせて、黙りこんでしまう。
もしかして自分は何かいけないことを訊いただろうかと、不安になり始めたころに、彼はようやく口を開いた。
『……どうして、エルは、そう思うのかな？』
『だって、吸血鬼は血を吸うんでしょ？』
館を探検して、エルは書庫を見つけた。まだ難しい字の読み書きこそできないものの、エルもフェリに教えてもらって本を読むことができた。
書庫の本の中にあった、吸血鬼の出てくる小説。その中で吸血鬼は、人間の血を吸って生きていた。
彼の薄い唇からのぞく鋭い牙は、人の首筋に傷をつけ、あふれる血潮を飲むためにある。フェリはエルに、自分が吸血鬼であることをはじめから話していた。
だからエルは、彼が吸血鬼だとわかっていたけれど、その彼が小説に出てきた吸血鬼と同じかというと、どうも違った。
まばたきもせずに、大きな目で見つめるエルに、フェリはまたすこし、沈黙した。やっぱり怒っているかなと心配すると、彼は吐き出した息とともに笑った。
『エルは、僕に血を吸ってほしい？』
『……ちょっと、こわい』
考えて、ぽつりと呟いたエルの頭を、フェリが撫でる。エルの真

っ黒な髪を指先に絡めながら、彼は息がかかるほどに顔を近づけてきた。
『僕は、血は吸わない主義なんだ』
顔にかかる髪を耳にかけて、フェリがその綺麗な顔を間近に寄せる。その柔らかな表情に、いくぶんかこわばっていたエルの身体から、力が抜けた。
『本当に？』
『本当に。だってエルは、僕が血を吸うところなんて見たことないでしょう？』
うん、と、エルはうなずく。そのふっくらとした頬に指先をあてて、フェリは微笑んだ。
『吸血鬼は、血を吸わなくても生きていけるんだ。だから決して、エルの血を吸ったりはしないよ』
頬に落ちたまつげをはらい、彼はエルの額にキスをする。それはふたりのおやすみの挨拶。カップにはまだミルクが残っていたけれど、エルはそれをテーブルに置いた。
『おやすみ、フェリ』
エルの背丈に合わせて身をかがめてくれるフェリの額に、おやすみのキス。ネグリジェのすそを翻しながら、エルは自分の部屋へと戻ってゆく。
その後ろ姿にまた微笑みながら、フェリはテーブルの上に散らばる花びらを手に取った。
茶色く縮み、水分を失った花びらが、いくつもいくつもテーブルの上に落ちている。そして彼の細くて白い手の甲に、いくつもいくつも降りそそいでくる。
フェリがそっと息を吹きかけると、花瓶の中の薔薇たちは、見る間に枯れて首をもたげていった。

1、アバランチェ―1

1　アバランチェ

『エルちゃん。この町じゃそんな無防備な格好しないほうがいいよ』
町に行けば、エルはいつも必ず誰かにそう言われた。
無防備といっても、服装は他の人となんら変わりのないものだ。膝まで隠れるフレアスカートに、丸い襟にレースのあしらったシャツを着て、質素な色のカーディガンをはおって。藤のかごにはお財布と、すこし必要なものを入れて。町に買い物に行くぐらいなら、これぐらいの格好で十分いいはずだ。
けれど町のみんなは、それをだめだと言う。危ないよ、エルちゃん。襲われたらどうするんだい。
エルの顔立ちは十人並みだし、体つきも細いばかりで色気がない。この町では珍しい黒い髪と黒い瞳をみんな褒めるけど、どこか魔女を見るような、おびえた瞳をすることもあった。
とくに、年頃の女の子が一人で出歩くには物騒なわけでもない。こんな田舎町では、女癖の悪い人がすこし悪く言われるぐらいで、あいにくエルもその人に引っかかったことはなかった。
けれど、みんなが言うのはそういうことではなかった。
指輪を売るお姉さんも、野菜を売るおかみさんも、豚肉を量り売りするおじさんも。みんな首から、十字架をさげている。
家や店の軒先には必ず、聖水の入ったボトルをかける。にんにくを干すのも忘れない。町全体が、アンティークなセピア色で囲まれている中で、その悪魔よけの品々は非常に違和感がある。
町の人々はみんなこうして、何年も前に姿を消した吸血鬼を、今

でも警戒し続けていた。
「エルちゃんも、この町にくるときは、せめて十字架ぐらい身につけたほうがいいよ」
リンゴを紙袋に入れてくれた八百屋の女主人は、いつもそう言っては、バナナを一本おまけしてくれた。
エルはありがとうとお礼を言うけれど、十字架は持ち歩かない。アクセサリーの類も一切身につけていない。きらびやかさを好まないけど、シャツの襟からのぞく赤いリボンはお気に入りだった。
「ジャスティンはまだお店あけてないの？」
「どうだろうね。さっき上の階で物音がしてたから、きっとまた寝坊したんじゃないかな？」
サマンサという名の彼女は、言いながらもう一本バナナをおまけしてくれる。そして隣の店をのぞくそぶりをし、エルを見てにやりと笑った。
「エルちゃんはいつも、花屋は最後に行くんだね」
「薔薇が傷まないようにするためだよ」
エルは笑ってそう返すけど、経験豊富で昔は誘う男引く手あまただったというサマンサには、顔が熱くなりそうなのを見抜かれていた。

「ジャスティン、今日はお店あけないの？」
この町は、山のふもとに点々と続く集落のひとつで、“仔犬の町”と呼ばれていた。
東西南北に伸びる十字の道は、交わるところに噴水のある大きな広場がある。町の中心となる場所めがけて、さまざまな店が立ち並び、空から見れば十字架に見えるような、四方に広がる商店街が出来上がっていた。
道をはさむように並ぶ店は、示し合わせたように同じつくりで、みんな二階建ての住居兼用になっている。一階に店をかまえ、二階

で家族が生活するのはどこも同じだ。
例外といえば、八百屋さんの隣で、帽子屋さんの向かいにある花屋。そこはつい数年前までただの空き家で、今は若い男の人が住み着き、一人で店を営んでいた。
「ジャスティンってば！」
紙袋を両手に抱え、エルは二階に向かって叫ぶ。もう昼前だというのに、花屋の扉は閉ざされたまま。まわりの店の人もみな、ジャスティンを心配して首をのばしていた。
「ねぇ、ジャス……」
「悪い、エル！」
もう一声張り上げようとしたとき、二階の窓がようやく開いた。下で仁王立ちするエルに、彼は開口一番謝り、ちょっと待ってと悲鳴にも似た声をあげた。
「昨日買い付けで遠くまでいったから、帰るのが遅くなったんだ！寝坊した！」
もうすこししたら開ける！　と、腹の底から出したような低い声がよく響く。心配していたまわりの店もほっと安心し、サマンサはエルにウインクをした。
店が開いたのは、それからまもなくのこと。まだ頭に寝癖をつけたまま、顔を洗った水をぽたぽたとあごからしたたらせ、濃紺のエプロンを首にかけて飛び出してきたのが、この店の主、ジャスティンだ。
やっぱいせっかくいい花いれたのに。ぶつぶつ呟きながらエプロンの紐を結ぶ彼に、エルは思わずため息が漏れた。
「よくそれで経営成り立ってるわね」
「花屋はこの町に一軒しかないからな」
年は二十歳そこそこで、背が高い。細身だけど筋肉があり、ちょこまかと動き回る身体はとても機敏だった。短く切った栗色の髪と、鋭く光る緑の瞳は男前だけど威圧感があり、一見近寄りがたいと思う。彼を人懐こく見せるのは、屈託のない笑顔と、その飄々とした

性格だった。
　ジャスティンがきて一年とちょっと。その短い月日でも彼は、すっかりこの商店街に溶け込んでいた。
「いつも悪いな、朝飯食ってないから助かった」
　さきほど買ったりんごとおまけのバナナは、彼へのお土産だ。ジャスティンがひとつくれたので、エルも彼にならい、カーディガンでこすって皮ごとかじった。
　いつもは綺麗に皮をむくけど、この食べ方も悪くない。エルが食べ終わるまでの間に、ジャスティンはりんごをかじったまま、店の中の花を外に並べていた。どの店も、壁をまるごと取り外したように大きな入り口には小さな屋根がついていて、そこまで商品を移動して通行人の目に付くよう工夫していた。
　エルはこの店の常連客で、二日とおかずにやってくる。だからジャスティンは店の奥にエル用の椅子を用意し、忙しいときのために女性用のエプロンを背もたれにかけていた。
「今日はなんの花にする？　いつもどおり薔薇でいいか？」
　お得意様の好みはしっかりと覚えている。今日はこれの咲きがいいとか、あれの発色がいいとか、説明しながらきっちりいつもの花を用意していた。
「エルは白薔薇がいいんだもんな。でも今日は赤薔薇もいいのはいったんだ。すこしもってっていいから」
　お客さんが来たら、ちゃんと接客。てきぱきと無駄のない動きをする背中を、エルはつい、目で追ってしまう。椅子に座り、りんごを咀嚼して、あくびをする。それでも、目はジャスティンから離れなかった。
「穴があくから、そんなにじろじろ見ないでくれ」
「おっきいわりによく動くから、見てて面白いの」
「じゃあもっと見ててていいよ」
　彼はエルが長居することを知っている。だから花はまだ包まずに、花瓶の中に寄せておく。そして店を見ているように言うと、二階に

上がって、しばらくしたら戻ってきた。
「今日は紅茶にしたけど」
「ありがとう」
差し出される花柄のカップもエル用のもの。この店にあるもののほとんどは、ジャスティンがそろえたものではなく、もとから置いてあったものだ。女性用のものが多く、彼の使うカップも、色は白いけれどサイズがその大きな手にあっていなかった。
エルの隣に椅子を運び、ジャスティンも座る。そして二人で、作業台に頬杖をつきながら、店の前を通る人々を眺める。はじめは知っている人が一人もいなかった彼もすっかり町になじみ、店の前で手を振っていく人が何人かいた。
「今の女の人は彼女？」
「違うから」
「どこかの店の人？」
訊くと、ジャスティンはきょとんと目をまるくする。そしてすぐに、ああそうかと一人納得した。
「宝石店の人だよ。エルは隣町の子だもんな、よくわからないか」
エルはこの商店街の常連だけど、宝石屋には入ったことがなかった。売り子のお姉さんがモデルとしてつけていたイヤリングはとても綺麗だと思ったけど、それを自分でつけてみようとは思わないのだ。
「今度行ってみな。若い子が買うような可愛いネックレスとか売ってたぞ」
「なんでそんなこと知ってるの？」
「店に飾る花を届けに行ったんだよ」
「ふぅん」
語尾に余韻の残る返事をすると、彼はバナナを食べ、首をかしげる。エルは何も言わず、ミルクと砂糖のたっぷり入った紅茶を飲む。
少しの間、沈黙が流れた。
「……やきもち？」

「そうかも」
意を決したように口を開いたジャスティンに、エルはあっさり認めた。

1、アバランチェ―2

不思議と顔は赤くならなかった。この胸の中で渦巻くもやもやはやきもちなのか。自分自身のことだというのに、妙に冷静な自分がそう呟く。

「そっか、やきもちか……」

へぇ、と、今度は彼が余韻を残す番だ。すこし緑色の残るバナナを、大きな口であっという間に食べ終える。エルがちらりと視線をやると、目が合い、ぱっと笑顔を咲かせた。

「――買い付けで、いいもん見つけたんだ」

「いいもの？」

なぁに、と訊くと、ジャスティンは立ち上がり、なにやら店の奥でごそごそ探し始める。まだすべて片付けていないらしく、色とりどりのチューリップが、店先に出ないままちょこんと水にさされている。軽やかに羽を伸ばす葉が、彼の動きに合わせてゆれていた。

「これこれ。ピーチ・アバランチェ」

さしだされた花を見て、エルは思わず歓声をあげた。

「すごい、綺麗……！」

「だろ。人気だから、なかなか手にはいらないんだ。本当はスイートにしたかったんだけど、品切れで、今日はピーチなんだけど」

人気があるから、市場に出てもすぐに売切れてしまうらしい。小さな花屋のジャスティンが買い付けられたのはほんの数輪だけで、けれどそれだけでも十分に見ごたえのある花だった。

ピーチ・アバランチェ。それは、数多くある薔薇の名前のひとつだった。

真っ白な花弁が砂糖菓子のようにいくつもいくつも重なって、重なり合うところは光の加減か、オレンジの色が強く出ている。大ぶりの花びらが大輪を咲かせるのも貫禄があるけれど、これはこれで繊細な美しさがあり、エルの口から自然とため息が漏れていた。

「すごい、綺麗だね……これ、売るのもったいない」
「エルにやるよ」
「え？」
あわてて薔薇から視線をあげれば、ジャスティンはそっぽを向いていて、背中を見せたまま手をひらひらとふっていた。
「それだけじゃ売り物にならないし、今回はエルにあげるつもりで買ってきたんだ。いつも店番とかしてもらってるから、そのお礼も兼ねて」
「……いいの？」
「いいのいいの。エルはいつも同じアバランチェしか買ってかないから、たまには違うのも部屋に飾ってみろよ」
ぶっきらぼうな口調に、エルは思わず笑みがこぼれる。自然と口から声が漏れ、不審に思ったジャスティンがようやく振り向いた。
「……なんだよ。おれ、なんか変なことしたか？」
「ううん、なんにも」
言いながらも、エルは笑いがとまらない。
ジャスティンがこの薔薇を探す姿をすると、どうしてもおかしいのだ。もともとかわいらしい花が似合わない彼が、女の子ばかりあつまる市場で、これを買っていたとしたら。
「どうもありがとう」
こらえきれずに、唇から笑いがこぼれ続ける。それにすこし肩をすくめて、ジャスティンも笑った。
「今度買い付け行ったら、もっと買ってくるから。店先にだしたらこれ、すぐ人気出るだろ？」
照れ隠しに、仕事の話を始める。ぼりぼりと頭をかいて、ジャスティンはエルの手から薔薇をとりあげた。
「そんなに強く握ってたら、傷むだろ。隣町まで帰るのに時間かかるんだから、やすませとけよ」
エルはまた、笑う。
そして心の中で、ジャスティンにごめんと呟いた。

○○○

エルが隣町の子だというのは、嘘だ。
本当は同じ町の東のはずれにある、古びた洋館に住んでいるとは、誰にも話していない。
名前は、エル・シンプソン。“仔犬の町”の東に位置する小さな町で、店の数も少ない町で、両親と一緒に細々と暮らしている。誰かに素性を聞かれたらそう答えるようにしている。
本当は、父も母もいない。赤ん坊の頃から、一人の男性に育てられていた。
その男性がかつて町に恐怖をもたらした吸血鬼であることは、エルだけの秘密だ。
ほんの十数年前まで、町の人々を襲い、命を奪い、恐怖におびえさせていたフェスタリオン・クルール・ニギという名の吸血鬼。バンパイア伯爵からもじって『フェリ伯爵』と呼ばれる彼が、姿を消してなお、いまだに存在するということは、決して人々に知られてはいけない。
自分が事実上、吸血鬼の娘として育ったことなど、口が裂けても言えなかった。
「……あれ、おはようフェリ。今日は早いんだね」
寝室で目を覚まし、水を飲みに居間にやってきたフェリは、エルの呼びかけにあくびでこたえた。
彼はいつも、光を通さない暗室で眠っている。眠る時間は太陽が昇っている時間だけど、エルがまだ小さい頃は一緒に昼間に活動していた。太陽にさえあたらなければ、吸血鬼も昼間に活動できるのだった。
今日はまだ日が沈んだばかりで、いくらか空が明るい。東の空からは星が瞬き始めているけど、いつもならまだ、彼は眠っているはずの時間だった。

「おはよう、エル」
まぶたをこすりながら、フェリは猫脚の椅子に腰をおろす。たしか今日、彼が眠りについたのは夜明け前。エルが起きてからだ。目覚めるのもいつもなら日が完全に沈みきった頃なので、今日は夜更かしの早起きといえた。
「シチュー作ってるけど、食べる？」
「あとで食べるよ。ありがとう」
彼は吸血鬼。けれど、普通の食事もとる。十字架も聖水もにんにくも平気で、鋭い牙もさほど目立たない、伝説で聞くような吸血鬼とはだいぶ違う存在だった。
もちろん彼は不老不死で、エルが物心つく頃からこの姿だった。女性のように優しげな面立ちに、常に微笑んでいる唇は桜色。真っ白な肌の艶は決して枯れることがない。ただその髪だけは年齢に忠実なようで、月光を浴びれば銀色に光る、真っ白な髪をしていた。
エルを見てにこりと細められる瞳は、やはり吸血鬼というべきか、夜闇の中を紅に妖しく光る。細身の体つきも、その面立ちも、ジャスティンよりも年下なのではと思うほど若かった。
麻のシャツとズボンを上品に着こなし、テーブルに頬杖をついて再びうたた寝しそうな彼が、町で噂される吸血鬼の像と結びつかない。エルは思わず、しげしげとその姿をながめてしまう。
「……なぁに？」
「あ、ううん」
眠っているかと思えば、起きている。どんなときでも決して気を抜かないのが、長く生きてきた間に身についた術なのだろうか。
「今日、町にいってきて、薔薇買ってきたの。いつも庭のばかりじゃ、飽きるでしょ？」
花瓶にいけたばかりの、ジャスティンの店から買った薔薇の花束。それをエルはテーブルに置いた。
いつもは普通に麻の紙にくるまれている薔薇だけど、今日は珍しく花束にしてくれた。花びらの大きな、大輪の白薔薇。名前はアバ

ランチェといい、エルがいつも買う品種だった。薄暗くなった部屋でも白みが強く、重なる花びらはわずかにグリーンを帯びている。その白を引き立てるように添えられた花は、青や紫など透明感のあるものだった。

「今日は……豪華だね」

「でしょ」

目をまるくするフェリを見て、エルは笑う。いつも微笑んでいるのもいいけれど、たまにはこうやって表情を崩してもらわないと、彼の感情が読み取れなかった。

「それにこの薔薇……ピーチ・アバランチェだね。よく手にはいったね。都市ならともかく、こんな田舎じゃなかなか手にはいらないよ」

博識な彼は、薔薇を一目見て品種を当てられるらしい。なんだ知っていたのかと、エルは内心がっかりした。

ジャスティンが花束にしたのは、この薔薇があったからだろう。肝心なところでぶっきらぼうになるのが、彼の不器用なところだ。

別れ際に花束を渡したときの、あの鼻と唇をむずむずさせる照れ隠しの表情を思い出して、エルはこっそりと笑った。

「じゃあ……ひとついただこうかな」

フェリが、いつもの白い薔薇を一輪、花瓶から抜き取った。

みずみずしい花弁をした、白い薔薇。それに彼はそっと、唇を寄せる。まるで香りを楽しむようなしぐさをしただけで、薔薇は見る間に枯れてしまった。

茶色く変色した花びらは、形を保ちきれずに、はらはらと舞い落ちる。真っ白なテーブルの上に、枯れた花びらが降りそそぎ、彼の手にはまだみずみずしさをのこす、まるで自分が枯れたことに気づいていないような茎と額だけが残された。

フェリは決して、血を食さない。人間と同じ食事だけで、日々を生きている。

けれど彼は、本物の吸血鬼。普通の食事だけでは、生きるために

必要なエネルギーを作り出すことができない。だからこそ吸血鬼は血を吸うはずなのだけど、フェリは決してそれをしないと決めている。

1、アバランチェ―3

そして血のかわりに、薔薇を使っていた。
たまにワインも飲むけど、好みはやはり薔薇のようだった。薔薇も色や形でそれぞれ味が違うようで、血のような真っ赤な薔薇のほうがいいかと思ったら、フェリは味が淡白だからと白い薔薇を好んでいた。
茎を花瓶に戻して、彼は桜色の舌で唇をぺろりとなめた。
「ごちそうさま」
「もういいの？」
「まだそんなにお腹すいてないんだ。エルが寝てからいただくよ」
にっこりと微笑み、フェリは立ち上がる。そして窓際にかけてあるローブをはおった。日が暮れてから、空気が少しずつ冷えてきたのだ。
エルもまた、寒さにカーディガンの上から体をこする。ランプの明かりを強くし、ちらと花瓶の薔薇を見た。
ジャスティンからもらった、ピーチ・アバランチェ。珍しい薔薇だから、さぞかしおいしいのだろう。フェリから感想を聞きたかったけど、残念だ。
できればついでに一輪だけでももらいたかったけど、しかたない、あきらめよう。
「今日は星が綺麗だね……」
窓を開け、フェリはそう呟く。新月をすぎて、月が徐々に満ち始めている夜空。月光の力がまだ弱いので、星の瞬きがいつもより輝いて見える。
今月は二度、満月になるだろう。長く積み重なった頭の中の暦を数えて、彼はそう教えてくれた。
数え切れないほどの年月をすごす間、フェリは一体何をしていたのだろう。そう疑問に思って訊けば、いつも星を見て過ごすのだと

いう。あるいは書物を読み、たまに人間たちの様子を探ってみたりと、自由気ままに生きてきたらしい。
「ねぇ、フェリ」
エルは彼を名前で呼ぶ。小さいころからそうだった。フェリは決して、エルに「お父さん」と呼ばせなかった。
「あたし、まだ眠くないの。なにか話、きかせて？」
椅子に腰掛け、エルは首をかしげてみる。幼いころから、いつもこうして彼に話をねだっていた。
今日も話を聞こう。そしてこの薔薇を、忘れないよう目に焼き付けておこう。

●●●

「――エル？」
フェリが呼びかけると、返ってきたのは静かな寝息だった。
「寝ちゃったか……」
呟き、フェリは小さく笑う。エルはいつもこう。話を最後まで聞く前に、睡魔に負けて眠ってしまうのだ。
彼女を起こさないよう気をつけながら、フェリはテーブルに突っ伏すエルを抱き上げる。いつのまにこんなに重くなったのだろう。そんなこと本人の前で口にしたら怒られるのだけど。
この大きな洋館は、その昔、フェリが奪い取ったものだった。元の館の主も、その子孫たちも、血筋が途絶えてしまってもういない。だからこの館に所有者はいなく、長い間住み続けていたフェリが事実上の主となり、町外れの洋館には吸血鬼が住むと恐れ誰も近寄らないようになっていた。
食堂もダンスホールも書斎も地下室もある館だけど、あまりの広さと老朽化に、ほとんどは閉ざしてしまっている。使っているのは館の屋根裏部屋。それと、その付近の部屋。フェリの寝室やエルの部屋もあるし、台所などもフェリ自らかなづちを握ってとりつけた。

多少いびつではあるものの、生活するのに不便はない。
エルの部屋は、朝陽がさしこむ大きな窓の部屋にした。かわいらしいカバーのかけられたベッドにエルを寝かせ、布団をかける。さすがにもう、服を勝手に着替えさせては怒られるだろう。
顔にかかった髪をはらい、フェリはしばし、その寝顔を眺めた。
エルはフェリの娘ではない。吸血鬼と人間というのもあるけど、なにより顔が似ていない。自分の髪も昔は黒ではなかったし、大樹の葉を思わせるような大きな目もしていなかった。自分の境遇を気にしないはつらつとした性格も、太陽のように笑い、歌うその姿も、自分と同じものはほとんど感じられない。
しいていえば、その白い肌。フェリと生活していると、どうしても太陽にあたる機会が減り、色が白くなる。それが共通点だった。
エルは唇の中で何事か呟き、ふふと微笑む。夢を見ているのだろう、まぶたの裏で瞳が動いているようだ。
久しぶりに入った娘の部屋に、フェリは好奇心を押さえきれず、きょろきょろと見回してしまう。いつの間にか部屋の人形の配置も変わり、色調も大人っぽくなったようだ。エルももう十七歳。いつまでも子供なわけではない。
家具はどれも古いものだけど、彼女は決して文句を言わず、壊れたらフェリと一緒に釘を打って直していた。この机もそうだ、引き出しがひとつ、腐ってしまって、ない。おもむろに手に取った本を開くと、ページの間から何かが落ちた。
拾い上げると、それは花びらだった。
かすかな香りだけど、五感の優れている吸血鬼にはそれが何の花だったかすぐにわかる。薔薇の花びらだ。たしか一月ほど前に、エルが町の花屋でもらってきた、変わった薔薇だった。珍しい品種でフェリはエルに一輪あげたのだけど、どうやらこうして保存しておいたようだ。
花びらと本を、ノートの散乱した机の上に戻し、フェリはもう一度、エルの寝顔を見る。そしてふっと微笑み、その額に口づけする。

彼女が起きてしまわないように、物音を立てないよう、静かに部屋を出て扉を閉めた。
居間に戻って、フェリはテーブルの上の花瓶を見る。先ほどよりも長く、まじまじと眺めた。いつもはただの薔薇だけの花瓶だけど、月に一度ぐらい、豪華な花束になっていることがある。今日もそうだ。
フェリはエルが町に出ることをとめなかった。ただ、自分の素性を決して明かさないことだけは約束させた。昼間、町に買い物に出かけて、長い間帰ってこないのも知っている。けれどどうせ自分は眠っているのだからと、とくに気にしていなかった。
どうやらエルは、自分が思っていた以上に、自分の世界を広げ大人になりつつあるらしい。
月のものが始まったのはずっと前のことだ。けど、そういう意味ではない。体つき、表情。それも違う。いや、関係していないとは言い切れないのだけど。
彼女は町で、たくさんの人に会っているはずだ。そしてきっと、この花束をもらった人物に対する感情が芽生え始めているに違いない。
この薔薇を見たときのあの表情。それはフェリが出会ってきた女性の中で、多くの人々が見せる表情だった。
「そうか……エルももう年頃なんだもんな」
おどけるように、呟いてみる。つい昨日まで子供だと思っていたのに。成長が嬉しくもあり、すこし寂しくもあった。
ピーチ・アバランチェ。とてもなつかしい。幾重にも重なる花びらがとても美しくて、口に広がる味は名前の通り、桃のように繊細で鮮やかだった。
けれどフェリは、その薔薇には手をつけなかった。
いつもの、真っ白なアバランチェ。それは数ある薔薇の中でも一番食しやすく、飽きることのない、フェリにとってのパンのようなものだった。

それを唇にあて、みずみずしい生気を吸い取ってゆく。唇から甘い香りのようなものが全身に広がり、酒を飲んだときにも似た、奇妙な高揚感を覚えた。

吸血鬼にとって、薔薇は血のかわり。ワインも同様だけど、フェリは薔薇のほうが好きだった。

血は、まさしく吸血鬼の命の糧だ。普通の食事とは違い、食せば食すほど、自分の寿命が延びてゆく。血を食さなければ、いずれ命尽き果て、死んでしまうのだ。

吸血鬼は完全なる不老不死ではない。血を飲まなければ死んでしまう。血にはその人間の心臓が刻んだ命の源が宿っている。そして吸血鬼は、吸った血に含まれた命を、自分のものにすることができるのだ。

血を吸わなければ、いずれは貯めていた命がつき、死んでしまう。薔薇や赤ワインでは、寿命を延ばすことはできない。

薔薇が血のかわりになるのは、普通の食事では得られない生気を補うことだけだ。身体自体はとうに自らの寿命を過ぎている。吸血鬼はその身体を動かすために、血から生気と寿命を補給する。ワインや薔薇だけを食しても、身体を動かすことはできるけど、寿命が尽きれば死んでしまう。

フェリはこれから先、ずっと薔薇とワインのみで暮らそうとも、長らく生きることができるほどの寿命があった。それは若い頃にした所業の数々が物語る。命尽き果ててもなお続くその年月が、気が遠くなるほど長すぎて、嫌になってしまうほどだった。

かといって、吸血鬼が、寿命が尽きるまで死なないわけでもない。身体のつくりはエルたちと同じ人間。少しばかり治癒力が強く、少しばかり身体能力が優れているだけで、骨の数や機能はまったくもって同じだった。

1、アバランチェ―4

身体を動かす脳が壊れれば。心臓がぴたりと止まってしまえば。首が切り落とされればひとたまりもないし、くいや刃物で心臓をひとつきにされ、治癒が間に合わなければそれで最後。人間よりすこし頑丈なだけで、致命傷は他ととくにかわらない。

十字架やにんにく、それから聖水。残念ながらそれらは効かない。だから町でみなが自分を寄せ付けないようにと飾っているものは、すべて無意味であるのだ。

唯一、だめなものは太陽だった。日の光を浴びれば、浴びたところは傷を負い、それはそう簡単に癒えてくれない。だからフェリは、なによりも日の光に注意を払って生きてきた。

ぼんやりと星を見上げながら、フェリはゆっくりとした動作で、薔薇を枯らしてゆく。けれど決して、例の薔薇には手をつけない。あの味は今も覚えているし魅力的ではあるけれど、エルの悲しむ顔だけは見たくなかった。

エルの寝顔が、自然と頭に浮かぶ。幸せそうなあの寝顔。心なしか微笑んでいる唇。薔薇色の頬。閉ざされた瞳は、吸い込まれそうなほどに深い、漆黒。

ほんのすこし前まで、ただの赤ん坊だったのに。四六時中泣いてはフェリを起こし、歩き回るようになれば洋館で迷子になりフェリを困らせ、ひとりで町に出れば道の途中で力尽きて泣き出して。

いつの間にか、たくさんの薔薇とともに、大人という心を腕いっぱいに抱えるようになり。

その成長のほとんどを、フェリはこの目で見てきた。きっとこれから先も、見守ることができる。あの寝顔だって、毎日でも眺めることができる。

町に行くとき、たまに窓からその姿を見送ることがある。光にあたらないように気をつけるフェリに、エルは太陽の下で笑いながら、

大きく手を振ってくれる。
その豊かな黒髪が風にあおられる。唇からのぞく白い歯。ブラウスの襟からかすかにのぞくなだらかな首筋。
それを見ていると、いつもフェリは苦しくなる。
息も、心臓も、いつもとかわらない。けれど、胸がざわめき、かすかに痛みを覚える。
その痛みは、エルが成長を続ければ続けるほど、増すばかりだった。

2、イングリッシュ・ローズ―1

2　イングリッシュ・ローズ

「――あれ」
身支度を整え、朝食を作ろうと思い立ち、エルはテーブルを見て足を止めた。
花瓶にまだ、薔薇が残っている。フェリはいつも、買ってきた薔薇は新鮮な夜のうちに全部食べてしまうはずなのに。残すなんて珍しい。
残った薔薇はどうしよう。砂糖漬けにしようかな。そんなことを考えながら花瓶を手に持ち、エルは気づいた。
「全部……残してある」
いつもの白薔薇はすべてなくなっている。
けれど昨日、ジャスティンからもらったピーチ・アバランチェだけが、昨夜の数のまま残されている。口に合わなかったのだろうかと考えて、違うとエルは首を振った。
「残しといてくれたんだ……」
フェリは気づいていたのかもしれない。この薔薇が、エルのために贈られたことを。だからあえて手をつけず、残しておいてくれたのだ。

昨晩、いつの間にか眠ってしまったはずなのに。部屋に運んでくれたのもフェリだった。ずいぶん重くなってしまったはずなのに、あの細い体は見かけのわりに力があった。

お礼を言おうか。けれど、彼はもう寝てしまっている。下手に寝室に日の光を入れるのもはばかられて、エルは花瓶を自分の部屋に戻した。

今日もまた町に行く。そしてジャスティンの花屋を手伝わなければならない。今日は花束の予約がたくさん入っていて、とてもひとりじゃ手に負えないから手伝ってほしいと前もって言われていた。

朝食のサンドイッチをバスケットにつめ、エルはまだ肌寒い外を考えてコートを羽織る。カーテンをひらくと外は夜が明けたばかりで薄暗く、霧がかかっていて雨まで降りそうだった。

「さすが、エル。よくわかってるな……」

エルが店についた頃は、まだどの店もしまっていて、花屋ももちろん、閉まっていた。けれど家のカーテンだけはあけられていて、眠い目をこすったジャスティンは、エルの姿に気づいてすぐに家にあげてくれた。店の入り口にはめ込むようにできた大きな木戸は、ちゃんと表からも出入りができるよう、小さな扉がつけられている。

朝ごはんは食べたの？　そう訊いたらやっぱり食べていなくて、エルが持参したサンドイッチを一緒に食べることになる。

半分夢の中のジャスティンをたきつけて身支度をさせ、エルもエプロンをする。彼の店を手伝うのは初めてではない。エルはすっかり、この店での良い働き手となっていた。

「そんなに、花束の注文多いの？」

「まぁ、ニコラさん家の注文だからな……」

ニコラさん。それはこの町で一番大きな家に住む、町長の息子のことだ。お金持ちで見た目もよく、この町の人々の中で一番いい服を着て一番いいものを食べる、いわばぼんぼんだけど、年齢は盛り

をとっくにこえている。
　ニコラ家の一人息子は、月に一度、ジャスティンに大量の花束を注文してくる。その注文の内容はとても細かく、しかも出来上がったものはすべて指定した家に届けるようにとまで言ってくる。店の経営につながるのだからジャスティンも表立って文句は言わないけれど、毎月来るその注文を『ニコラの日』と呼んで内心びくびくしていた。
　夜は防犯のためにと閉めきられている店の中は、まるで目に見えるのではないかというぐらい、花の香りが充満していた。昨日はそれほど気にならなかったけど、閉ざされた店に花を一晩置くだけで、空気がこれほどに変わるとは。エルは胸いっぱいに、その甘い香りを吸い込んだ。
「これ……薔薇の香り？」
「そう。今月の花束は全部薔薇にしてくれって。めずらしく細かいこと言わなかったけど、ニコラさんの花束だから、使う種類も気ぃ使うわけよ」
　なかば文句のように呟きながら、ジャスティンは店の奥から薔薇の入ったかごをいくつも持ってくる。裏口から外に出て、猫の額ほどの小さな庭にも、まだいくつか隠していたらしい。かごの底にはきちんと水の入った器があって、それは店に並んでいるものではなく、買い付けしたばかりのものだった。
「だから買い付けに時間がかかったのね」
「予算に関しては何も言わないから、山ほど使ってやろうと思ったわけ。まぁ、ニコラさんも豪華なものにしてくれって言ったしさ」
　エルも運ぶのを手伝おうとしたけど、断られた。どうやらそうとう重いらしい。
　花束を作るために、作業台の上を片付ける。今日の薔薇にあわせて買ってきたリボンは色鮮やかで、包装に使う紙も、布かと思うぐらいにやわらかくて高級なものだった。
　ジャスティンが今月用意したのは、イングリッシュ・ローズだっ

た。
　これはそうとう高価なはずだ。ものを見て、エルは息を呑む。こんな小さな町では、花を仕入れるのも一苦労。西の町にある市場でも人気のある花はすぐに売切れてしまうのだから、これだけのイングリッシュ・ローズを仕入れるのはとても大変だったろう。
「豪華な薔薇だね」
「人気のあるやつばかりにしたからな」
　その大きさは、アバランチェにも負けていない。幾重にも重なった花びらのものもあれば、一重の優雅なものもある。どれも香りが強くて、とげも少なく、見た目に気品があった。
　花束の形を作るのはジャスティンの仕事。彼は見かけによらず、とても繊細な仕事をする。ただ薔薇だけの花束にするのではなく、一緒にトルコキキョウやカスミソウも使う。彩りも形も、すべてのバランスを考えて、できあがったものはエルがラッピングする。
　なにせ注文は大量だから、午前中はほとんどこの作業に費やされる。だから、店を開けるのは午後になってから。午後からジャスティンは配達に出かけ、その間はエルが店番をするのだ。
「これ、今日一日で間に合うの？」
「間に合わせるためにエルを呼んだんだ。おれ、夜中に仕事するの嫌だからさ」
　エルが手伝う前の彼は、前日の夜中から花束作りを開始し、当日はまる一日店を閉めて作業をしていた。
　がさつで豪快な性格をしたジャスティンがつくる、繊細で色鮮やかな、見るものを喜ばせる花束。それがどうもミスマッチで、作りかけの花束をもってどうしようか考えている彼の姿は実に奇妙だった。ラッピングをしながらその姿を見て、エルは思わず笑ってしまう。
　作業を続けるうちに、他の店も仕事を始めたらしい。店の戸を開ける音があちこちから聞こえてくる。ジャスティンはのんびりと鼻歌をうたっていた。

「今日の配達は、どこまで？」
「今日は幸い、町内だけなんだ。ニコラさんも檀家さんがいっぱいいるからねー大変だよ毎月毎月」
口元を奇妙に歪ませて、彼は言う。首をかしげるエルに、ジャスティンは声をひそめて教えてくれた。
「届け先、全部女の人の家なんだ」
「そうなの？」
「毎月毎月、花束は全部女の人にあげてるんだ。唯一ひとつだけは自分で取りに来るけど、あの人の良い噂はあんま聞かないし……」
ジャスティンがこの町で店を開いて、一年が過ぎた。商店街にはいつもいろんな話が飛び交うから、嫌でも頭に入ってしまうらしい。どこそこの家の旦那さんが奥さんに逃げられた。そんな話は可愛いほうだ。
「ニコラさん、昔から女遊びが多いらしいんだよ。だからエルも気をつけろよ」
ニコラ氏の噂はかねがね聞いていた。
良い家のおぼっちゃまなのだから、もとから結婚する相手は決まっていたらしい。けれど彼はその結婚を断り、今も独り身でいる。
時期町長という身ながら、嫁を迎えるつもりも、跡継ぎをとるつもりも無いらしい。昔は縁談の話がたくさんあったらしく、一時は式の準備までしたけれど、結局前日になってやめてしまったという話もあった。
「あたしは大丈夫だと思うけど……」
ジャスティンは、妙なところで細かい。いいから、気をつけろ。念を押して言うので、エルもそれに適当にあわせておいた。
「噂といえば、最近、なんか面白い話とか聞いた？」
エルはあくまでも隣町の子で、実際はこの町の子といえど、ほとんど館にいるから町のこともあまり知らない。だからジャスティンにいつも、この町でのいろいろな話を教えてもらっていた。
「そういや……また吸血鬼伯爵の話を教えてもらったけど」

そしてエルが何より興味を持つ、吸血鬼――フェリのことにも詳しい。

エルが吸血鬼の話になると目の色を変えることを知っているジャスティンは、苦笑いをしながらも、作業の手を止めないことを条件にその話を教えてくれた。

2、イングリッシュ・ローズ―2

今の姿ではとても想像はつかないけれど、フェリは昔、とても悪かったそうだ。

彼がこの町に住むようになったのは、何百年も前からのことらしい。

“仔犬の町”は田舎町だから、物資を調達するためにはそれなりに大きな町へと買い物に出かけなければならない。エルが住んでいるという東の町とは真逆の、西の町にみんな出歩いてゆく。

その街にもないものを仕入れるとすれば、もっと遠い都市に行って買い物をする必要がある。頼めば荷物を運ぶ専門の人がいるけれど、実際に目で確かめるのは店主の仕事。だからジャスティンは花を仕入れるのに遠くの町まで行き、丸一日帰ってこないこともよくあった。

そんな田舎の“仔犬の町”でも、暮らす上での不都合はとくにない。深い山のおかげで土地が豊かであり、たくさんの畑や牧場がある。着るものも、贅沢さえ望まなければ手に入る。都市から都市への通り道であるため、たまに旅人や行商人が訪れては市を開くこともある。町の中心の商店街は、いつも活気にあふれていた。

人々が豊かに暮らすからこそ、吸血鬼が気に入ったのかもしれない。

フェリ伯爵は最初、どこに住んでいるのかわからなかったそうだ。けれどある日町でも二分に分かれる大きな一族の館を襲い、以来その洋館に住み着くようになった。昔はあの館のまわりにもたくさんの家がありにぎやかだったそうだけど、彼が住むようになってから

は誰も近寄らなくなり、そのため近くにあるのは草木ばかりといった暗い廃屋になってしまったのだった。
フェリが一体どんなことをしていたのか。それは聞いているこちらも具合が悪くなるようなことばかりだった。
彼は主に、健康で若い者を好むようだったらしい。見目の美しい娘がとても好きだった。そして一度目をつけたら決して逃がさないしつこさがあり、フェリに狙われたものは逃れることができず、十字架を握り締めておびえることしかできなかったらしい。
吸血鬼にとって、血は生きるうえで必要不可欠なものだ。一口二口ぺろりとなめられるぐらいならまだ良かったかもしれないけれど、彼は必ず、すべての血を吸い尽くしていた。そのため、吸われた者は必ず死ぬ。長い間、彼の犠牲者は減らなかったという。
その彼がぱったりとあらわれなくなってから、町の平穏は戻ったかのように思われる。けれど吸血鬼の残した爪あとは深く、今も町の人々は吸血鬼の姿におびえていた。
ジャスティンが営むこの店もまたそうだった。
この町には花屋がひとつしかなかった。今、ジャスティンが開いているここがまさしくそうで、彼が店を開くまで、決して誰も買い取ろうとせず、かたく閉ざされたままだったらしい。同じく、他の場所で花屋を開こうとする者もいなかった。
この花屋の店主が、フェリの最後の犠牲者だったからだ。

エルが知っている情報はこれぐらいだった。話の核心に触れることはあまりない。人々にその質問をすると、みんな深くまでは話そうとしないので、結局は同じような話になってしまうのだ。
そして唯一すべてを話してくれるのが、ジャスティンだった。彼はその人懐こさのおかげで、町の人々にいろいろな話を聞くことができるのだ。おまけに、彼ももとはこの町の子ではない。だからなお、人々が念入りに吸血鬼の注意を呼びかける。だからこそ、細か

い話まで知っているというわけだ。
「ジャスティンはどうして、この町に花屋を開こうと思ったの？」
「ひとつも花屋がない町っていうことは、そこで花屋をすれば町の人みんなが買いにきてくれると思ったから。みんな、自分が吸血鬼に襲われるのが嫌で、花屋を開かなかっただけなんだ」
　吸血鬼の犠牲になった人の家のほとんどは焼き払われてしまったらしい。けれどこの花屋は商店街の中にあることから下手に火をつけることもできず、みんな立ち入るのを恐れていたので、家の中のもののほとんどは前の持ち主のものだった。
「でも、ひとりでこんな町にくるって決めて、家族とかなにも言わなかったの？　ジャスティン、ここらへんの人じゃないじゃない」
　この地方の人々は、金髪碧眼がほとんどだった。多少なり他の地域の血がはいっている人もいるけれど、彼のような茶色の髪も珍しい部類にあった。
「まぁおれは、身寄りがなかったからな」
「あ……ごめん」
　悪いことを訊いてしまった。謝るエルに、彼はいいってとなれたように笑った。
「おれ、親に捨てられたかなんだか知らないけど、物心ついたときから行商の荷車の中にいたんだ。年くうにつれていろいろ仕事もらってさ、あちこち転々としてた。でも別に、それが嫌だったわけじゃないしさ」
　だから気にすんな。な？　と、ジャスティンが顔をのぞきこんでくる。
「自分で言うのもなんだけど、小さいころのおれはけっこうかわいい顔してたわけよ。だからいつも花とかの売り子やっててさ。いずれ大きくなったら、ひとりで花屋やるぞーって決めてたわけ」
　そしてちょうど、行商で立ち寄ったこの町に、花屋がひとつもないことを知った。そして花屋の店舗と家がまるまる残っていることを知り、すぐさまこの町に住むことを決めたのだそうだ。

「まぁなんていうか、住めば都だし。おれはこの町好きだし。みんな優しいし」
都市にくらべて、やはり田舎は医者が少ない。だからささいな病で命を落としてしまう人も多く、身寄りをなくした子供たちを助けたのは、それこそこの団結した商店街の人々だった。生活の一方では吸血鬼の影におびえていたというのに、よくこんな明るい町になったなと、エルはしみじみ思ってしまう。
自分がその吸血鬼に育てられたというのは、誰にも知られてはいけない。口止めをしたのは他でもない、吸血鬼本人だ。
「……話がそれたな。んで、まぁ吸血鬼の話だけど」
話に夢中になりすぎて、ジャスティンが薔薇を短く切ってしまった。彼はしまったと呟いてそれを眺め、おもむろにエルの耳にひっかけた。黒い髪に薄桃色の薔薇がよく映えたようで、彼は一人、満足そうにうなずく。
「この店の前の店主が、最後の犠牲者なのは知ってるだろ？　その人の死に方、ひどかったらしい」
「ひどかった？」
「床一面、血の海だったらしいんだ」
ちょうどエルは、花束に赤いリボンを巻こうとしていたときだった。思わず手を止め、とっさに、黄色のリボンに持ち替えた。
「店主が死んだのは自室だったらしくて。窓があいてて、血の跡が窓の外にも階段にも、あちこちにあったらしいよ。それだけ血を流して、さらに血を全部吸われて真っ青だったらしい。その人も、襲われる前からけっこうおかしな行動してたらしいから、そうとうおびえてたんだろうな……」
話を聞いていたエルが、ふと、声をあげた。
「ジャスティン。自室って、もしかして……」
「そう。今使ってるおれの部屋」
あっけらかんとした口調に、エルは軽いめまいを覚えた。
商店街の店は、どれもみな似たようなつくりだ。二階は大人数の

家族でも十分満足できるような、広いつくりの部屋がいくつもあった。その店主もまた独り身だったというけれど、他の部屋もあったはず。なぜわざわざ、ジャスティンは惨劇の起きた部屋で寝泊りしているのか。

「だってさ、せっかく店引き継いでるのに、その店主さんの部屋を閉めきっちゃうのってちょっと失礼じゃないかと思ったんだ。別に血の跡が今でも残ってるわけじゃないし、広いし、日当たりいいし。家具も残ってたからいちいち他の部屋を作るのが面倒くさいのもあった」

その自室に、エルは何度もお邪魔していた。寝室はドアを開け放ち、リビングと一緒になっていた。たしかに、エルが気づかないほど、普通の部屋とまったく変わらなかった。多少女らしさは残っていたものの。

「そう……」

しぶしぶ納得しながら、エルは作業を続ける。

はさみをもつ手が、小刻みに震えていた。

話を聞けば聞くほど、今のフェリとはまったく違う。

フェリはその人々の噂を否定しなかった。血を吸っていたことも認めていた。けれど決して、自分の口から過去のことを話そうとはしなかった。

エルが見ていたのは、今のフェリだった。やさしくて、強くて、エルを大事に育ててくれたやさしい父親だった。吸血鬼が姿を消したあとの、誰も知らない姿だった。

「……エル？」

すっかり手を止めてしまったエルに、ジャスティンが心配そうに声をかける。それで我に返って、エルはあわてて笑顔をつくった。

「ごめん、ちょっと考え事」

「考え事？」

なに？　と彼は訊くけれど、エルは答えない。彼に話したからといって、決して答えが見つかることはないのだから。

2、イングリッシュ・ローズ―3

エルは、自分の生い立ちを知らない。赤ん坊の頃からフェリに育てられている。たぶんエルを育て始めたころの彼は、町で人々を震撼させた吸血鬼ではなく、引退して隠居を決め込んだ、今の彼なのだろう。

エルは自分の出身地はおろか、誕生日も知らない。十七というのは、フェリに育てられてから数えた年齢だ。

フェリは決して、エルの素性について語らなかった。彼も知らないのだろう。道端に子供が捨てられることも、そうそう珍しいことではない世の中なのだから。

○○○

「――花を取りに来たのですが」

あのー、もしもし。何度も呼びかけられて、エルはようやくその声が自分に向けられたものだということに気づいた。

いつの間にか雨が降り出していたようで、店の屋根を雨粒が叩いている。降り出したのにも気づかないぐらい、エルは店の奥で深く眠ってしまっていたらしい。

「ニコラです。注文していたお花、できてますか？」

店番している最中の居眠りなんて、ジャスティンに見つかったら大変だ。とびおきたエルは口元をぬぐいながら、店の外に立つニコラ氏へとすっとんでいった。

「すいません、これ……！」

ニコラ氏用につくった花束は、L．D．ブレスウェイドという名前のついた、真紅の薔薇が入っている。彼はいつも、自分がとりに来る花束にだけは、赤い花を入れてほしいと言っているらしい。ただ真っ赤な花束を作るのが嫌いなジャスティンは、ピンクやパープ

ルの花も添え色として加えていた。
花束を渡しながら、エルはちらりと店の外を見る。雨音は静かだけれど量は多いようで、水たまりに広がる波紋の数が多い。空気も冷たくなってきていて、自然と腕に鳥肌がたった。
「ご注文どおり、赤い花を使いました」
ジャスティンも背が高いが、ニコラ氏はそれよりも大きいようだ。さすが名家の人らしく、上から下まで黒で統一した服の生地はとても上質なもの。年齢がうまく特定できない雰囲気をかもし出しているけど、話を聞いたらまだ五十路には届いていない。背筋がぴんと伸びていて、深くかぶった帽子とコートのフードで、顔はよく見えなかった。
「じゃあ、お金はいつもどおり」
渡された皮の袋の中身は、確認しない約束だった。手に持ってわかる。これは金貨で、普段店で売る花束の値段より何倍も多かった。
「今日は、店主さんは？」
「……今、配達中なので」
ニコラ氏のさしていた傘の先から、雨粒が滴り、足元におちる。ジャスティンは傘も持たずに配達に出かけたから、今頃ずぶぬれになっているはずだ。配達を頼んだはずのニコラ氏のおかしな質問に、エルはすこしばかりむっとしてしまった。
その態度が伝わってしまったのだろう。ニコラ氏はじっと、エルをみつめた。
「何か？」
影が濃すぎて、瞳がよく見えない。帽子を深くかぶりすぎて、髪の毛ですらよく見えない。エルが見るニコラ氏はいつもこうして帽子をかぶっているので、まともに首から上を見ることはなかった。
「……いや、なんでもない」
年頃の女の子をそんなにじろじろ見つめるなんて。やはり、噂もあながち嘘ではなさそうだ。声をかけられる前に、エルは一歩、後ろへ下がった。

ニコラ氏の視線が、顔からつま先、つま先から顔へと、まるでなめるように動く。そして、視線が胸の上でとまり、動き、顔に。エルはさらに一歩下がった。
「君、名前は？」
「エルです」
強く名乗ることで、エルは拒絶をあらわした。きっと眦をあげると、彼も肩をすくめ、視線を花束へと戻す。
「ありがとう、お嬢さん。店主さんによろしくね」
「はい、ありがとうございました」
こんな態度をとっては、もうジャスティンは仕事をもらえないかもしれない。けれどエルは、拒否し続けた。
あの視線が、怖いのだ。なぜかはわからない。けれど見つめられると、どうにも落ち着かなかった。
ジャスティンに見つめられると、落ち着かなくなる。その理由をエルは知っている。けれどニコラ氏の視線は、理由もわからず、鼓動が早くなった。
背筋をぴんと伸ばしたまま、店を去る後ろ姿を、エルはじっと見つめる。道の交わる噴水を抜け、さらにまっすぐ行けば、そこには教会が待っている。雨のカーテンで、教会の十字架はかすんでいた。
教会は西にあり、夕陽が沈むときに光を受ける十字架の輝きは、いつ見ても美しい。エルの帰る東の道は、この町で一番先に闇がおとずれるところだった。
東の道をすすんだ町の外れにあるのが、フェリの館だ。館に住む、かつて人々に恐れられたはずの吸血鬼も、ニコラ氏のような恐ろしい瞳をすることはなかった。
ジャスティン、早く、帰ってきて。エルはエプロンの胸元を強く握り締める。雨はやむどころか勢いを増して、しぶきに町の景色を朦朧とさせていた。
まるで店の中に一人閉じ込められたようで、肌寒さがいっそう強くなる。震える腕を抱き、エルはジャスティンの上着を勝手に羽織

った。
上着に染み付いた彼の香りと、店に満ちた薔薇の香り。それに身をうずめて、エルはじっと、ジャスティンの帰りを待ち続けていた。

●●●

エルは最近、町で何をしているのだろう。
フェリは窓から暗くなった庭を見下ろし、首をかしげた。
いつもなら、エルはもう帰ってきているはずだ。日中降ったらしい雨ももうやんでいるし、雨宿りを終えてももうついている時刻。なにか事件に巻き込まれたのだろうかと耳をそばだててみても、町からはいつもどおりの、穏やかな団欒の声しか聞こえなかった。
エルももう一人でなんだってできるのだから、心配する自分は過保護なのかもしれない。わかっていながらも、フェリは久しぶりに庭へと降りた。
庭の荒れ果てた一角は、通り道からちゃんと「廃屋」に見えるようにカモフラージュさせたものだった。人目につかない奥へとすすめば、エルが毎日手入れをする薔薇園がある。普段食卓に並ぶ薔薇はここでとれたもので、いわば家庭菜園のようなもの。町で仕入れた薔薇は本当に稀だったのだけど、最近はここの薔薇を見る機会のほうが減ってしまっていた。
もともと、エルは食料の買出しに町に行っていたけれど、変化が訪れたのは去年、花屋ができるようになってからだ。その年の薔薇園は病気が多くて花も少なく、できたばかりの花屋で薔薇を買いながら、病気の対処法を教えてもらっていた。
薔薇園の調子が戻った今も、エルはほとんど日をおかずに通っている。そして帰りには薔薇のほかにもたくさんの買い物をして帰ってくるけど、エルが持ち歩くお金はそんなに多くない。
彼女はどうやら、町で働いているらしい。
「別に、貧しいわけではないんだけどな……」

呟き、フェリは空を見上げた。雨があがったとはいえ空にはまだ雨雲が残っていて、月どころか星ひとつ見えない。フェリの目はこの暗闇に慣れているけれど、エルには見えづらいに違いない。

夜の町は、誰も出歩かない。みんなそれぞれ家にこもっている。外に出たら吸血鬼に襲われるから……つまりフェリを警戒しているから。そう考えると夜の道は案外安全かもしれないけど、やはり娘の一人歩きが不安になり、フェリは館の門を開けた。

外に出るのはそう珍しいことではない。太陽さえなければフェリも思う存分行動できるのだ。館にこもることに飽きたときには、いつもエルが寝静まったのを見計らって、散歩に出たりもしていた。

舗装の整っていない道はあちこちに深い水たまりができていて、足元に気をつけないとズボンまで汚してしまう。けれど長年住んだこの道はもう覚えこんでしまっているので、フェリは軽快にステップを踏みながらすすんだ。

月明かりがないせいで、道はとても暗い。夜目のきくフェリにも、世界がただ黒ずんでうつり、地面を這う虫の気配ですらまったく感じなかった。風がささやかにふいているけれど、心地よい音色にはならない。鼓膜をやたらに震わす、ただの雑音だ。

その世界に、さして恐怖は覚えない。フェリは何年も何十年も何百年も、この暗闇を生きてきたのだから。

昔はこの道を、夜泣きのひどいエルを抱いて歩いたものだった。フェリの目を盗んで勝手に出歩いて迷子になって、探し出すためにこの道を通った。初めて一人で町に行くといって、帰りが心配になってこうして待っていたこともある。

誰もいない道を、エルと一緒に歩く。誰かと一緒にいる。フェリには相手が娘しかいないけれど、彼女は町で、たくさんの人と触れ合っているようだ。

2、イングリッシュ・ローズ―4

「……いた」
道の先に見えた人影に、フェリは手を振った。
「エル！」
しんとした空気の中、突然響いた声に驚いたのだろう。小さな悲鳴が聞こえた。
「……フェリ？　迎えに来てくれたの？」
けれどそれが父親だとすぐに気づいて、エルはすぐさまかけよってきた。水たまりにはまるのも気にしない。姿を見るなり駆け寄って、腕に飛び込んでくるのは、昔から変わらなかった。
「帰りが遅いから、心配したんだ」
「ごめんね。ちょっと、いろいろあって」
抱きしめるエルから、薔薇の香りがする。いつもとは違う高貴な香りがするけど、その手に薔薇はなかった。
「雨に濡れなかった？」
「うん、大丈夫。ちゃんと雨宿りしたから」
「こんなに遅くなるならお店に泊めてもらえばよかったのに」
言って、フェリはしまったと思った。気づいてはいたけど、エルは秘密にしているつもりだったのだ。
「……ばれてた？」
「まぁね」
「ごめんなさい」
「どうしてあやまるのさ」
しゅんとたれた頭を、フェリは乱暴になでてみせる。自分が予想していなかったのだろう反応に、エルはきょとんを顔をあげた。
「ずっと館にこもってるより、外で出歩いたほうがいいと思うよ。町には、僕が教えられないいろんなことがあるしね」
「怒らない？」

「怒らないって。内緒にされるとちょっと寂しいけど」
ごめんね、と、エルが舌を出す。雲が切れて月が見え始め、その横顔がやんわりと照らされた。
先ほどまであれほど静かだった道が、エルがきてから、鮮やかに色づき始めた。道端ではかえるが鳴き、森の木々でふくろうが鳴いている。先ほどまで雑音ばかりだった風が、ゆるやかに木々を揺らしていた。
いつもこう。エルがいると、フェリのまわりの世界がかわってくるのだ。
「明日も町に行きたいんだけど、いい？」
「いいよ。どうせ、ダメって言ってもエルは勝手に行くんだしね」
空気をゆらす柔らかい声。フェリを見て照れくさそうに笑う顔。
その一つ一つが、フェリを和ませる反面、心にかすかな痛みを与えるのだった。

3、サンスベリア―1

3　サンスベリア

「ジャスティン、具合どう？」
「ぜんぜんへーき」
「平気じゃないでしょ、こんなふらふら歩いてて」
エプロンをして店に下りようとするジャスティンを、エルは無理やり部屋へと押し戻した。
「やっぱり今日もきてよかった……」
フェリに町で働いているのがばれて、よかったのかもしれない。今日はなんとしてでも、店に来なければいけないと思っていたのだ。
「エプロンとって。服も着替えて。今日はあたしが店出るから、ジャスティンはここで寝ててよ」
「でも……」
「その熱で、仕事なんてできないでしょ」
昨日。配達から戻ってきたジャスティンは案の定ずぶぬれで、着替えをしてもあたたかい飲み物を飲んでも、やたら寒がっていた。そして日が暮れたころにはついに熱を出し、エルが遅くまで様子を見ていたのだ。
本人は一晩寝れば治ると言っていたけど、やはりだめだった。昨日より具合が悪そうで、熱のために彼自身の意識も朦朧としていた。

立つことですら辛そうなジャスティンをどうにか着替えさせ、ベッドに戻す。今まで体調を崩して店を休んだことがないらしく、彼はとても悔しそうだった。
「ジャスティン、買い付けとかで、最近休んでなかったじゃない。きっと疲れがたまってたのよ」
食欲もないらしく、エルがつくったスープもほとんど飲もうとしない。それでもいくつか口に入れさせ、薬を飲ませると、彼はそのままことんと眠ってしまった。
「今のうちに、なにか買ってこないと……」
サマンサの店に行って、食材を買うついでに、栄養のある料理を教えてもらおう。エル自身、誰かの看病をするのははじめてのことだった。
フェリはまず、風邪をひいたりしなかった。体調を崩して寝込むのはいつもエルのほうで、額の汗を拭いてくれるのは彼だった。

「あのジャスティンでも、風邪ひいたりするもんなのね」
「なにも、そんな言い方しなくても……」
事情を話すと、サマンサは開口一番、そう言った。
「やけに今日は店に出てないなと思ったけど、いつもの寝坊じゃなかったのね……エルちゃんと一緒に寝坊するなら全然許すけど」
一瞬、エルは言われた意味がわからなかった。そしてしばらくしてその意味を理解して、顔を真っ赤にすると、彼女はにやりと笑ってみせた。
「まぁ、体調崩してるときはやっぱり誰かにいてもらうと安心するものだしね。今日はジャスティン坊やの看病してあげなさい」
のどを潤す果物を次々かごに放り込みながら、サマンサは「お代はいらないよ」ときっぱり宣言する。すこし男勝りだけど見た目も十分綺麗な彼女に、どうしていまだに恋人がいないのかエルには不思議でたまらなかった。

「寒気がするようなら、まだ熱が上がるってことだからね。毛布増やして、部屋も温めてあげて。あ、でもちゃんと換気はするのよ」
それから栄養価の高い野菜をいくつか入れて、料理も教えてくれる。どうしてそんなに物知りかというと、彼女の下にはたくさん弟がいるのだ。昔は弟たちの世話をしていたので、それがすっかり身に染みてしまっているらしい。
「水分はこまめにとること。汗かいたら服もかえてあげるのよ」
看病のしかたがいまいちわからないと相談したエルに、サマンサは何も言わなかった。エルの年齢ならそんな知識あって当然ではないかと指摘されるのではと、内心すこし不安だったのだ。
「男ってのは、すこし風邪ひいただけで大げさなこと言うんだよね。まぁでも、それにかまってあげてちょうだいな」
サマンサの教えを逐一頭に書き留めながら、エルは何度もうなずく。食材から替えの肌着までぎっしりつまったかごを抱きしめるエルを見て、彼女はまだ、目を三日月のように細めた。
「ジャスティンのこと、本当に好きなんだね」
「えっ……」
突然のふりにどう答えるべきか戸惑うエルに、サマンサはすべてを見通した目でうなずく。短く切った髪が、日の光にあたってきらりと輝いた。
「ごめんね、なんかずうずうしく言っちゃって。なんかエルちゃん、わたしの友達に似てるから、ついね」
エルの黒い髪を撫でながら、彼女は言う。その瞳は自分と、その友達を重ねているようだった。
温かみのある反面、居心地が悪くなって、エルは話題を変えた。
「……サマンサさんは、好きな人とか、いないんですか？」
「私？」
エルの質問は思いもよらなかったようで、彼女はきょとんと目をまるくする。彼女の年齢はまだ四十にも届いていなく、結婚をあきらめるには早すぎる。そもそも若いころはとてももてていたはずな

のに、なぜどの男性も断ってしまっていたのか謎でしかたなかった。
「サマンサさん、もてるんでしょ？　どうしてみんな、断っちゃうの？」
現に、彼女は今も人気がある。買い物に来る男性客に、嫁にこないかと何度言われていたことだろう。
「……私はね、忘れられない人がいるの」
照れくさそうに、彼女は頭をかいた。
「前に、ね。頻繁にうちに来る人がいたの。着てた服で顔はよくわからなかったけど、やさしい声の人で、よく私に話しかけてくれてさ」
「その人、今も来るの？」
「来ないよ。十年ぐらいずーっとこの町に来てたけど、来なくなってもうずいぶんたつから……どこか別の町に引っ越しちゃったんじゃないかな？」
手持ち無沙汰に商品の配置を変えながら、サマンサはまた、笑う。その笑みがいつもと違う、うら若い乙女のようで、エルは思わず頬が緩んだ。
「その人のこと、好きだったの？」
「好きっていうか……うん、好きだったね。それですっかり、婚期逃しちゃったんだけどさ」
あの時名前でも訊けばよかった。彼女の呟きは、後悔がにじんでいる。快活な彼女が、名前も訊けないなんて、一体どんな人だったのか。エルの好奇心がくすぐられた。
「また会えたら、どうするの？」
「たぶん、何も言えなくなっちゃうだろうね。……ってほら、もう店に戻りなさい。相棒が泣いてるかもよ？」
照れ隠しに、サマンサが背中をはたく。痛みに混じったぬくもりに、エルは笑いをこらえながら、ありがとうと礼を言った。

○○○

「……おれ、死ぬかもしれない」
サマンサの教えが見事的中して、エルは思わず吹き出しそうになった。
「熱が全然下がらない……飯も食えない……おれ、このまま熱上がって脳みそが沸騰して死ぬんだと思う」
「ジャスティンにかぎってそんなことおこり得ないから」
汗だくの額を拭き、水分を取らせる。部屋の空気がこもってむっとしていたので、窓を開けて風を入れた。
部屋の隅に置いたサンスベリアも、空気を綺麗にする効果があるのを思い出し、鉢を引きずりベッドのそばに運んだ。
「寒気、まだする？」
「肩が……ざわざわする」
寒いと言うわりに、足は布団を蹴飛ばて丸出しになっている。触れるととても熱くて、肌着も汗を吸って重くなっていた。
寒気があるなら、やはり暖めたほうがいい。けれど、水分を多くとってこれだけ汗をかいているのだから、身体がもっと冷えてしまうかもしれない。迷いながらも、エルは声をかけた。
「一回着替えたほうがいいよ。服、どこにしまってるの？」
「もうない……」
「なんでそんなに少ないの？」
「洗濯するのめんどくさいから、ためてからまとめてやるんだ」
なるほど、だから月に数回、店の中に洗濯物が干してあったのか。納得しながら、エルはサマンサが貸してくれた服をおしつけた。
「これ、着替えて」
「どしたの？」
「サマンサさんから借りたの」
きっと、家族が着ている服なのだろう。ズボンを広げて、ジャスティンは呟いた。
「脚……長さ足りないと思う」

「別に誰も見ないんだから、着替えなさい！」
はーい、とうなずくジャスティンは、すっかり子供に戻ってしまっている。ベッドの上で身体を起こし、頭をふらつかせながら上着をまくりあげた。

3、サンスベリア―2

「あたし、たまった着替え洗ってるから。シーツも出しといてね」
思いがけずあらわになった肌を見て、エルはあわてて部屋から出ようと背を向ける。フェリ以外の男性の肌を見る機会なんて、まったくなかったことをエルはいまさら思い出した。
「……待って、エル」
ジャスティンの声がとても頼りなくて、エルはドアノブを握り、振り向いた。
本当に男の人は、風邪で弱くなるんだな。
「まだ、ふらふらするの？」
「する」
「お腹はすかない？」
「のどかわいた」
熱に浮かされた目は涙で潤み、赤くなった頬は弱弱しい呼吸とともにふるえている。いつも大きな口をあけて笑う顔が、今にも泣き出しそうに歪んでいた。
再び、ジャスティンのもとに歩み寄る。窓からの風を受けたスカートが、サンスベリアの葉とともにゆるりと揺れた。
「……いつも、一人だったんだ」
「ジャスティン？」
上着を脱いだまま、彼は呟く。中途半端に袖に通された手が、力なく太ももの上に乗っていた。
「風邪ひいたときとか、さ。いつも一人で寝込んでたんだ。具合悪くて動けなくて、みんな仕事があるから忙しくて、誰もいなくて……」
その瞳は、うつろに自分の手を見下ろしている。夢の狭間にいるようで、頭の中が当時の自分に戻ってしまっているようだった。
「行かないで、エル」

「ジャスティン……」
エルがそっと手を伸ばすと、髪は汗で湿っていた。まるで湯気が昇っているかのように、身体が熱くなっている。エルの手が冷たくて気持ちいいのか、ジャスティンは額に乗せられた手にほっと目を細めた。
風邪をひいて心細いという経験が、エルにはなかった。
フェリはいつも、そばにいてくれた。風邪をひいたときはもちろんずっと看病してくれていたし、夜の闇が急に怖くなって、泣き出したときもすぐにとんできてくれた。
幼いころから、エルは一人ではなかった。太陽の昇っている時間でも、フェリは起きていた。彼が吸血鬼の生活に戻ったのも、じつはつい最近だったのだ。
エルは知っている。具合が悪いときに、そばに誰かいてくれる心強さを。熱で苦しいときに、そえてくれる手のあたたかさを。
眠れないときにかけてくれる、おまじないのキスを。
「……ジャスティン」
彼の額に、エルはいつものように、そっと口づけた。
ジャスティンの汗の香りがする。けれど、嫌いではない。驚いて目を開いた彼に、もう一度、おまじないをかける。
辛いときの寂しさに、年齢なんて関係ない。
フェリと交わす、眠る前の挨拶。それはおやすみの挨拶であり、良い夢をみられますようにのおまじない。
それをフェリ以外にかけるのは初めてだった。

無意識のうちに自分の唇に触れながら、エルはジャスティンが眠っているのを確認し、部屋から出た。
着替えを洗わなければならないし、店も開けたまま放置してしまっている。仲間意識の強い町だから、勝手に商品を盗まれるということは無いだろうけど、やはり開けている以上は店に立たなければ

ならない。
わかっているのに、エルの足は、家の奥の物置の前で止まってしまう。
ジャスティンは眠っている。他に、誰もいない。念のためあたりを見回し、エルは意を決してその重い扉を開いた。

●●●

「聞いてる？　エル」
「……ごめん、聞いてなかった」
最近、エルは上の空だ。
フェリは花瓶の水をとりかえる娘を見ながら、そう思った。
しばらくの間、足繁く町に通っていたと思ったら、ここ一週間はぱったりと行かなくなっている。買い物程度には行くけれど、どうやら働いてはいないようだった。
クビになったのだろうかと最初は心配したけれど、そういうわけでもないらしい。あえてエルの行動について問いたださないのは思春期の娘へのささやかな心遣いだけど、毎日こうもぼんやりされると、お父さんは心配だ。
「なんの話だっけ？」
話をふってきたのはエルのほうだったはずだ。庭の薔薇が今年は綺麗に咲いたよ、と報告してきたのに。ブルームーンが綺麗だよ、とも言っていたのに。すっかり忘れてしまっている。
「……あのさ、エル」
「なに？」
「仕事、行かなくていいの？」
おそるおそる、フェリは訊いてみる。嫌がられるのではという心配は杞憂だったようで、彼女はあっさりと答えてくれた。
「ちょっとお休みなの」
「休み？」

「店長が、買い付けで遠くまで行くんだって。長くいなくなるから、店番もしないでいいよーって」
だから、お休みなの。花瓶のふちいっぱいまで水を注いで、エルは戻ってきた。つんだばかりの薔薇をさすと、あたりまえだけど、水があふれてしまう。
「最近ずっと働いてたからね。すこし休めってさ」
「そう……」
水がこぼれたことにも気づいていない。フェリが目の前で手を振って、ようやく焦点があった。
「これですこし家の掃除できるね。ごめんね、サボってて」
「いや、それは全然いいんだけどさ」
もとよりエルは、家の掃除ばかりしていた。掃除をして、書庫から本を持ってきて、読んで。薔薇の世話と、家事全般が日課で、それは年頃の少女にしてはあまりにも活動がなさ過ぎた。今の生活のほうがよっぽどいいのだ。
ただ、家にいても心ここにあらずで、自室にこもりっぱなしだったりすると、やっぱり心配になる。ふと見た顔がにやけていることも多く、エルが何を考えているのかさっぱり見当がつかなかった。
「てっきりクビになったかと思って」
「それはまだ大丈夫」
含みのある言い方だな、と思ったけれど、フェリは何も言わないことにした。上の空の原因はわからないにしろ、これでとりあえず、家にいる謎は解けたのだ。
さしだされた薔薇を受け取り、フェリは唇を寄せる。何を思ったのか、エルまで薔薇を口に含もうとした。
「食べても……おいしくないと思うけど」
「うん、苦いかも」
花びらを数枚かじって、エルは顔をしかめる。そしてごまかすように、えへへと笑った。
その表情に、フェリははっとする。けれどそれに気づかれないよ

う、また一輪、薔薇を手にした。
持つ手が、唇が、震える。けれどそれを、エルに悟られてはいけない。甘いはずの薔薇はまったくの無味で、滑らかな舌触りはまるで砂のようだった。
幸い、上の空な彼女だ。フェリのことを見ているようでまったく見ていない。早まる動機と呼吸をこらえようと、フェリは膝に爪を立てた。
「ねぇ、フェリ」
「ん？」
「おやすみの挨拶してたのって、あたしが小さいときから？」
突然、話が変わった。不思議に思いつつも、フェリは考える。
「まぁ、そうかな」
嘘だ。けれど、真実は言わない。
「どうしてしようと思ったの？」
それは、訊かれても困る。
「まぁ……小さいときにそういう習慣を作ったら、やさしい子に育つかなと思ってさ」
とっさに考えた言葉に、エルはふぅんと納得してくれた。
「嫌だった？」
「ううん」
頬杖をついて、エルは外に目をやる。その横顔、手首の加減、首筋から鎖骨までのなだらかな肌。それに、嫌でも目がいってしまう。
花瓶の中の薔薇たちが、フェリの指先が触れるか触れないかのうちに、いっせいに枯れ落ちてしまった。

4、プリザーブドフラワー―1

4　プリザーブドフラワー

「――で、坊やは治ったなりさっさと出かけちゃったわけ？」
「そうなの。買い付けに行かなきゃーって、飛んでっちゃった」
ぶりかえしたらどうすんのさ。店先で、サマンサが呟く。からりと晴れた商店街は、店のガラスが太陽を反射して、道に転々と明かりを灯していた。教会の十字架も、日の光を浴びて、まるで日時計のように光を放っている。
「今日帰ってくるはずで、店開けて待っててって言われてたんだけど……」
店を開けて、掃除をしたところで、売れそうな花はほとんどない。しかたなく店先に出たところで、サマンサが声をかけてくれた。
「どうする？　でっかい花束抱えて帰ってきたら」
「まぁ、買い付けにいったんだから、花ぐらい持ってくるとは思うけどね」
エルとジャスティンの間になかなか変化が訪れないことに、サマンサはやきもきしているようだった。
「毎回果物とか持ってってるんだし、餌付けは完璧なのよね」
「餌付けって……」
「あとは押し倒しちゃうとか？」

「無理ですあたし色気ないから」
「そういうのは色気じゃないのよ」
指先に髪をからめるエルを見て、サマンサが小さく嘆息した。
エルにはわかっている。自分が臆病になっていることを。すべてをさらけ出してしまえばいいのはわかっているけれど、でも自分には、本当に住んでいるところですら明かせない事情がある。
フェリと一緒に住んでいるのが嫌なわけではない。ただ、町で吸血鬼の話を聞いているジャスティンが、フェリのことを知っても受け入れてくれるかが不安だった。もし万一それを他の人に漏らして、館が襲われるようなことだけは、あってはならないことだから。
「サマンサさんだって、例の愛しの君、探せばいいじゃない？」
「こんなおばさん、誰も相手にしないわよ」
軽く頭を小突かれて、エルは笑う。その笑みを見て、彼女はふと、表情を消した。
「エルちゃん」
「なんですか？」
「エルちゃんは、本当に隣町の子なのよね？」
念を押すような口調に、エルは内心戸惑いながらも、力強くうなずいた。彼女もそのうなずきに安堵したのか、ほっと息をつく。
「どうかしたんですか？」
「ちょっとね」
その、ちょっとね、に闇がある。深く聞きだせず、エルはあきらめるしかなかった。
「じゃああたし、戻ります」
「うん。餌いっぱい用意して待ってなさい」
大きなキャベツをひとつ手渡しながら、サマンサはエルに、そっと耳打ちをした。
「吸血鬼には気をつけてね」
その胸元で、小ぶりの十字架のネックレスが、きらりと光を反射した。

昼ご飯の時間が過ぎてもジャスティンは帰ってこなく、エルは一人で食事をとった。
店の掃除はもちろん、ジャスティンの家の掃除までしてしまった。合鍵をもらっているのだから、勝手に立ち入っても怒られないはずだ。サマンサからもらった野菜で夜ご飯の準備をして、それでも暇をもてあましてしまう。
「業務日誌でも書こうかな……」
ジャスティンはエルが働くようになってから、店に業務日誌を置くようになった。一人で店番をしたときにエルが困らないよう、備品がどこにあるかなども書いておいてくれる。エルは店番している間、何度この日誌に助けられたかわからない。
そしてエルは日誌に、今日はこんなことがあった、という報告を記すのだ。

――私の家の庭でも、薔薇が綺麗に咲きました。店の庭の花も見ごろなので、店長、早く帰ってきてくださいね。

書いて、エルは鉛筆を転がす。これじゃあまるで交換日記だ。
店の裏口から外に出て、庭の様子を見る。その庭の手入れをするのはもちろんジャスティンで、そこで育てた花も店先に並ぶことがあった。あいかわらず綺麗に整えられた花たちは、日光を浴びて思う存分葉を伸ばしていた。
薔薇園と化している館の庭と違い、店の庭は実にさまざまな植物がある。そのひとつひとつに声をかけながら水をやるジャスティンの姿を、エルはいつも見ていた。
店に行けば会えるはずの人が、いない。それがなんだか寂しくて、エルはそっと、二階へとあがった。
あいかわらず女性ものの家具でそろえられている部屋は、台所と

つながっているだけあって、エルのつくっていた料理の香りが漂っていた。今日は大きなキャベツをもらったから、ロールキャベツにしてみた。ジャスティンは好き嫌いなく何でも食べるから、献立に悩むことはなかった。

水でも飲もうかと台所に行こうとして。エルのまぶたの裏に、いつも閉ざされている物置がうつった。

物置には、ジャスティンが使わないと判断した家具などがしまわれているはずだ。先代の花屋の主人の持ち物なども、すべてここにしまわれている。だからエルは、女性であることは知っていても、店主の顔や名前はまったく知らなかった。

自然と、足がそちらに向いてしまう。いけないことなのはわかっているけれど、どうしても、身体が好奇心をおさえられなかった。

先代の花屋の店主。花屋を営むというイメージから、勝手に綺麗な女性なのだろうと思う。エルの父は、その彼女を殺めたのだといわれている。そんな人の情報を知ってしまったら、自分は花屋にいづらくなるかもしれない。わかっているけれど、ノブにかける手はとまらなかった。

部屋に踏み込み、まず空気に舞うほこりの多さに顔をしかめた。物置というのだからしかたないけれど、中も雑然として、足の踏み場も少ない。

しまわれているのは、主に本や、人形といった類だった。たしかにジャスティンには興味のないものだし、人形などをそばに置くのはためらわれるのだろう。

綺麗な細工の箱だと思ってふたを開けると、オルゴールだった。ねじを巻いたままだったようで、音が鳴り、エルはおどろいて箱を投げてしまった。

「あっ……」

いけないと、拾い上げる。幸い傷はなく、音楽も鳴り続けていた。この家には自分一人しかいないのだから、多少物音がしても、見つかることはないはずなのに。自分の臆病さに、エルは一人苦笑した。

オルゴールを元に戻し、衣類の入った箱に気がつく。こういう細かいものも、どうやら物置にはたくさん残っているようだ。
そしてエルは、床に散らばっているノートを一冊、拾い上げた。散らばっているのは、ずっと前からだ。何冊もあるノートは、均等に埃がかぶっり、白く積もっている。
「業務日誌……」
表紙に、ジャスティンの荒っぽい字とは正反対の、女性らしい丁寧な字でそう書いてある。彼女もまた、日誌をつけていたのだった。
エルはそのノートを持ったまま、部屋を後にした。いけないことをしていると、鼓動が高鳴っている。けれど、どうしても見ておきたかった。
フェリが最後に手をかけた人を知りたかった。
丁寧に拍子についたほこりをぬぐい、震える手でページをめくる。そこには一日数行の、簡単な文章が並んでいた。

――今日はあまりお客が来なかった。やっぱり雨の日はみんな家にいるみたい。

――サマンサと話ばかりしてしまった。彼女の誕生日も近いから、サマンサの好きなマーガレットを仕入れよう。

業務日誌というか、日記というか。彼女一人で働いていたのだというから、たしかに引継ぎの連絡はさほど必要ない。
かといって、細かく日々のことを記しているわけでもないらしい。それにエルはほっとしていた。彼女の感情まで赤裸々に書き連ねてあったら、最後まで見る勇気がなかったから。
日誌は毎日書いてあると思いきや、何週間もさぼっていることもある。ただ、日誌を書く習慣は続いているらしく、このノートも何代目かのものだった。読み進めても、フェリがあらわれることはなく、該当する年に使われていたものではないようだった。

エルはもう何度も、こうして物置から日誌を持ち出しては、目を通していた。

4、プリザーブドフラワー―2

ジャスティンがそばにいないとき。いけないとわかっていても、足が物置へと吸い寄せられていく。そして、いけないと思っていても、日誌に手を出してしまう。館にももう何冊にものぼるノートがあり、ジャスティンがいない間、自室にこもって日誌を読みふけっていた。

――吸血鬼の被害がまた増えてきたみたい。サマンサに十字架を持てといわれたけど、襲われる人もみんな持っているのだから、効果はないのだと思う。

吸血鬼という単語にはっとしたけれど、その日前後に、フェリの記述はなかった。どうやらフェリはまだ、彼女の前にあらわれてはいないようだ。

すっかり日誌を読むことに夢中になって、エルは日が傾きはじめても、部屋の明かりをつけなかった。ジャスティンの心配もそこそこに、日誌の中の彼女のことに夢中になってしまう。気になり、心配でたまらない。

――あの人は、また来てくれるかな。

どうやら彼女は恋をしていたらしい。たまに、『あの人』の存在がちらついている。店のお客のようで、毎日来ることを待ち望んでいるようだった。

――あの人は今日も来ない。話がしたいのに。

――私のことはやっぱり好きではないのかな？

――せめてもう一度会えたら、私もちゃんと考えを決めるのに。

三日連続、恋に悩んでいる。それがたまらなく切なくて、エルは急ぎ早にページをめくった。

――また吸血鬼の被害があった。最近はみんな、家で襲われているみたい。森で見つかることはほとんどない。

再び、吸血鬼の記述。けれど彼女はまだ、フェリに会っていない。日誌の主は、吸血鬼に興味があるようだった。自分の命もいつ狙われるかわからないから、対処法を見つける目的もあったのかもしれない。過去の日誌を読んでは、フェリの手口が事細かに記してあることもあり、当時の吸血鬼に対する町の雰囲気のようなものがひしひしと伝わってきた。

――吸血鬼が、人の肉まで食べるっていうのは本当かな？　森で見つかった遺体は、たしかに損傷があったけど……

――吸血鬼は、なんのために人を襲っているんだろう？　もちろん生きるためだろうけど、なんだかそれ以外のものもある気がする。襲う手口も、遺体を置いていく形も、ほとんど同じなんだもの。

――彼はあたしたち人間のことを、どう思っているんだろう。ただ襲うだけなら、なぜあんなにも綺麗な姿にしていくのかしら。みんなまるで、眠っているみたい。苦しむ顔も、おびえる顔も、何も無かった……

ジャスティンも知らなかったことが、この日誌にはたくさんつまっている。エルは瞬きをするのも忘れ、読みふけっていた。喉がか

らからだけど、水を汲もうという気ですらおきなかった。
これ以上日誌を読みこんだら。彼女のことを知ってしまったら。フェリに奪われた命を、詮索してはいけない。わかっているのだけど、やめられない。
エルは知りたかった。

――今日、彼が来た。

その日は一言で終わっている。淡々とした一文に、エルは視線をとめた。
『あの人』ではなく、『彼』。ただ気まぐれに書き方を替えただけかもしれない。けれどエルは、それがフェリではないかと思った。

――彼と約束をした。

間違いない、これはフェリのことだ。今までのやわらかかった文章が、昨日から凍り付いてしまっている。
「約束……」
それから数日、書いてあるのは業務のことばかりだった。フェリらしき人物にもまったく触れていない。
そして、何も書かれなくなった。その意味がわからず、早く続きをと震える手が、外からの声に、はっと止まった。
「――エル、ただいま！」
ジャスティンだ。エルは喜びよりも、焦りのほうが強かった。
「おかえり！　遅かったね！」
窓から、店の下で手を振る彼に声をかける。見えないとわかっていても、日誌を背中に隠した。
「ちょっと、探し物が長引いたんだ。なんか飯、ある？」
馬車にいくつか荷物があるようで、彼はそれを店内に運びながら聞いてくる。大きな声で話すエルたちに他の店の人たちが顔を出し

たけど、いつものことなのですぐに戻っていった。
「いちおう、作ってあるけど」
「さすがエル！」
やったね！　とはしゃぐ様子では、風邪をぶり返していることもないらしい。荷物を乱暴に店内にいれ、馬車を見送るなり、彼は階段を上がってきた。
「ただいま！」
「おかえり」
エルはとっさに、日誌を自分のかごの中にしまい、何事もなかったかのようにジャスティンを出迎えた。

○○○

「……思ってたより、買い込まなかったのね」
「そんなにいっぺんに店に置いても、売れなかったら枯れちゃうし。市場の人にお願いして、定期的にここに届けてもらうことにした」
ジャスティンの持って帰ってきた荷物は、さほど多くなかった。買い付けの花もこれといって珍しいものがあるわけでもなく、大量に買ってきたわけでもない。それぞれ店の中に配置してしまえば、がらんと殺風景だった店が、いつもの調子に戻るだけだ。
「体調、どう？」
「すっげー調子いいよ」
エルの呼びかけに、こちらを向こうともしない。久しぶりに会えて嬉しいのは自分だけなのだろうか。エルはそっと、カーディガンのすそを握りしめた。
すっかり日も暮れてしまって、商店街もみんな閉めてしまっている。花屋も今日の営業は終了だから、エルにはもう、ここにいる理由がなくなった。
「……あたし、帰るね」
ジャスティンはあいかわらず、荷物の整理に明け暮れている。着

替えを入れる大きなトランクから汚れた服をとりだしては、あーでもないこーでもないと呟いていた。
「ごはん、作っておいたから、食べてね。サマンサさんもジャスティンのこと心配してたから、明日、挨拶したほうがいいと思うよ？」
「うん、わかった」
だめだ、聞いてない。あまりにも適当な返事に、エルはため息を漏らした。
「じゃあね、おやすみ」
「――あった！」
エルが踵を返し、今まさに部屋から出ようとした瞬間。ジャスティンが嬉々とした声をあげた。
「待って、エル！」
振り向いたエルに、ジャスティンがぴょんと跳ねるように立ち上がる。その手にはなにやら、たくさんの洗濯物が抱えられていた。
それを目の前に突き出されて、エルはいぶかしげに眉をひそめた。
「……洗ってほしいの？」
「違うって。壊れないように、包んどいたんだ」
だからといって、なぜ洗濯物の中に。エルの呟きもよそに、たまねぎのように一枚一枚めくられていく洗濯物は、中心にいけばいくほど、清潔なタオルやハンカチへとかわっていった。
「エルに、買ってきたんだ」
そして最後のハンカチをめくると、中は白い綿ばかりで、彼の手からいくつか零れ落ちる。そして中から現れたものを、ジャスティンは誇らしげに見せた。
「……薔薇？」
手のひらにおさまる、一輪の薔薇が、大事そうに綿の中で身を潜めていた。
茎はない。額の下から切り取られ、ビーズやリボンでささやかに装飾されている。ジャスティンに手渡され、エルはうやうやしく、それを眺めた。

そのまま微動だにしなくなったエルを見て、ジャスティンは心配そうに顔を覗き込んでくる。

4、プリザーブドフラワー―3

「……嫌だったか？」
「ううん、綺麗」
吐息とともに呟くだけで、精一杯だ。エルはその薔薇に、瞳をうばわれてしまっていた。
大きな花弁が形よく鎮座した、まるくやわらかなシルエット。外側の白い花びらは、中央に近づけば近づくほど、淡い紅色が強くなってゆく。その自然なコントラストが目に鮮やかで、白い綿に包まれたぶん、その彩りの強さが増していた。
「こんな……もったいないよ。すぐに枯れちゃう」
「生花じゃないから、枯れないんだ」
じゃあ、造花だろうか。エルは指で花びらをつまんでみるけれど、感触がまったく違うことに驚いた。布や紙でできたものとは違う。本物の薔薇だと思ってしまうぐらい、やわらかくてみずみずしい。
「プリザーブドフラワーっていうんだ」
戸惑いを隠せないエルを見て、面白そうに、ジャスティンが言った。
「本物の薔薇を、薬とか使って、長く保存できるようにしたものなんだ。十年ぐらいは、ずっとこのままだって」
「枯れないの？」
「枯れないんだ」
しげしげと、エルはそのプリザーブドフラワーとやらを見つめる。見た目も触った感じも、本物の薔薇となんら変わりない。早く水につけなければと思ってしまうけど、どうやら水気には弱いらしい。
「遠くの町にさ、これを作ってる人がいるんだ。まだちゃんと完成されてなくて、失敗も多いものだからほとんど売られてないんだけど、無理言って売ってもらった。ついでに他の店に行ってさ、加工もしてもらったんだ」

「……もしかして、これを探して、帰ってくるの遅くなったの？」
「それもあるし、珍しい花ばっかりで、つい長居しちゃったのもあるし」
肝心なところをはぐらかして、ジャスティンはエルの手から薔薇をとる。綿に隠れていたパールの飾りが、軽やかな音を鳴らしてテグスから垂れ下がった。
「エルはなにをもらったら、喜んでくれるかなって、考えてたらこれに行き着いたんだ」
エルの髪を耳にかけさせ、彼は薔薇を耳元に飾る。髪飾りに加工したようで、ジャスティンが手を離しても、薔薇は落ちなかった。
「こんなの……受け取れないよ」
「どうして？」
「だって、こんな高価なもの……」
エルがはずそうとすると、ジャスティンは手をつかんでとめてしまう。そして髪飾りをつけたエルをじっと見つめ、満足そうに笑った。
「だってエルは、もしネックレスとプレゼントしたとしても、同じこと言って受け取らないだろ？　十字架の形してるものだったらなおさらだ」
「それは……そうだけど」
「花束ならいつも喜んで受け取ってくれてたから、花ならもらってくれると思ったんだ。やっぱり、嫌だったか？」
「嫌じゃないけど……でも、やっぱり受け取れないよ」
「どうして？」
「だってあたし、受け取る理由がないよ」
なおも髪飾りをはずそうとするエルの手をしっかりとつかみながら、ジャスティンがなにやら考え込んでいる。理由と言われて、それを探しているようだった。
「理由があったら、受け取ってくれるのか？」
「それは……」

言いよどむエルを流して、ジャスティンは言った。
「エルへのお礼。いつもありがとうって、そういう理由」
「お礼なんて、べつにあたし……」
「いつも店を手伝ってくれてありがとう。看病してくれてありがとう。エルがいてくれて、おれ、本当に助かってるんだ」
それから、と、彼は言葉を続ける。けれど続きの言葉が出るのにはすこし間があって、彼は空いた手で鼻の頭をかいた。
「あと……おれの店で、働いてくれないか？」
「え？」
「よく考えたら、ちゃんと言ってなかっただろ。だから言うんだ。おれの店、エルに手伝ってほしいんだ」
どうしてそんなことを言うのに、彼はそっぽを向くのだろう。それこそ断る理由がないエルは、きょとんと彼を見上げてしまった。
「あと、さ……」
「ジャスティン？」
名前を呼べば、彼はエルと目を合わせない。ついにはつかんでいた手を離して、自分の頭をがりがりとかきむしった。
そして、よし、と呟き、自分の頬を叩く。まるでこれから喧嘩にでも行くかのように、自分に活を入れて、きりりとした表情でエルを見た。
「……っ」
でもそれも、エルと目があうまでのこと。彼の草木を思わせる瞳は、エルの黒い瞳とあうなり、また泳ぎ始めてしまった。
「ジャスティン？」
「……が、さ」
「なぁに？」
聞き取れなくて、エルは顔を近づける。髪飾りがついたのとは逆の耳を近づけ、ジャスティンの声を拾おうと背伸びをした。
「エルのことが好きなんだ」
消え入りそうだった声に、急に、灯（ひ）がともった。

「お礼はもちろんそうなんだけどさ。働いてほしいっていうのには、この気持ちもあるんだ。だから、受け取れないなら、返してくれてかまわない」

さっきまであれほどうろたえていたはずなのに。ジャスティンはしっかりとエルを見つめていた。ただし、その耳は、今にも燃え上がりそうなほど真っ赤になっている。

いつにない彼の真剣な瞳に、エルの胸が自然と高鳴りだしていた。

わずかながらに通っていたと思っていた心だけど、こうしてはっきり言われたのは、はじめてだ。エルは背伸びしていたかかとを下ろし、呆然とジャスティンを見上げてしまった。

手はとっくに離れていて、髪飾りにも十分触ることができる。けれどエルはそれをはずさず、手を、かすかにふるえるジャスティンの頬へと伸ばした。

まず、右手。次いで、左手。両手でそっと包み込むと、彼は背をかがめて目線を合わせてくれる。

彼の瞳の中に、はっきりと、自分の姿がある。同じように、自分の瞳の中にも、彼がいるに違いない。

エルはもう一度背伸びをして、彼の額にそっと、唇を寄せた。

「エル……」

エルの返事を受け取って、ジャスティンの目に、今にもこぼれてしまいそうなほど涙が浮かぶ。こぼさないようにまばたきを我慢して、彼もまた、エルの額に口づけた。

そして、その長い腕に、身体を引き寄せられる。

「エル……」

まるでうわごとのように、ジャスティンが名前を呼ぶ。エル、エルと何度もささやかれ、エルはその腕に、身を任せることにする。

エルの肩に額をうずめていた彼は、しばらくすると、顔をあげた。そしてさほど力のこもっていなかった腕を緩め、再び、エルと視線を合わせた。

彼は何も言わなかった。ただじっと、エルを見つめている。そし

てその視線が唇に降りたのに気づき、エルはそっと、まぶたを下ろした。
まもなくして、くちびるにやわらかな熱が重なる。それは額に触れたものと同じで、触れたところがほのかに熱くなる、不思議な感覚だった。
唇から離れたのを確認して、エルは目を開く。息がかかるほど近くにあるジャスティンの顔は、見たこともないぐらい緊張していて、それに思わず笑ってしまった。
「……笑うなよ」
「だって」
こういうことに関しては、ジャスティンのことだから慣れていると思っていたのに。眠る前のおまじないを日課にしているエルのほうが、よっぽど自然に、それを受け入れていた。
ジャスティンがもう一声あげようとしたので、エルはそれをさえぎり、今度は自分から唇を重ねた。驚いた彼のかたまった首に腕をまわし、また背伸びをして、深く口付ける。
彼からは、甘い甘い、薔薇の香りがした。

○○○

「……ん」
浅い眠りの中、エルは言葉になりきらない声を漏らしながら、身じろぎをする。縮めていた足をのばすと、指先になにかが触れた。
それが自分と同じぬくもりを持っていることに気づいたとたん、急に頭が醒めてくる。肩にまわされた腕。耳にかすかな吐息がかかる。それで、ここが自分の部屋でないことを思い出した。
目を開けば、ジャスティンがエルのことを見つめていた。
「起きたか？」
「う、うん……」

4、プリザーブドフラワー―4

自分があまりにも無防備な寝顔をさらしていたことに気づいて、エルははずかしくて布団に顔をうずめる。でも彼には、寝顔はもとより、すべてを見られてしまったのだからどうしようもない。

「身体、痛くないか？」

「大丈夫……」

鼻から下まで布団にもぐっていると、ジャスティンは目を細めて、頭を撫でてくる。布団の中からエルの唇を探し、指でそっとなであげた。

「今日は仕事しなくてもいいぞ？」

「ちゃんとするよ」

まだすこし眠気の残る声に、ジャスティンは「もう少し寝てな」と身体を起こす。その厚い胸板を目の当たりにして、エルはいまさらながら赤くなってしまった。

手早く身支度を整えると、彼は窓のカーテンをあけた。もうすっかり朝陽が昇っているらしく、差し込む光に目が痛んだ。

外の様子に耳を凝らしてみても、まだ話し声や店の戸を開くような音は聞こえてこない。朝陽は昇っているけど、まだ店が開く時間ではないようだった。二人そろって寝坊をした日には、サマンサに大きなケーキでも買ってこられるのではないだろうか。

「あのさ、エル……」

寝癖のついた頭のまま、彼は外を眺めている。その彫りの深い横顔は、朝陽のせいでよけい、顔に落ちる影の色が濃かった。

「今、これを訊くべきではないと思うんだけどさ」

「……なに？」

エルが身を起こすと、朝の冷えた空気が肌をさした。自分が何も身にまとっていないと気づき、あわてて布団を手繰り寄せる。

そんな様子を見て、ジャスティンはまた笑う。いつもの飄々とし

たものでも、甘える子供のようでもなく、笑顔の裏にさまざまな言葉を隠しているようだ。
ベッドへと戻り、床に膝をつく。ふちに手をかけて、エルと目線を合わせた。
「今訊かないと、たぶんおれ、訊けないままだらだらしちゃうと思うんだ。だから、訊くな」
「ジャスティン……？」
彼はベッドのふちに乗せた髪飾りに視線をやり、そして戻し、まっすぐにエルを見つめた。
「エル・シンプソンっていう子はいないって言われたんだ」
「……」
エルは動揺を悟られないように、奥歯を強くかみ締めた。
「ちょうど、エルが住んでる町の人と話す機会があったんだ。それでエルのこと訊いてみたら、シンプソンっていう家はあるけど、エルっていう名前の子はいないって言われた。黒い髪と目の人も、それぐらいの年頃の子ではまずいないって」
身体を隠すのも忘れて、エルはベッドの上で身を起こす。心もとない肌の上を、黒い髪がすべりおりた。
「それは、今回の買い付けで、気づいたの……？」
「いや、実はけっこう前に、シンプソンの家には年頃の女の子はいない、って言われてたんだ」
詰めが甘かった。ジャスティンがいつも買い付けに出かける町は、エルが住んでいると嘘をついた町を通らない。けれど彼は、エルが思っていた以上に、仕事であちこち動き回っていたのだ。
「あたし……」
ジャスティンに、フェリのことは言えない。いずれ話さなければいけないのはわかっているけど、今はまだ、早すぎた。
言葉が見つからず、言いよどむエルに、ジャスティンはゆるゆるとかぶりをふった。
「エルがずっと黙ってることだから、無理に訊いたりはしないから。

これ以上、エルの素性を調べたりもしない。勝手にいろいろ訊きまわって、ごめんな」
訊きまわったといっても、世間話の最中に、不意にエルの名前が出てきたぐらいだったはずだ。あやまるのはジャスティンでなく、エルのほうなのに、エルの口からはうまく言葉が出なかった。
「……ジャスティン」
「いいんだ。おれはわかってて、それでもエルのことが好きなんだ。もし、エルが、自分のことで隠していることがあって、それでもし悩んでいるのだとしたら、それがおれには嫌だったんだ」
ジャスティンが腕を伸ばして、エルを抱きしめる。おとなしく抱かれたけれど、エルの頭の中は、どうしようという頭で埋め尽くされていた。
「あたし……、ごめんなさい……」
「あやまらなくていいんだ」
「ジャスティンには、まだ、言えないの」
「言えるときに言ってくれればいいよ。言わなくても、おれはかまわないから」
抱きしめてはじめて、彼はエルが震えていることに気づいたらしい。腕の力をなおいっそう強くして、エルの耳朶に口づけた。
「おれがこの腕を離したら、もうこの話は終わりだ。変に気を使わないでいい。今までどおりにしよう。ただ、これ以上エルの悩む顔を見るのがいやなんだ」
「あたし……」
なにも、ジャスティンに秘め事をしているからという理由のみで、悩んでいるわけではなかった。
いずれ彼に話さなければならないときがきたとき。今のエルでは、すべてを語ることができない。
エルは知らなすぎる。
この町で昔あったことを。エルを育てる前のフェリのことを。フェリの牙にかかった人々のことを。

そして自分のことを。
知らないことが多すぎるのに、それをジャスティンに話すことなんてできない。彼はエルの抱える秘密について不安があるのだろうけど、実際はエル本人の中で渦巻く不安のほうが大きかった。
はたして自分は何者なのか。
それを知らない限り、エルは、彼にすべてをゆだねることができなかった。

●●●

エルが帰ってこない。
日没後に目を覚まし、フェリはしんと静まり返った館に気づいた。
それから、一人で食事の準備をし、庭の薔薇をいくつかつんできたけれど、エルが帰ってくる気配は一向にない。
「別に、天気が悪いわけでもないのに……」
雨風が強くて、帰ってくるのが困難な場合は、店に泊めてもらえばいいと言った。けれど本日は月の綺麗な晴れた空だった。帰るのに支障はまったくない。
残業で遅くなったから、泊まることにしたのだろう。そう考えて自分を納得させようとするのだけど、どうも気持ちが落ち着かない。
なにかあったんじゃないだろうか。どこかで怪我をして倒れたのではないだろうか。なにか事件に巻き込まれたのではないだろうか。そんなことばかりが頭をめぐって、眠ろうと思っても眠れない。
町でなにか異変があれば、ここにいても耳に届く。不穏な気配がすれば察することができる。けれど町はただ静かに時を刻むだけで、何も起きてはいない。エルは何事もなく、町にいるはずだ。
わかっているのに、心配してしまう。たった一晩、娘が家を空けるだけのことなのに。我ながらなさけないなと、フェリは一人、笑うしかなかった。
最近の、上の空で心ここにあらずのエル。それはきっと、町に好

い人がいるからなのだろう。彼女の年頃を考えればそういう人がいてもおかしくないし、むしろ今まで家にこもっていたことのほうが不健康だった。
フェリとエルは、身を寄せ合うように、この館に暮らしていた。成長するにつれ、言葉を操るようになり。文字が読めるようになり。外の世界に興味を示すようになり。
エルとフェリの関係について、疑問を持つようになり。

『……フェリは、エルのお父さんじゃないの？』
その小さな唇から言葉が出たとき。フェリは、ついにきたかと思った。
『違うから、お父さんって呼んじゃいけないの？』
どうしてそれに気づいたのだろう。そう思って、エルが最近読んでいた本を思い出した。その主人公はエルと同じく親がいなくて、それに自分を重ねて読みすすめるうちに、事実に気づいてしまったのだろう。
まだ町にだってほとんど出ていないのに、エルは本の中からいろんな知識を得ているらしい。フェリは先に館にある本をほとんど読み終えていたので、書庫にある本の内容は漠然とながら覚えていた。
胸にその本を抱えて、エルはフェリを見上げる。その瞳があまりに悲しそうで、フェリはつい嘘をついてしまいそうになったけれど、あえて自分を押し込めて首をふった。
『そうだよ』
もし嘘をついて、エルが自分の子供だと言ったとしても。成長するにつれ、彼女は嘘に気づいてしまうだろう。それならば、先に言ってしまうほうがよかった。

4、プリザーブドフラワー―5

フェリの身体は、若い姿のまま止まっている。そのうち、親子としてはつりあわなくなってしまうのだ。
『エルとフェリは、血がつながってないの？』
『そうだよ』
本当のお父さんとお母さんはどこにいるの？　そう訊かれると思っていたら、エルが気にしていたのは違うことだった。
それに、心の中で安堵の息をつく。正直、それに対する答えはまだ、フェリの中では決めかねていたことだった。
『……僕は吸血鬼で、エルは人間だからね』
エルの気をそらそうと、フェリはすこしずつ、話をずらしはじめた。
『エルは、太陽にあたっても平気だろ？　薔薇を食べることもできないだろ？　それは、エルが人間だからだ』
それが、血のつながりにどう関係あるのか。わからないようで、エルは首をかしげる。フェリもわからなかった。
『吸血鬼は、人間とは違うんだ。吸血鬼は子供を作れない。子供ができるできないは……まぁそのうちわかるとして、僕には子供ができることは一生ないんだ』
さて、彼女にはどこまで話していいのやら。なにせ育児は初めてのことで、しかも相手は女の子。フェリの話も戸惑い半分だった。
『僕は吸血鬼だから、血のつながった子供ができることはないんだ。だから、エルは、僕の子供じゃない』
『お父さんじゃないの？』
『血がつながったお父さんではないよ。でも、育てる上ではお父さんだ』
『じゃあどうして、お父さんって言っちゃいけないの？』
ああ、困った。フェリは頭を抱えたくなる。フェリを父と呼ばせ

ないのは単なるフェリのこだわりだけど、それをエルに話すには、あまりにも理由が身勝手すぎる。
『僕は……フェリって呼ばれるほうが好きなんだ』
『そうなの？』
『そうなんだ』
なぜか、エルはそれで納得してくれようとする。あっけにとられて、フェリは脱力した。
どうやらエルは、自分がフェリと血のつながりがないことを知りショックを受けたようだけど、それで自分の本物の親について興味を持ったわけでもなさそうだった。聞かれたら何より困ることだけど、聞かれないのもなんだかあっけない。
『だから、エルは太陽にあたっても大丈夫なのね？』
『そうだよ。エルは人間だから、太陽の下で遊びまわるほうが健康的なんだ』
たまにフェリがローブを着て庭に出たりしない限り、エルは館から出ようとしなかった。だからその肌は、白さを通り越して蒼白い。食事の栄養バランスには十分気をつけているつもりだけど、やはりお日様の力には適わないものもある。
『フェリは太陽にあたると、本当に消えちゃうの？』
『僕？』
エルの最近のお気に入りの本は、吸血鬼の出てくる冒険小説だ。だからよく、吸血鬼についてのあれこれを訊かれる。つい最近まで彼女は、いつか自分の血はフェリに吸われるのだろうと覚悟していたらしい。
『くいを刺されたら死んじゃうっていうのは本当なんでしょう？』
『それはね。心臓をひとつきされたら、さすがに治るのが間に合わないよ』
『じゃあ、太陽は？』
『太陽はねぇ……』
フェリは一度、日の光にあたってしまったことがある。それはほ

んの指一本のことだったけれど、それにはそうとう苦労させられた。
『火傷みたいになるんだよね。痕はあんまりのこってないけど……わかる？』
『フェリ、太陽にあたったことあったの？』
よく見えるように、ランプの下に右手をかざしてみる。エルの目が悪くならないよう、彼女が起きているときはなるべく、明かりを灯すようにしている。だから部屋の中は、月明かりが負けてしまっていた。
右手の小指は、見た目こそ無傷に近いけれど、動かすとたまに引きつることがある。それは主に昼間のことで、どんなに太陽から隠れても変わらなかった。ひどいときは、眠っているときに焼けるような痛みで目が覚めたりもするのだ。
本当に、一瞬、影から手が出てしまっただけのことなのに。その一瞬で負った傷は、とても深かった。
『エルも、火傷したことあるだろ？　軽いとひりひりするぐらいなんだけど、あれ、ひどくなると水ぶくれになって皮がはがれたりするんだ。この指もね、そういうふうになって、大変だったんだ』
『つばつけてもだめなの？』
『よく覚えてたね』
吸血鬼の唾液には、痛みを麻痺させる成分が含まれている。量が多ければ、眠らせることだってできる。それは人の血を吸うとき、肌の痛みを感じさせないためだ。時々、自分は蚊かと思うこともある。
そして唾液には、傷の治癒を早める効果もあった。だから吸血鬼の中には、吸った後に傷口に唾液を塗り、人間に気づかないよう工夫しているものもいる。残念ながらフェリは、血を吸うときにその方法を使ったことは無かった。
もともと治癒の早い吸血鬼が、自分の傷につばをつければ、それはあっという間に治ってしまう。自分も過去、何度それに助けられたことがあっただろう。

『吸血鬼は、太陽に嫌われているからね。お日様の傷には、つばは効かないんだ。そして太陽の火傷は、僕らの身体じゃ、治せない』
吸血鬼の治癒がきかないほどだから、太陽の光は本当に恐ろしい。ほんの指先であった傷が、あっというまに根元まで広がり、つめは今にもはがれそうなほどに黒く変色したものだった。
『じゃあ、どうやって治したの？』
『それは、秘密』
ちょっとした薬があるんだけど、その薬はなかなか手に入らない。肝心なところをはぐらかすと、エルはつまらなそうに唇をとがらせた。
『だから、僕らは太陽がとても怖い。日の光にあたった傷は、太陽の腐蝕って呼ぶんだけど、本当に傷口が腐っていくんだ』
『もし……からだ全部が太陽に当たったら、どろどろになっちゃうの？』
どろどろ。その表現に、フェリは笑った。氷菓子のように、熱で溶けて、地面に吸収されてゆく。それもなかなか面白い。
『いや、全身だったら、腐る前にさっと消えちゃうんだ』
『消える……？』
うまく想像できないらしい。透明人間のように姿を消すのを思い浮かべているようで、エルは何度も首を振っていた。
『体が干からびて、砂になる、みたいな感じかな？　死体は残らないよ』
死体、という言葉に、エルは敏感に反応した。日の光を浴びればフェリは死んでしまう。そのことに、ようやく気づいたようだった。
『だから僕は、太陽の下にはなかなか出られない。一緒に遊んであげられなくて、ごめんね』
死というものは、やはり、幼い彼女にとっても恐怖なのだろう。夜に夢でうなされていたらどうしよう。フェリはにわかに不安になった。
『でも、エルは、たくさん外で遊んでいいんだよ。僕は、外で元気

に遊んでるエルのこと、見ててとても好きだなと思うよ』
頭を撫でてあげると、彼女の緊張した表情がいくぶんか和らいだ。
フェリを見上げる瞳の力強さが、やはり、あの人の子供なのだなと思った。

「たくさん外に出ろって言ったけど……出すぎるのもちょっと寂しいな」
昔のことを思い出して、フェリはぽつりと呟いた。
エルは、フェリが寝静まったころに帰ってきたようだった。
フェリは外泊のわけはあえて聞かず、エルもいいわけのようなことは一切口にしなかった。
暗黙の了解のように、エルの外泊が認められたのだった。

5、マーガレット―1

5　マーガレット

エルはジャスティンにお願いして、花束をひとつ、作ってもらった。練習はしているものの、エルの作る花束はあまり褒められるものではなかったからだ。

ジャスティンが帰ってきたとき、持って来た花に、目当てのものはなかった。

それが届くまでの間、エルは何度か、ジャスティンのところに泊まった。フェリは理由を問いただすわけでもなく、帰ってくるといつものように、おかえりと声をかけてくれた。

「お代はあとで払うから」

「別にエルから金はとらないよ」

黄色い布に行儀よく包まれた花束を受け取り、エルはありがとうとお礼を言う。いつものエプロンははずして、髪も綺麗に櫛を入れた。着替えがなかったので、物置にあった前の店主のものを借りることにした。見つけたとき、ジャスティンの着替えと一緒に洗っていたものだった。

「本当ならおれが行くべきなんだけど……」

「いいの。あたしが行きたいの。ジャスティンはもう前に行ったんでしょ？」

ジャスティンが持って帰ってきたお土産と、洗濯して乾いた着替えを持ち、エルはジャスティンにじゃあねと手を振った。

ふと空を見上げれば、うすい曇が広がっていて、太陽の姿はなかった。洗濯をしたばかりだったので、雨が降ってほしくはない。

「サマンサさん」
八百屋の店先で、エルは首を伸ばして店内をのぞいた。
昼食前の買出しラッシュも終わったところで、ちょうど店に客の姿はなかった。夕飯の買出し時間になるまで、彼女は暇になる。エルが目を凝らして探すと、サマンサは店の奥でりんごを磨いているところだった。
「いた。サマンサさん！」
何度か呼びかけて、彼女はようやくエルの声に気づいたらしい。
「はーい」と返事が聞こえたと思うと、彼女はりんごを片手に持ったまま店に出てきた。
「……エルちゃん？」
そして、手にしたりんごを落としてしまった。
「エルちゃん、よね？」
「そうですけど……？」
転がってきたりんごを拾いながら、エルは首をかしげる。サマンサは、まるで幽霊でも見たかのように、目と口をあけて呆然と立っていた。
「ジャスティンの着替え、返すの遅くなっちゃってごめんなさい。あと、ジャスティンが買ってきたお土産ももってきたの。ジャスティンは今、店に出てるから……」
かごにつめた着替えとシーツ。それから、近場では手にはいらない高級な焼き菓子。それを受け取って、サマンサはエルをまじまじと見つめる。すこし古いデザインだけど、物置にあった深緑のワンピースは、エルもすこし気に入っていた。洗濯してほこりも落としたし、かび臭さもないはずだ。
「その服、どうしたの？」
「店で見つけて……似合わないですか？」
サマンサの視線に、エルはおちつかなくてすそをつまむ。サイズもあっていて、もと店主も同じ体型であったのだと知った。
彼女はこの服の持ち主がエルではないと知っているようだ。亡く

なった人の服を勝手に着ていることに、怒っているのだろうか。エルがそう思ってしまうほど、長い間、彼女は口を開かなかった。
「……なに、隠してるの？」
ふりしぼるように、サマンサがそう言った。それはエルが背中に隠すものを見て、気づいたようだった。
「あの、これ……」
サマンサの顔色が悪い。早く帰ったほうがいいと思い、エルは花束を出した。
「こないだ、いろいろ教えてもらったから、お礼にと思って……」
いつもよりリボンを多めに使ったおかげで、エルの手にかかってくすぐったい。サマンサはそれを見てさらに目を見開いたけれど、怒るわけでもなく、黙って受け取ってくれた。
「どうして、この花……？」
「嫌い、だった？」
あの業務日誌には、サマンサはマーガレットが好きだと書いてあった。だから花束もマーガレットが届くのを待ち、いろんな種類でいっぱいにしたのだ。
「嫌いじゃないわ。大好き」
花束に顔をうずめて、サマンサが香りを楽しもうとする。
その花びらに、突然、雫が落ちた。
「サマンサさん？」
彼女の目から、大粒の涙がこぼれる。それは止まることなく、花びらは涙を受けて首を揺らし続けていた。
「ごめんね、エルちゃん……」
サマンサが涙を止めようとすればするほど、涙は次々あふれてくる。目も鼻も真っ赤にして、服の袖で懸命に涙をぬぐっていた。
突然の涙に驚くのはエルで、なにか悪いことをしただろうかとうろたえてしまう。けれどサマンサはしきりに「ごめんね」と繰り返すばかりだった。
「ごめんなさい、サマンサさん」

「違うの。エルちゃんが悪いんじゃないの」
嗚咽をこらえながら、彼女はかぶりをふる。そして泣き顔を見られまいと、手で顔をおおった。
「なんだか、ルーシーが戻ってきたみたいで……」
再び嗚咽の波が押し寄せてきたようで、サマンサは花束を抱きかかえたまま、両手で顔を覆う。エルは何も言えずに、ただ、ハンカチを差し出すことしかできなかった。

ルーシー。

それはこの花屋の元店主、ルーシー・ヘルネスのことだった。

○○○

「ごめんね、変なところ見せちゃって」
目が赤く腫れ残っているものの、落ち着いたサマンサは、エルに冷たいレモネードを出してくれた。
涙が止まらなくなってしまったサマンサに代わって店に出たのは一緒に暮らしている末の弟で、エルは彼女と一緒に二階の自宅へとあがった。サマンサが落ち着くまで、エルは居心地悪く、居間のソファーに座っていたのだ。
テーブルの上に皮を剥いたりんごをおき、サマンサもエルの隣に座る。軽く鼻をすすり、自分でもわかるのか腫れたまぶたをさすって、心配そうに見つめるエルに笑ってみせた。
「これで、泣いた理由を話さないのは、失礼よね」
「別に、辛かったら言わなくても大丈夫」
「いいの。私も一度、話したいなと思ってたから」
レモネードを一口飲んで、サマンサは視線を窓に投げる。開け放たれた窓は吹き込む風にカーテンが揺れて、それとともに子供たちの遊ぶにぎやかな声が聞こえてきた。

「ルーシーっていうのは、花屋をやっていた、私の友達の名前だったの。同い年で、小さい頃から一緒にいた、幼馴染だったのよ」
同い年だというのは初耳だった。もしルーシーが生きていたら、今のサマンサと同じなのだ。
「エルちゃんも知ってると思うけど、ルーシーはあの伯爵に殺されたの。それを最初に見つけたのは私で……部屋一面、真っ赤に染まってて、傷だらけで……」
当時のことを思い出して、サマンサの身体が震え始める。それでも彼女は気丈に話し続けた。
「こんな断片的に話してもだめよね。ちゃんと、順番に話すから」
「無理しないで。あたし、知らないままでもいいから」
ルーシーの話を、聞きたいという気持ちもある。けれどそれを語ろうとするサマンサはいつもの面影などないように、弱弱しく、倒れそうで、エルにはそちらのほうが心配だった。
心配するエルにまた微笑みかけ、彼女は話を続けた。
「ルーシーね、伯爵に襲われる前、しばらく家にこもってたの」
「……お店は？」
「閉めてたわ。店を閉めても、いままでの貯金があるから大丈夫だよって。それで、必要なものは私が買いに行ってたわ。頻繁に顔を合わせているのは私だけで、町のみんな、誰もルーシーに会ってなかった」
だから、異変に気づけるのは自分しかいなかったのに。サマンサは再びあふれそうになる涙をのんだ。
「たぶん、ルーシー、伯爵に狙われてるのを知ってたのよ。それで身を守るために、ずっと家にこもっていたんだわ。私、自分のことばっかりかまけて、全然話聞いてあげられなくて……」
レモネードのコップをもつ手が、ぶるぶると震えている。エルもコップを握ったままで、りんごにはふたりとも手をつけなかった。
「なんだか夜、ルーシーの家がさわがしいことがあったのね。それで次の日、様子を見に行ったら、ルーシーが居間で倒れてて……も

う、死んでたの」

5、マーガレット―2

エルとジャスティンが一緒に食事をとる、あの場所。そこはかつて、ルーシーが命の灯(ともしび)を消した場所だった。

部屋中に飛び散った血は、今はもうない。それはサマンサがすべて片付けてくれたからだ。手がルーシーの血で染まったことを、彼女は一生忘れないと語った。

「身体にね、ナイフで切られたみたいな傷がいくつもあったの。それが腕にも胸にもあって、血で体が真っ赤になってるのに、あの子の顔は綺麗で、首から上の肌は、傷ひとつない真っ白なままだった」

傷口から流れた以外の血は、すべて彼女の身体から消えてしまっていたらしい。抱き上げたその身体の軽さ。白さを取り越し、青くなった肌。伏せられたまつげは、もう二度と開かれることはなかった。

「一番ひどい傷が、お腹だったの。そこから出た血が、床に広がって、窓にも続いて……でも外に出たところから薄れていったの。足跡も、ナイフも、どんなに探しても見つからなかったの」

ルーシーを殺めたのはフェリ伯爵であるに違いない。けれど彼は、逃走の道筋や、凶器など、よけいな痕跡をほとんど残さなかったらしい。

当時の様子を思い出すサマンサの顔からは、血の気が引き、青ざめていた。記憶を呼び起こすのは相当つらいであろうに、それでも彼女は、ことの真相をエルに話し続ける。

「ルーシーのお腹、ぺったんこだった」

「……お腹？」

「あの子、妊娠してたの」

サマンサは涙がたまった瞳で、エルを見た。

「お腹を開かれて、その中の子供はどこにもいなかったわ。へその緒が途中で切られてて、でも赤ん坊はどこにもいなくて……無理や

り出されて生きられるわけないのに、どうして子供まで消してしまうなんてこと、したのかしら」
　引き裂かれたルーシーの腹部。ぱっくりとあいた穴の向こうには、生まれるべきだった新しい命までもが奪われ、母親と引き離されてしまった。
　そして残ったのは、暗い洞穴。
「子供もね、一緒に埋葬してあげようと思って探したの。でも、腕一本もどこにもなくて……みんなルーシーが妊娠してたこと知らないから、一緒に探してもらうこともできなくて」
「じゃあ子供は、今もどこにいるかわからないの？」
「わからないわ。そもそも、無理やり出されたんだったら、まず生きてるわけがないしね……伯爵もどうして、あんなにむごいこと、できたのかしら」
　目じりから伝う涙をぬぐい、サマンサはレモネードをあおる。唇からこぼれたのも気にせず、一気にのどへと流し込んだ。
「だからね、エルちゃんを見ると、期待しちゃうのよ。この子はルーシーの子供なんじゃないかって」
「あたし……」
「わかってるわ。エルちゃんは隣町の子だものね。ルーシーはブロンドに青い目だったから、よけい、違うわ。あの子の子供は、きっと、伯爵に食べられてしまったのよ」
　立ち上がり、彼女は一度、居間から姿を消す。そして手に一枚の写真を持って戻ってきた。
「ジャスティンのところから、写真とかはもらってるの。不思議よね、あの子、引越しでもするみたいに、荷物の整理までしてたのよ。そのワンピース、ルーシーが気に入って着てたものだけど、なくしたと思ってたら……まだ店に残ってたのね」
　手渡された写真に写っていたのは、若いころのサマンサ。その隣にいるのは、彼女の親友、ルーシー・ヘルネスだった。
「綺麗でしょ？　私とルーシーが一緒に歩いていたら、いつも男の

人が声掛けてきたのよ。私はルーシーの前だとかすんじゃったけど」
サマンサも、快活とした笑顔がとても魅力的だ。今と変わらない短い髪が、日の光を浴びて輝いている。これほどに笑顔あふれる女性だったら、町の男性陣が放っておくことはなかっただろう。
対してルーシーは、見るものが動きを止めてしまうような、惹きつけるなにかがあった。
古びて色あせた写真でも、その美しさはわかる。まっすぐに胸までのびた金色の髪に、湖の底のように、吸い込まれるような青の瞳。鼻も唇も、どれも形がよく、それが白い肌の上にバランスよく配置されている。
写真の中では途切れてしまっている身体も、聞こえるはずのない声も、どれもが彼女を引き立てる美しさを持っていたことがわかる。そして彼女はそれをひけらかすこともない、誠実な人だった。写真の笑顔を見れば、わかった。
「私……全然、似てない」
「色が違うから、よけいそう思うのかもしれない。でもね、話し方とか、しぐさを見てると、たまにはっとしちゃうの。横顔とか、まぶたの伏せ方とか、それがルーシーによく似てて、とても他人とは思えなくて」
だから彼女は、よくエルを気にかけてくれていたのだ。
「もしかしたらエルちゃんは、ルーシーのうまれかわりなのかもしれないわね。……なんて、背負わされても困るわよね。今の、忘れて」
ごまかすように笑って、サマンサはようやく、りんごを口にする。切ったばかりのころはみずみずしかったりんごも、話しているうちにすっかり茶色くなってしまっていた。
「エルちゃんのご両親って、どんな人？」
「あたしのですか……？」
言われて、エルはすこし考えた。
吸血鬼です、なんてことはまず言えない。いつも家で眠っていま

すなんてことも言えない。見た目が彼女より若いことも、そのうちエルのほうが年上になってしまうことも、言えるわけがない。
「薔薇が、好きなんです。だからいつも、ジャスティンのところでいろいろ買っていくの」
「それで坊やと仲良くなったわけね。なるほど」
いつもの調子の、恋の伝道師に戻りつつあるサマンサに、エルは内心ほっと息をついた。
「エルちゃんは愛されて育ったのね。見てたらわかるわ」
「そうですか？」
嬉しいな、と呟きつつ、エルはレモネードに口をつけた。
先ほどから、甘酸っぱいはずの味も、爽やかである香りも、何も感じない。エルは平静を保つことで精一杯だった。
「じゃああたし、親に感謝しないと」
照れくさそうに笑う心の中で、エルはひとつの確信を抱いた。
自分はきっと、ルーシー・ヘルネスの子供だ。
そして、彼女の腹から自分を引きずり出したのは、今まで自分を育てあげた、フェリ伯爵だった。

○○○

「今日も、泊まってくか？」
「ううん、帰るよ」
さすがに二日も無断で外泊すれば、フェリも心配するに違いない。エルは店の中をほうきで掃きながら、出迎えるフェリの姿を思い描いていた。おかえり、エル。最近はその言葉の後に、お仕事お疲れ様がついてくる。
「晩飯、食ってく？」
「明るいうちに帰る。食べたいのあったら作ってくけど、なにかあ

る？」
　自分で作るからいいよ。ジャスティンがそう言うので、エルはわかったと返事をした。いつもどおり、店のことをしているはずなのに、ジャスティンはエルを見てなにやら戸惑っているようだった。
「……エル」
「なに？」
「なにかあったか？」
　ほうきを持つ手をつかんで止めさせ、ジャスティンが顔を覗き込んでくる。息もかかるほど間近にある顔に、エルの胸は高鳴りもせず、静まり返っていた。
「別に、なにも」
「何もなかったらそんな顔してない。エルは、自分が思ってる以上に、隠し事できないんだよ」
　ジャスティンに指摘された顔がわからなくて、エルは顔を洗うように両手で表情筋をあらためた。
「これでいい？」
「そういうわけじゃなくて……」
　決して口を開こうとしないエルに、ジャスティンが肩を落とす。その様子があまりにも申し訳なくて、エルはそっと彼の頭に頬を寄せた。
「話をね、聞いたの」
「どんな？」
「ルーシー・ヘルネスっていう人の話」
　その名前を、ジャスティンが知っているのは当然だ。彼ははっと顔をあげて、エルの黒曜石のような瞳を食い入るように見つめた。
「それは、おれも知りたい」
「誰にも言わない？」
「言わない」
　きっぱりとうなずくジャスティンと指切りをして、エルは客がいないのを確認し、店の奥の椅子へと歩いていった。

5、マーガレット―3

サマンサから聞いた話だとは言わなかった。ルーシーが妊娠していたという話も伏せた。それでもジャスティンは、事件のことでまだ知らなかったことがあったらしい。

「……そうか、初めて聞いた」

「店を使うなら、ある程度聞いてたんじゃないの？」

「聞いてたけど、そういう詳しい話は聞いてないよ。フェリ伯爵に襲われたせいで、部屋が血だらけになったけど、ちゃんと掃除したので大丈夫ですっていう程度」

その血だらけになったという部屋で平然と生活するジャスティンは、なんと図太いのか。エルもあの部屋が現場だと知っていたら、今のように堂々とあがりこめてはいなかっただろう。

「……でも、なんか変な話だよな」

「変？」

どういうこと？　と聞き返すエルの手には、いまだちりとりを握ったままだった。

そしてジャスティンもほうきを持ったまま。店の奥に引っ込んだものの、椅子に座るなり話し出したための結果だった。ざくざくと床をほうきでつつきながら、彼は小難しそうに眉根を寄せている。

「だってさ、フェリ伯爵はいつも、傷をつけたりしないだろ」

フェリ伯爵の手段は、いつも同じだった。あらかじめ目星をつけた人をしばらく観察し、その人物が一人になり、一番深い眠りについたときを襲うのだ。だから犠牲者は総じて、着衣の乱れも苦悶の

表情も浮かべず、それこそ眠るように亡くなっている。それがどうして鬼畜だといわれるようになったかというと、ごくまれに森で見つかった遺体が食いあらわれていたからだろう。それとやはり、ルーシー・ヘルネスの件があまりにも惨忍だったためだ。

いつもの、亡くなった人の姿は、ベッドに寝かされ、手は胸の上に組み、寝乱れた髪もすべて整えられていたのだという。引っかき傷ひとつ残さず、あるのは首筋の、血を吸うために傷つけた牙のあとだけ。

たしかに、町のはずれで倒れていた人の姿はひどかったらしい。肉を食いちぎられたその姿は、フェリの館に報復に向かおうとしていた返り討ちにあったのだとも言われていた。

ルーシーの件だけは、どの人とも違った。目を背けてしまいたくなるほど、傷つき、床の上に無残にうちすてられていた。

「だいいち、吸血鬼は血を吸う生き物なのに、たくさん傷つけて血を流すのはもったいないだろ。もしおれが吸血鬼だったら、最小限の傷をつけて、そこからすべていただくけどな」

もしおれが吸血鬼だったら。その言葉に、エルはどきりとしてしまう。彼が吸血鬼に対してどういう思いを抱いているのか、実はまだ聞いていなかった。

「その話を聞いた限り、首に牙のあとがあったわけでもないみたいだし」

「たしかに、言われてみれば、そうかも」

単にサマンサが言わなかったからかもしれない。けれど、もし本当にそうだとしたら、フェリの手口としては実に奇妙だった。

なぜ、エルであるかもしれないその赤ん坊を、無理やり引きずり出すなんてことをしたのだろう。

そこまで考えて、エルははたと顔をあげた。

「ジャスティン、ルーシーさんが誰かと付き合ってたとか、そういう話聞いたことある？」

突然のその問いに、彼はぱちくりと目をしばたかせた。ルーシー

の妊娠を知らない彼に、その質問は唐突すぎたのだ。
「……別に、聞いたことないけど。顔とか知らないけど、綺麗な人だったらしいな」
なぜ彼女は長い間、店を閉めて姿を消していたのだろう。フェリにおびえていたのなら、すぐにでも町を去ろうとするのではないか。身重だから動けなかったのか。それとも下手に出歩いて、周囲に妊娠を知られたくなかったのか。
「……そもそも、父親は誰なんだろう？」
「父親？」
考えがそのまま口に出てしまったらしく、ジャスティンがその言葉を拾い上げた。
「ルーシー・ヘルネスは、親が先に亡くなってたんだよ。だから父親も母親もいないし、親戚もいなかったらしいから、ヘルネスっていう名前も血筋も、もうなくなっちゃったんだ」
そうなんだ、と呟きかけて、エルはそれを自分の中にしまう。彼女は家族がいなかったから、一人で花屋を営んでいたのか。納得した反面、この広い花屋に一人で暮らすというのは、ジャスティン同様、寂しさもあったに違いない。
手に握るちりとりをもてあましながら、エルは何気なく部屋へと続く階段を見上げた。それにつられて視線を投げたジャスティンもまた、なにかを考えるように、唇を引き締めている。
「ジャスティンは、さ」
「ん？」
「吸血鬼のこと、恐いと思う？」
「フェリ伯爵のこと？」
先ほどの気難しい顔をさらにしかめて、けれどどこか愛嬌のある表情で、ジャスティンは考える。腕を組んで上体を反らせてみるあたり、どうやらおどけているらしい。
事件の話をしているうちに、店の中の空気が、重苦しいものに変わってしまっていた。うす曇だった空は太陽が見え始め、明るくな

っているのだけど、それに店内の空気が溶け込めていない。
「まぁおれは、実際におびえていたことがないから、サマンサさんたちみたいにそれほど吸血鬼を警戒しようとは思わないんだよな。もう全然出なくなったっていうし、そのうちドラキュラ伯爵みたいに伝説っぽくなるのかなーとか。正直、あんまりしっくりこない」
鼻の頭をぽりぽりとかいて、彼は言う。同じ姿勢で座っていることに疲れたのか、その長い脚をしきりにばたつかせていた。
「じゃあ、さ……」
もしあたしが、その吸血鬼と一緒に住んでるって言ったら、どうする？
言えるわけがなかった。エルは適当な言葉でその続きをうめようと思ったけど、それもうまく浮かばず、結局ジャスティンを混乱させてしまうだけだった。
「もしエルが、ルーシーさんみたいに襲われたら、黙ってられないだろうけど。この町のみんなはさ、自分の友達だったり家族だったり、見知った人を突然殺されたんだから、悲しみも恨みも深いと思うんだ。だからおれもみんなとはどうしてもわかりあえないものがあるし、それを埋めていくのにはとても時間がかかることだと思ってる」
彼の言っていることこそが、この町の人々が思う心の内だった。小さな町で、必ず人々と一度は顔を合わせるような、密度の濃い関係を築いてきた。言葉を交わさずとも、名前を知らなくとも、面識のあった人が突然亡くなったとすれば誰だってショックを受ける。そしてその原因が、吸血鬼が命をつなぐために、食料としてすすったというものだとしたら。
エルの知っているフェリは、人の血を食したりしない。生き物の肉もあまり好まない。綺麗な薔薇と、上等な赤ワインが好きな、年をとらないのが不思議なただの人間だった。
けれど彼は、この町の人々に恐怖を色濃く焼き付けた、今なお語り継がれる吸血鬼でもある。

もし今、ジャスティンが何者かに殺されたとしたら。エルは悲しみ、そして殺した者を憎み、恨むだろう。
フェリは、憎まれ、恨まれる立場だ。それは一生、消えることがない。彼はそれを背負いながら生きている。あの柔和な微笑みを見ていたら、そんなこともすべて忘れてしまうはずなのに。こうして耳から届く言葉は、エルの胸を深く突き刺してくる。
フェリは、エルの父親だ。今までエルを慈しみ育ててくれた父親だ。太陽の光は身体に毒だというのに、外で遊びたいとわがままを言うエルのために、ローブを着込んで散歩をしてくれた。具合が悪ければ看病してくれた。眠れなければ子守唄をうたってくれた。
エルの知っているフェリは、父親のフェリだ。それでいいのだと自分は思う。けれどそれは館の中だけでの話で、一歩外に出れば現実を突きつけられる。
自分は、吸血鬼と一緒に暮らしている。
それがもし、町のみんなにばれてしまったら。
なにより、ジャスティンに知られてしまったら。
「……エル？」
遠い先の話だと思っていたのに。まだまだ、霧の中に置き去りにいていい話だと思っていたのに。それが、すぐそばまで近づいてきている。
「お前そのうち、眉間のしわ消えなくなるぞ」
「まだ若いから大丈夫」
考えを霧の向こうにふりはらって、エルは歯を見せて笑った。
立ち上がり、吸血鬼の話は終わりだと態度で告げる。すると彼も立ち上がり、のびをする。天井に手が届きそうだった。
「やっぱり今日も、泊まってかない？」
「だめ」
「晩飯、食ってかない？」
「だから、だめだってば」

5、マーガレット―4

腰に手をまわされ、エルはそれをぺちりと叩く。顔を見上げた拍子に唇を重ねられ、驚き半分喜び半分で、その額をまた平手で叩いた。

ジャスティンが、エルのポケットに手を入れ、髪飾りを取り出す。もったいなくてつけられずにいるエルを知っていて、自分の手でつけたがった。

心なしか、外の空気がざわついているような気がする。けれどエルは、髪飾りを見て微笑むジャスティンに気をとられて、気づくことができなかった。

●●●

エルの外泊が多くなると、館が静かになることも多くなった。たとえ眠っていようとも、その寝息が、館に人がいることを示してくれる。けれどエルがいないと、館にはフェリ一人しかいなく、物音を立てても虚空に反響するだけだった。

寂しい、と思ってしまう自分が、なんだか情けなく思える。エルを育てる前は、ずっと、この館に一人でいたはずなのに。

エルが町に出ることは、正しい。

けれど、それと同時に、寂しくもなる。

いつも自分のそばにいたエルが、自分の知らない世界に足を踏み込んでいくことが、フェリ一人を置いてきぼりにしていくようで、切なく思えてしまう。

いずれはこうなると思っていた。けれど実際になってみると、思っていた以上に心に思うものがある。

「僕もそろそろ、子離れしないとな……」

一人ため息をつき、フェリは窓から空を見上げた。

雨が降る気配はないけれど、空には薄い雲が立ち込めている。太陽が現れることもなさそうで、窓際に立っても体に異変が起こることはなかった。

前より頻繁に使うことのなくなった、壁にかけっぱなしのローブ。フェリはそれを手にとって、穴や痛みがないか点検する。エルが補修してくれたおかげで、濃茶のローブはまだまだ使えそうだった。

フェリはそれに袖を通し、フードを深くかぶる。戸棚のガラスに自分を映し、フードから銀色の髪が見えないことと、牙を隠した話し方と笑い方を練習する。そして満足した後、彼は窓を開け放ち、そこからひらりと外へ舞い降りた。

一瞬、手の甲がローブからはみでる。外の空気に触れたその白い肌は、久々の明るい空気にすこしちりちりと痛んだけど、それ以上の変化はなかった。痛みもすぐに治まり、ローブに隠れた部分にはまったく変化がない。フェリはもう一度空を見渡し、太陽がないことを確認すると、そのまま館の門から出た。

見守るだけだ、と、彼はひとり言い訳をする。

久しぶりに外の空気を楽しむんだ、とも言い訳をする。

町で働くエルの姿を見にいこう。

見たら満足して帰ってこよう。

そう心に決めて、フェリは町への道を歩みだした。

久しぶりに訪れた町は、これといって大きな変化があるわけでもなかった。

町の中心の噴水の広間はあいかわらずしぶきをあげているし、その周辺で露天を開く旅人たちもいつものこと。噴水までの道に並ぶ商店街も活気にあふれている。新しい家が建ったわけでもなく、古い家を壊したわけでもなく、見慣れたセピアの景色があいかわらずそこにはあった。

ことあるごとに飾られた十字架や、聖水の入ったボトル。それか

ら、軒先に干されたにんにくもある。フェリが警戒されているのもいつものことだった。
エルがまだ小さいころは、フェリが買い物に行っていた。こうして曇りや雨の日を狙い、なるべく太陽に当たらないように、日陰に沿って歩いていた。吸血鬼の騒ぎがいくぶん落ち着いたころには、この容貌さえ人目にさらさなければ、普通の人間としてこの町に受け入れられることをフェリは学んでいた。
血や薔薇、ワインがあれば事足りる吸血鬼と違い、人間のエルは実にさまざまなものを必要とした。食べ物はもちろん、衣服を調達するのもとても大変なことだった。些細なことですぐ怪我をして、熱を出して、そのたびに振り回されるフェリは、いつも町の人に知恵を仰ぎ助けられていた。
あれほど命を奪い続けてきた住民から、子育てのことや看病の仕方まで、教わっている自分が実に奇妙に感じたものだった。
フェリは当時のことを思い出しながら、噴水への道をまっすぐに歩き続ける。そのしぶきが見え始めたころにあるのが、季節ごとにディスプレイを変える帽子屋さん。斜め向かいが八百屋さん。はちきれんばかりのお腹がくるしそうな主人があいかわらずの、お肉屋さん。どの店も、店構えこそ変わらないものの、売り子たちはみなそれぞれ年をとっている。何より驚いたのは、帽子屋のごま塩ひげを生やしていた店主だった経営が、同じ顔立ちをした息子に変わっていることだった。
自分がすこし訪れないうちに、働く人々は、年をとってゆく。いつまでも同じ姿をし続ける自分が、妙に町から浮いていた。
フードを目深にかぶっているせいで、視界が悪い。きょろきょろとあたりをみまわし、町の変化を感じ取りながらも、フェリは花屋が開いているのに気づいて歩みを止めた。
長く閉まっていた花屋を、よその町からやってきた青年が再び開いたのを、フェリも話に聞いて知っていた。けれどもうそのころには、町に出かけるのはエルの役目であり、フェリはその店を開いて

いる青年の顔を知らなかった。ただ、エルの話から、屈託のない性格をしているジャスティンという名の青年だということだけは知っていた。

店のつくりは変わらないものの、花の配置の仕方や、ならべる品揃えは昔とまったく異なっている。二階の窓にかかるカーテンの色も、淡いピンクではなく、無難なベージュへと変わっていた。

遠くから店を覗き込んでみても、エルの姿はない。そしてジャスティンもいない。店に客の姿もなく、時間が時間なのか、商店街の人通りもまばらなものだった。

花屋に入って気づかれるのは危ないと思い、フェリは八百屋で品物を見るふりをする。この店の売り子は女性だと思っていたけど、いつの間にかよく似た顔立ちの男性に変わっていた。彼は店の奥で本を読んでいて、果物を手に取るフェリを一瞥すると、また紙面に視線を落とした。しばらくここにいても大丈夫だろう。

はだけて足元の見えたローブを正しながら、フェリは耳をそばだてる。あまり聴覚を広げすぎては、町中の音が耳の中で洪水になってしまう。花屋へと意識を集中させると、たしかに聞きなれた、すこし抑え気味の声が聞こえてきた。

「……この店で、事件が起きたでしょ？」

エルの声だ。相槌を打つ低い声は、ジャスティンだろう。二人の存在を認め、そしてフェリは、話の内容が何なのかをすぐに察した。

「名前、ルーシー・ヘルネスっていうんだね。あたし、初めて聞いた」

「おれ、教えなかったからな」

「みんな、名前は絶対口に出さなかったもんね」

ルーシー・ヘルネス。

その名前に、フェリの心臓がいち早く反応した。

声が聞こえなくなるのではと思うぐらい、強く、早く、心の臓が鼓動し始める。身体をめぐる血が、まるで沸騰したかのように、痛みを伴いながら全身をめぐる。こめかみを流れる血液は、強い頭痛

を呼び、視界を薄暗くにごらすほどだった。
「ルーシーさんの殺され方、くわしく聞いたの。全身血だらけで、腕も足も、傷だらけだったって」
ルーシー。ルーシー。頭の中を、その名前ばかりがこだまする。人の口から彼女の名前を聞いたのは久しぶりだった。そしてそれがエルの口からだというのが、とても残酷だった。
エルは、あの時のことを、知っているようだった。
満月の夜。
花の香りが漂う彼女の部屋。
鼻をつく血のにおい。
床に倒れる彼女の姿。
触れた手が血でぬめる。
抱いた命の弱弱しいこと。
息をつくこともできない彼女の唇。
床に投げ出された指先の冷たさ。
寄せた唇に残る、あの味。
「……うぅ……」
声が漏れないよう歯を食いしばりながら、フェリはうめいた。
こみ上げる嘔吐感に、必死に口元を手で押さえる。今ここで変な行動を起こせば、八百屋の男性に不審がられる以上に、エルにだって気づかれてしまうかもしれない。それだけは避けたくて、フェリは震えるこぶしを強く握り締め、歯で噛んだ。
「顔に傷はなくて、綺麗だったんだって。でも、胸から下は傷だらけだったって……」
最後に見せた彼女の微笑み。頬にとんだ血糊を、丁寧にぬぐった自分の手。その話を、エルがしている。エルのあの声が、言葉を紡ぐ唇が、当時の記憶を呼び起こしてくる。
強い苦しみの反面、フェリは頭の奥底で、どこか納得していた。

5、マーガレット―5

エルがこのことを知るのも時間の問題だったのだ。
彼女は町に出るようになると、そこでフェリ伯爵についての話を耳にするようになった。ただそれを、フェリに直接口にしたのはただ一度きりのことだった。
フェリに言わなくなったとしても、情報を集めることはいくらでもできたはずだ。自分を育ててきた人物が、過去にいかなる所業を繰り返してきたかを、知ることはとても簡単だった。
けれど、ルーシーのことだけは、知らないままでいてほしかった。
もはやふたりの会話も耳から流れ出して、フェリはひとり、フードの中に顔を隠す。震える息をどうにか押し込めて、閉ざしたままのまぶたで天を仰いだ。
――ルーシー。
エルがその名を呼ぶたびに、胸が締め付けられる。息ができなくなる。気道を確保するためにのどをのけぞらせて、どうにか呼吸を保ち続けた。
エルが帰ってこないのは、その話を知ったからだろうか。たしかに、あまりにも惨たらしいことをしたフェリを知ったのだ。そんな者のもとに、帰ろうなんて思うわけがない。
はじめてエルをこの手に抱きあげたときのことを、フェリは昨日のことのように覚えている。すがるようにフェリの指を握った、今にも消えてしまいそうな弱弱しい命。その彼女は今、フェリに対して、強い拒絶の心を抱いているに違いない。
「……帰ろう」
吐き出すように呟き、フェリは店の屋根から一歩、外へと出た。
「――晩飯、食ってかない？」
ふいにジャスティンの声が近づいて、フェリははっと顔をあげた。
気づけば、ふたりは立ち上がり、店の外へ出ようとしていた。飾

られた花の隙間から、エルの横顔が見える。ジャスティンは背が高く、エルから視線を離せば、すぐにフェリに気づいてしまうだろう。
あわてて、フェリは屋根の中に戻る。いつの間にか、本を読んでいた男性の姿は消えていた。
品物を見定めるふりをして、フェリは横目でふたりを見る。エルの着ているワンピースは、なんて懐かしいものだろう。腰にまわされたジャスティンの手。それを払いはするけれど、エルも嫌そうではない。
話す二人の関係が親密であることは、一目でわかった。最近エルが上の空だった原因は、きっとこの花屋の主人のせいに違いない。
唇を重ねるエルとジャスティン。すぐに顔を話した二人は、目が合うとてれくさそうに笑う。そのエルの横顔に、フェリの鼓動が、さらに強く鳴った。
その黒い髪も、瞳も、決して似ているわけではないのに。頬の色も、唇も、彼女のものではないはずなのに。
どうしてその表情が、彼女を彷彿とさせるのだろう。
どうして彼女と同じように、頬を赤らめてうつむくのだろう。
どうして見上げる瞳は、そんなにも愛おしそうなのだろう。
フェリは目を背けて、深くうつむいた。
エルはもう、自分の元には戻ってこない。
そのほうがいいに違いない。
この町は、彼女を受け入れてくれる。好い人もいる。フェリと離れて、この町で暮らすほうがいい。不老不死の自分とは、いずれ別れが訪れるのだから。
この町で彼女が生きたように。この町で彼女が死んだように。
彼女の暮らしたあの家に、命と引き換えに産まれた子供が戻るのならば、彼女もきっと喜ぶに違いない。
「……ルーシー」
呟いたフェリの身体に、どん、と誰かがぶつかった。
「あ、ごめんなさい」

五感が鋭いはずの吸血鬼が、近づいた人にも気づかないなんて。内心苦笑したフェリは、あやまってくる女性に大丈夫だと手の平を見せた。

「お客様、なにかお探しですか？」

どうやら、男性が家に戻ったかわりに、女性が出てきたらしい。フェリにとってなじみの深い、サマンサという名の女性は、久しぶりに会うとさすがに肌の艶を失っていた。

けれどその凛としたまなざしはあいかわらずだ。こころなしかまぶたが腫れているようだけど、短く切った髪が目に鮮やかだ。空を映したような淡い色の瞳は、フェリを見て、まるく見開かれている。

「あなた……」

驚くサマンサの表情で、フェリはようやく、自分の頭を隠すフードがずれていたことに気づいた。

目の端に、銀の髪がうつる。そしてそれは、彼女にも見えている。フードを失い、さえぎるもののなくなった、フェリの赤い瞳を真正面からとらえている。

銀の髪と赤い瞳は、語り継がれるフェリ伯爵の容貌。彼女が一声あげれば、自分がまだこの町にいることが知られてしまう。

手を伸ばそうとする彼女を振り切って、フェリは店から飛び出した。

「――――！」

そして、顔に鋭い痛みを感じた。

見上げれば、雲の広がっていたはずの空に、切れ間ができていた。そこからさしこむ日の光の下に、今、自分がいる。

肉の焦げるにおいがたちこめる。とっさに顔をかばおうとした腕も、光を浴びて皮膚が溶け出してゆく。

まともに太陽をとらえた右の瞳は、一瞬にして光を失った。

髪が焦げる。肌が溶ける。そしてむき出しになった肉が、腐り、強い異臭を放ちだす。

「――あああああああっ！」

フェリの叫びまでもを、太陽の光が、かきけしていった。

6、ブルームーン―1

6　ブルームーン

結局、エルが館に戻るころには、日がすっかり暮れてしまっていた。
ジャスティンの晩御飯を作り、店の片づけをし。それからすこし話をした。
『帰り、一人じゃ危ないから送ってくよ』
『いいよ、そんなに遠いわけじゃないから』
すこしばかりそんな押し問答を繰り返し、ジャスティンが食事をし始めるのを確認してから、足早に帰ってきたはずなのだけど。
夏至はついこの間のことだと思っていたのに。日が暮れるのも少しずつ早くなってきている。まだ肌寒さには程遠いけれど、空は雲が多くて星が出ず、暗い。日中すこしだけ晴れたと思ったけれど、結局それもすぐ雲に隠されてしまった。
フェリはもう起きているだろう。エルは館の錆びた門扉を押し開ける。そしていつもどおり裏口から入ろうとして、館の異変に気づいた。
「なにこれ……」
庭の薔薇が、すべて枯れてしまっていた。
薔薇園は、春、夏、秋とそれぞれ季節に合わせて咲くように考えて育てていた。だからフェリの食べる薔薇に困ることはないはずなのに。薔薇のアーチも、花壇のものも、すべて枯れて頭をたれてしまっている。
アバランチェはもちろん、ゴールドバニーに、チャイコフスキー。

アイスバーグ、ドルスデン、クィーンエリザベス。どれも最後に見たときは元気だったのに。咲いたものがおろか、散りかけたものから蕾まで、どれもが見事に枯れてしまっていた。
薄暗い中、目を凝らしてみれば、薔薇の茎や葉はきれいなままだった。花弁だけが枯れて散ってしまうのは、フェリが食すときだけだ。それに気づいて、エルは背伸びをし、薔薇園の中で彼の姿を探した。
「……エル？」
「フェリ！」
夜は、フェリのほうが目がきく。彼はエルが帰ってきたことに気づいて、腕いっぱいに薔薇を抱えながら庭の奥から顔を出した。
「なにがあったの？」
彼が腕に抱えていたのは、ブルームーンという薔薇だった。薄く色づいた紫が青くも見える、エルの好きな薔薇のひとつだった。変わった色のためフェリの口にはあわなかったようで、毎年庭の観賞用になっていたはずなのに。
「どうしたの？　お腹すいてたの？」
エルのもとへ歩み寄ってくるフェリは、ほんのすこし唇を寄せただけで、抱えていたブルームーンをすべて枯らしてしまう。それを見てエルは、この庭の薔薇はすべてフェリがやったのだと確信した。
彼はローブに身を包んでいるため、夜闇に溶けて姿がよく見えない。あの銀の髪もフードの奥にあり、表情もまったくわからなかった。
ふらふらと足取りのおぼつかないフェリにあわてて駆け寄れば、庭一面に散った枯れた花びらが木の葉のようにかすれた音を立てる。手に持ったかごが邪魔になり、エルはかごを放って彼の体を支えた。
「おかえり、エル」
「ただいま……」
鼻をつく異臭に、エルはあたりをみまわす。まるで肉がいたんだような、生き物の死体が腐ったような、すえた臭いが庭の中に漂っ

ている。けれどなにか動物が死んでいるわけでもなく、臭いの中には、真っ黒にこげたステーキを髣髴とさせるものもあった。
「今日も、帰ってこないと思ってたよ」
「ごめんなさい、勝手に家あけちゃって」
エルの支えを振り切って、彼は気丈に一人で立ってみせる。その動きに乗る臭気に、エルは異臭の原因がフェリにあると気づいた。
太陽もないというのに、寒いわけでもないのに、ローブを着込んでいるのもおかしい。エルが手を伸ばそうとすれば、身体を離す。右腕をかばっているようにも見えた。
「腕、どうかしたの？」
エルが逃げようとする手を取ると、彼はかすかにうめき声をあげる。乱暴にローブから腕を出したとき、風がふいて雲が流れた。
「……ひどい」
かすかな光の下、ようやく見えるようになったフェリの腕は、焼け爛れ、肉が腐敗していた。
「どうしたの、これ！」
顔をあげると、彼はフードをはずす。限りなく満月に近い月の光が彼に降りそそぎ、浮かび上がったフェリの顔は、いつもの穏やかな表情とはかけ離れたものだった。
「……！」
声も出ず、エルは瞬きを忘れて彼の顔を凝視する。引きつった彼の唇は痛々しく、けれど確かに微笑んでいた。
腕のほうがひどいはずなのに、衝撃は顔のほうが大きかった。腕と同じく、右側半分が、焼け爛れてしまっている。長く頬に落ちていたはずの髪は焦げて短くなり、頬の肉も皮膚が溶け、固まったところは醜く引きつったまま。むき出しになった肉は腐敗し、腫れあがり、まぶたの肉は完全に閉じている。その瞳が光を失っているであろうことは、かろうじて残る銀のまつ毛から伝う、血の涙で察しがついた。
「……どうした、の？」

エルのふるえる口から出たのは、その一言だった。生ものが腐る臭い。かすかに、熟れすぎた果実のような甘いものも混じっている。嫌悪するはずのそのにおいを、エルは吸い込み、こみ上げる嘔吐感に堪えた。

この傷は、火傷によるものだ。炎が伝ったり、熱した油をかけられない限り、こんなにひどいものにはならない。エルがいない間に負ったものだとしても、ここまで腐敗するのはおかしかった。

「……太陽にあたると、こうなるんだ」

再びローブで傷を隠しながら、彼は言う。その声もまた、渇き、かすれていた。

「顔にあたったのをかばおうとしたら、腕までひどくなっちゃった」

「どうして太陽になんか……！　あたし、町に戻って薬買ってくる！」

庭に放ったかごを拾おうと、踵を返したエルの手を、フェリの左手が引きとめた。

「この傷には薬なんて効かないよ」

「でも、手当てしないと！」

「間に合わないよ。太陽の腐蝕は、すぐに広がっていくから」

太陽の腐蝕。それは吸血鬼が日の光を浴びたときに受ける傷のことだ。日の光を避けて生きる吸血鬼は、一度日の光を浴びれば、そこから身体が腐り始めてしまう。現にエルの目の前で、彼の腕の腐蝕は広がり続けていた。

「腕は広がる前に切り落とせば大丈夫だけど、さすがに首は切るわけにもいかないし……」

左手で右腕をかばいながら、フェリはうろたるエルから身を離す。彼なりに、腐蝕を見せないようにするための配慮なのだろう。

「どうにか、治す方法はないの？」

「……僕には、できないから」

エルに背を向けながら、フェリは庭に残った薔薇に手をかざす。それだけで花びらはあっという間に散り、けれど肩で息をつく彼の

様子は変わらなかった。
彼は体力を消耗している。それを補うために、庭の薔薇を食べつくそうとしているのだ。
「あたし、薔薇とワインと、いっぱい買ってくるから！」
「いいよ、エル」
いてもたってもいられず、なんとか彼の傷を軽減しようとするエルに、フェリはただ微笑むだけ。そして無事なほうの手で、目に涙を浮かべるエルの頭に、そっと手を伸ばした。
「綺麗な髪飾りだね」
「あ……」
今日一日、つけ続けていた髪飾りだ。存在をすっかり忘れていたエルは、その薔薇も彼にあげようと手をかけたけど、フェリはその考えを読んで首をふった。
「その薔薇は、食べられないと思う」
「でもこれ、本物の薔薇だよ？」
生気を感じられない、と彼は言った。
「それはエルがつけているべきだよ。僕が好きな薔薇に似てる。似合ってるよ」
エルの乱れた髪を正す指先が、かすかに震える。傷の痛みをこらえているようで、唇もきっと引き締まっていた。
「ルーシーみたいだ」
「……ルーシー」
本日何度も聞き、口にした言葉を、エルはもう一度舌の上に乗せた。
『花屋の、ルーシー・ヘルネスっていうひとは、あたしのお母さんなの？』
今日、館に戻ったとき、エルはフェリにそれを訊くつもりだった。けれど太陽の腐蝕に苦しむ彼を見ていると、とてもじゃないけど訊けるわけがない。今は、すこしでも彼の痛みを軽減させることが重要だった。

火傷の治療法を必死に頭の中で探すエルに、フェリはまた、微笑む。けれど腐蝕で表情筋までもを蝕まれた顔は、片方の唇だけが上がった、ニヒルな笑みしか作れない。

「エル。聞いて」

彼はエルの肩に手を置き、背をかがめて、顔を寄せた。

「エルは、ルーシー・ヘルネスっていう人の、子供なんだ」

フェリの吐息からは、かすかに薔薇の香りがする。けれどそれを打ち消すほどに、腐臭ばかりが鼻をついた。

「僕は、君のお母さんを殺したんだ」

6、ブルームーン―2

「フェリ……」
サマンサの話や、ジャスティンとの会話で、フェリが彼女の命を奪ったのは知っていた。
けれどエルは、心のどこかで、フェリが否定するのを待っていたのかもしれない。
彼の口から出た真実の言葉に、エルは頭が処理を拒み、呆然と彼の傷口を見上げていた。
「自分の親を殺した悪魔と、もうこれ以上一緒にいないほうがいい」
「悪魔だなんて、フェリは……」
「エルは人間なんだ。光の下で、人として、生きるべきなんだよ」
そして彼は、エルから離れ、門扉のほうへと目をやった。
エルもつられて、門を見る。雲が晴れ、明るくなった視界では、門の前に立ち尽くす彼の姿がはっきりわかった。
「――ジャスティン！」
見慣れた長身。短い髪。広い肩幅、大きな足。いるはずのない彼が、肩で息をしながら、そこに立っていた。
エルがそちらに気をとられているうちに、フェリがローブを翻し、その場を去ろうとする。ジャスティンがそれに気づいて追おうとするときにはもう遅く、フェリは館とは逆の、山の木々へと姿を消してしまった。
「ジャスティン、どうして……」
「エルがちゃんと帰れるか、心配で、後をついてきたんだ。そうしたら姿を見失って、この廃屋にいるのに気づいて、そうしたら誰かいて……」
事情を説明するのも億劫な様子で、ジャスティンはエルの身体に傷がないかを細かく調べてゆく。目のいい彼のことだから、光のない闇の中でも、エルが誰と話しているのか気づいたに違いなかった。

彼が町で聞いていた、吸血鬼の容貌は、確実にフェリと一致する。銀の髪、赤い瞳、口もとの牙、若い青年の姿。太陽の腐蝕に関してはわからないだろうけど、銀の髪をした若い青年といえば、吸血鬼だとすぐに気づくものだ。

「襲われたのか？」

「襲われてなんて……」

「帰ろう、エル。ここにいたら危ない」

立ち尽くすエルが、恐怖ですくんで動けないとでも思ったのだろうか。ジャスティンはエルを抱きかかえようとする。

身体に伸びてきた手を振り払い、エルは千切れんばかりに首を振った。

「違うの！」

「今のうちに町に帰ろう。おれのとこ泊まるの嫌なら、隣町まで送るから」

「違うの！」

エルがどんなに言っても、ジャスティンは聞こうとしない。彼もまた、いるはずのない吸血鬼を見て、気が動転しているようだった。

「なんでエルも、吸血鬼が住んでるって言われてるのに、廃屋なんかに寄ったりしたんだ」

「違うの、ジャスティン。あたしの家はここなのよ！」

もう、隠せない。エルはジャスティンを見上げた。

「あたし、ずっとここに住んでたの！　フェリと一緒にいたの！　フェリに今まで、育ててもらってたのよ……！」

最後の声は、半ば悲鳴のようだった。

なぜフェリは、自分を置いて去ってしまったのか。そればかりが頭を渦巻いている。あれではジャスティンに、まるで自分が襲われていたように誤解されてしまうではないか。

でもフェリは、いつもそうだった。自分は吸血鬼だから。悪者だから。決して一緒にいるところを見られてはいけない。育てられたことを知られてはならない。常々そう、口にしていた。だからエル

と一緒にいるところを見られたら、自分が悪者として振舞うのは当然といえば当然だった。
けれど。
「フェリは、あたしを襲ったりしないわ……」
彼は血を吸わない吸血鬼だった。薔薇とワインを好む吸血鬼だった。綺麗なものが好きな吸血鬼だった。
吸血鬼だけど、エルの育ての親だった。
「黙っててごめんなさい」
「エル……」
涙をこらえきれず、両手で顔を覆ってしまったエルを見て、ジャスティンは戸惑っているようだった。
彼が戸惑うのは当然だった。今までエルは、自分がすべてを理解していないからと、彼には重要なことはほとんど隠していたのだ。ジャスティンはエルがルーシー・ヘルネスの娘であることはおろか、ルーシーが妊娠していたことですら知っていない。情報に欠けた鎖（リング）の輪（ミッシング）が多すぎて、エルがフェリに育てられる理由を理解できないのだ。
エルだって元はそうだった。自分はどうして吸血鬼であるフェリに育てられているのか、謎でしかたなかった。だから町に出て、すこしずつ情報を集めていたのだけれど。
今、切実に、知らなければ良かったと思っている自分がいる。
考えればわかったことかもしれない。自分が被害者に関係していなければ、フェリが自分の前にあらわれることなんてなかったはずだ。
エルはどこか、自分は何も関係ないと思っていた。書庫で読みふけった本のように、自分のことを、謎の多いフェリの周辺を探る、探偵かなにかのようなものだと勘違いしていた。
「エル。帰ろう」
思考の糸がごちゃごちゃにからまった頭の中を、ジャスティンの低い声が分け入ってくる。顔を覆ったままのエルを抱きしめる力は、

いつになく強いものだった。
「おれ。なにもわからないけど、何も知らないけど、エルをここに一人おいていけない。フェリ伯爵と一緒にいさせたいとも思えない。一緒に、町に帰ろう」
「でも、あたし……」
「落ち着いたら、話してほしい。全部言えなくてもいいけど、おれは、フェリ伯爵は悪者だと思ってたんだ。その悪者がどうして今まで、エルを育てていたのか、全然わからない」
エルのことを知りたい。彼のその真摯な言葉に、エルはしばらく、胸を借りて泣いていた。
そしてようやく涙が止まったころ、ジャスティンはエルの手を引いて、町へと歩き出した。

○○○

家に戻ったジャスティンは、ソファーに沈み込んだエルが落ち着くようにと、ミルクを温めてくれた。
それがいつものフェリのようで、エルはまた泣きそうになる。けれど帰り道でいくぶん頭が落ち着いていたので、まぶたを二、三度ぬぐえば、甘いミルクをゆっくりと味わうことができた。
ジャスティンはジャスティンで、急かすわけでもなく、テーブルで店の伝票などを整理している。事態を把握しきれず、不安でいっぱいであるはずなのに、無言の背中はそんな様子は微塵たりとも見せなかった。
彼が一番、混乱しているに違いないのに。町で口うるさく言われ続けていたフェリ伯爵がまだこの町に潜んでおり、この目で見て、襲われていたと思っていたエルは彼が手塩にかけて育てた子供だというのだ。
その子供は今まで一緒にいて、夜をともに過ごした中だというのに、その一切を口にしていなかった。不安にさせて悪いのはエルの

ほうなのに、彼のほうが、エルを傷つけたといわんばかりな態度をとっている。
「……ごめんね、ジャスティン」
「なにが？」
「今まで、ずっと、黙ってて」
「すごい驚いた」
「ごめんね」
ひとつ深呼吸をして、エルはようやく、心を決めた。
「あたしね、赤ん坊のころからずっと、フェリに育ててもらってきたの」
自分が知っていることを、すべて、ジャスティンに話すことを決めた。
フェリが自分の育ての父であること。
エルが自分の素性を知らないこと。
フェリは血を吸わない吸血鬼であること。
彼の食す薔薇を買いに町に来ていたこと。
フェリに言われて、自分のことを偽っていたこと。
彼には一度も血を吸われたことがないこと。
他にもまだ、たくさんある。それを一言一言かみ締めるように話している間、ジャスティンは一切口を開かず、ただ黙って背中で聞いていた。
「あと、あたし、ルーシーさんのことでも、ジャスティンに黙ってたことがあるの」
「……こっちでも？」
「ルーシーさん、妊娠してたんだって」
傷だらけの遺体。おびただしいほど床に流された血。そして、ぽっかりと穴の開いた彼女の腹部。
エルのもたらした新しい情報に、ジャスティンはようやく、こちらを振り向いた。
「まさか……」

「さっき、フェリに言われたの。あたしは、ルーシー・ヘルネスの子供なんだって」
ジャスティンが顔をしかめるのも無理はなかった。
彼は今、エルと同じ考えに行き着いているに違いない。

6、ブルームーン―3

なぜフェリは、殺したルーシーの腹から、エルを引きずり出すなんていうむごいことをしたのか。
そしてなぜエルを育てているのか。
血を吸わないという彼の言葉から考えれば、エルの血を目的にしているわけでもない。そもそも彼はなぜ血を吸わなくなったのか。なぜ町から存在を消したのか。
ルーシーとフェリの間に何があったのか。
「エルの父親は、フェリなのか……？」
「育ての親はそうだけど、血までは、わからない。つながってないとは、昔言われたけどね」
すべてを訊く前に、フェリはエルの前から消えてしまった。
ジャスティンの疑問に、エルは答えることができない。なぜならそれをエルも知らないからだ。
自分が人間であることは知っていた。
知っているのはそれだけだった。
「ジャスティン、何か言って」
エルは、再び背中を向け、黙りこくってしまうジャスティンに、そっと声をかけた。
「あたしのこと、嫌いになったなら、言って」
彼の返事はない。それでも、エルは続けた。
「出て行けって言ったら出て行くから。顔も見たくないって言われたら、もう二度とこの町には来ないから」
それは、前々から覚悟していたことだった。
自分は普通の女の子ではいられないから。隠し事が多すぎるから。それを彼が知ったとき、拒まれたときのことを、ずっと考えていた。
拒まれるのが恐ろしくて、今まで黙っていたのもあった。
「なんでもいいから、何か言って」

エルは消え入りそうな声で、もう一度、言った。
けれど、ジャスティンは、黙ったままだった。
彼はふいに立ち上がり、エルの前に立った。その高い背は部屋の明かりを背負って黒く陰になり、表情がよくわからない。力なく垂れ下がっていた腕が動いたのを見て、エルはつかみかかられ、殴られることを呆然と考えていた。
しかしジャスティンはその手をエルに向けるでもなく、しばし宙を泳がせていた。そしてその手は彼の顔へと動き、その短い髪を乱暴にかきむしることに落ち着いた。
「……だめだ」
「ジャスティン？」
膝を床につき、彼はソファーに座るエルを見上げる。そしてカップを取り上げ床に置き、そのまま脈をたしかめるように、強く手首を握った。
「いざ、自分の身にそれが迫ってきたと思うと、やっぱりおれ、綺麗ごとは言えない」
綺麗ごと。
彼のその言葉に、エルはかすかに息を呑んだ。
「おれ、あの人がフェリ伯爵だって気づいたとき、真っ先に頭に浮かんだのは、嫌悪みたいなものだったんだ」
エルの手を、色が変わるほどに握りしめて言う姿は、まるで懺悔のようだ。彼はなにも罪を犯したわけでもない。けれどエルには、その懺悔をとめることができなかった。
「町のみんなから、たくさん悪い話を聞いたからかもしれない。だからもう、フェリ伯爵は悪いやつだって思ってるのかもしれない。でも、おれ、受け入れられないんだ」
ごめん。彼は息継ぎの途中、そう呟いた。
「たしかに、吸血鬼は、生きるために血が必要なのかもしれない。でも、血だけなら、殺さなくてもいいんじゃないかって思うんだ。人を殺してしまうのは、おれたち人間がまるで、牛とか豚みたいに、

食べ物だとしか見られてないみたいで……」
たしかに自分たちは、牛や豚や鳥や魚を、殺して、食べている。今まで食べられる立場になったことはなかった。牛や豚から見れば、自分たちは吸血鬼と同じなのかもしれない。
けれど。
「考えてみたんだ。もし、今、町の人たちが襲われていたらって。花を買いに来てくれたお客さんが襲われたらって。もしサマンサさんが襲われたらって。そうしたらおれ、絶対、フェリ伯爵のこと許せない」
祈りをささげるように組んだ手に、彼は唇を寄せた。
「今までは、いなくなったと思っていたから、他人事だったんだ。どうせ自分の身には関係ないと思ってた。でも、いざ自分がその中にはいったら……だめだった」
しんと静まり返った部屋の中で、聞こえるのはジャスティンの声と、エルの吐息だけ。
彼は目を伏せて、自分の中で、頭を渦巻く言葉を手繰り寄せているようだ。綺麗ごとならいくらでも言えるし、嘘偽りだっていくらでもならべられるはずなのに。自分に対して、正直な気持ちを述べる彼に、エルはなぜか愛しさがこみ上げていた。
「でも、おれが知ってるのは、エルを育てる前の伯爵なんだと思う。だからきっと、今の伯爵は、昔の伯爵とは違うのかもしれない。そう考えてみるけど……でも、過去に人を襲っていたことは消せないよ」
なぜ自分は、この愛しい人にまで、こんな辛い表情をさせなければいけないのだろう。感情が交錯して、エルは自分が泣きたいのか、彼を抱きしめたいのか、よくわからなくなっていた。
「エルに出てけなんて言わない。この話を聞いて、エルのことが嫌いになったりもしない。でも、エルがあの館に戻ることだけは、どうしても、嫌なんだ」
「……どうして？」

ようやく口を出た言葉は、乾いてかすれて、自分でもうまく聞き取れない。ジャスティンはそれが聞こえたのか、聞こえなかったのか、目を伏せたまま言葉を続けた。

「おれ、すごく、独占欲が強いんだ。欲しいものは何でも欲しいし、好きな人にはそばにいてほしい。だから、エルを、家に帰したくない。自分の中でまだ整理のつかない吸血鬼のそばに、いてほしいと思えない。帰ってほしくない」

そして彼はふいに、立ち上がった。組みほどいた手を、迷わずエルの身体にまわす。力強く抱きしめられ、エルは身体がソファーから浮き上がった。

「一緒に暮らそう、エル。一緒にこの町に住もう。花屋で、じゅうぶん食べていけるから。困らせたりしないから。だから、一緒に暮らそう」

「ジャスティン……」

愛しい人の腕の中にいるというのに、エルの頭は、妙に醒めてしまっていた。

今は、彼の腕の中にいる喜びよりも、町の外れの館のことが気になっていた。

あの館に戻れない。

館に住む、フェリに会えない。

フェリの傷は大丈夫だろうか。太陽の腐蝕に対する治療法はないのだろうか。あのまま放っておいたら、彼の身体はどんどん侵食されてゆくに違いない。

腕を切り落としてしまうのだろうか。

顔の腐蝕はどうするのか。

そればかりが気になって仕方がない。

「エル……」

呼びかけるジャスティンの声も、考えの渦巻く頭の中では、響かずに消えてゆくだけだった。

○○○

ジャスティンの寝息が、深く、規則正しくなったのを確認して、エルは目を開いた。

自分を抱きしめる彼の腕から、そっと、抜け出す。途中聞こえた寝言に一瞬どきりとしたけれど、彼は起きなかった。

はだけた布団を肩までかけなおし、エルはソファーにかけていた服を手早く着込んだ。部屋のカーテンを細くあけ、満月の位置を確認し、夜明けまでまだ時間があることを知った。

エルはもう一度、ジャスティンの寝顔を見る。彼はきっと、このまま朝まで起きないだろう。

「ごめんね……」

呟き、エルはその額に口づけをした。

朝、目覚めたとき、腕の中にエルがいなかったら。ジャスティンは驚き、そして悲しむに違いない。その様子がありありと頭に浮かぶのだけど、エルはもう、決めてしまっていた。

フェリの元に帰ろう。

草木も眠る丑三つ時、という表現がまさしく当てはまるほどに、外の世界はしんと静まり返っていた。

かたく閉ざされた門扉はいつのまにか針金を巻かれ、簡単には開かないようにされていた。それでエルは、フェリが館に戻っていることを確信する。

ワンピースのすそをたくしあげ、脚がむき出しになるのも気にせず、エルは門扉をよじ登る。降りるときにすそが破れたけれど、気にせず、足早に庭を突っ切った。

庭の薔薇はすべて枯れていた。エルは薔薇を持ってこなかったことを後悔する。気ばかりが空回りして、そこまで思いつかなかった

のだ。
門扉を閉ざされたわりに、裏口の鍵は施錠もなく、やすやすと中にはいることができた。階段に何か仕掛けがあるわけでもなく、いつもの部屋まで行くのに、そう時間はかからなかった。

6、ブルームーン－4

ノックも何もせず、エルは扉を開ける。ここは自分の家なのだから、遠慮も何も要らなかった。そして月明かりの差し込む部屋に浮かぶ姿に、ほっと安堵の息をついた。

「フェリ……」

彼はいつものとおり、部屋の真ん中で、椅子に腰掛けていた。

いつもどおり、窓から、月を眺めている。エルは一月に二度やってくる満月のことを、ブルームーンと呼ぶのを思い出す。今日はまさしくその日だった。

今日は満月だ。だから、ワインを飲んでいてもおかしくない。けれど床に置かれた瓶の数は多く、館中のものをかき集めたことがすぐにわかった。

やはり彼は、血が足りないのだ。

「やっぱり、戻ってきたんだね」

フェリはエルを見ても、おかえりとは言ってくれなかった。

ローブはいつものとおり、部屋の壁にかけられている。腐蝕した顔は髪で隠され、あの腐臭も、開け放った窓により、いくらか緩和されている。

もう切り落としたものだと思っていた腕は、まだ残っていた。けれど腐敗が進んでいるのであろうことは、力なく垂れた腕の様子でわかる。その黒く変色した指先を見る限り、右腕はもう、動かないのだろう。

「傷、どう？」

「あいかわらずかな」

答えるフェリの顔の腐敗が、首にまで広がっていることに、エルはようやく気づいた。一歩、二歩とおぼつかない足取りで近寄ると、よけいにその傷の痛々しさが目にしみた。

使い物にならなくなった右腕は、利き手だっただけに、残った左

手では何をするのも不便そうだ。グラスに何杯目かのワインを注ぎ、それを一気にあおる。肩で息をつく彼は、酔っているわけでもなかった。
「もう、そんなに、もたないと思う」
「そんなこと……」
ない、とは、言えなかった。ほんのわずかな時間で、こうも腐敗が広がってしまうとは、自分が思っていたよりも、太陽の腐蝕は深刻なものだったのだ。
「太陽の腐蝕もね、全身に浴びればほんの一瞬のことなんだ。光を浴びてもなお、生きようとすると、こういう風に腐っていく。いさぎよく浴びちゃえばよかったかな」
ふっと嘲笑を漏らし、彼はエルを見た。
「僕に話を聞きにきたんだよね？」
「……うん」
おいで、と手招きされて、エルはいつもの椅子に座った。
窓から、月が見える。満月の夜は、いつもこうして、フェリの話を聞く日だった。
いつもは、おとぎ話だったのに。神話だったのに。絵本だったのに。
「僕も、いずれは、エルにこの話をするつもりだったんだ」
今宵の話は、フェリが長く口を閉ざしていた、過去の話だった。

7、ロイヤル・ハイネス―1

7　ロイヤル・ハイネス

美しいものが好きだった。
美しいものを見るのが好きだった。
美しいものをそばに置くのが好きだった。
美しいものを作るのが好きだった。
それが若き日のフェリだった。
生きるために血を口にし、生きるために太陽から隠れていた。すべては吸血鬼として生きるため。そう思っていたはずなのに。
人の血は、上等な酒よりも、甘美で高貴な味をしている。そしてその血は自らの身体をめぐり、長く生きるための命を与えてくれた。
血は、ほんの一口二口飲んだだけで、十分に満足感を得ることができる。だから普段は人と同じ食事で空腹を満たし、血が手に入らないときは薔薇とワインを代わりにした。
けれど、いつしかフェリは、血に溺れるようになっていた。
血を多く食すということは、自らの命を多く伸ばすということ。人ひとりの血を飲み干せば、その人が生きるべきだったときと同じだけ、自分の命を永らえることができた。
自分が生きる代わりに、その人間は死ぬ。
その人間の時が止まる。
自分が血を飲むことで、その人が一番美しい姿のままで、時を止めることができる。
横たわる身体は、傷もなく、苦悶の表情もない。永遠の眠りを、美しい姿で迎えることができる。

それを、自分の手で作り出すことができる。
自分の行為をそう美化するようになったころには、フェリの身体は甘美な血のもたらす毒におかされていた。
自分の行為を冷静に振り返ることもなく、ただただ、血と、自分の作り出す芸術に、ひとり酔いしれていた。

転々と土地を渡り歩き、“仔犬の町”と呼ばれる町にたどりついた。そしてふと訪れた大きな館では、豪華なドレスや燕尾服に身を包んだ人々が、舞踏会を開いていた。
シャンデリアからきらめく光。軽やかな音楽。振舞われる酒、食事。
頬を紅葉させた人々が、みな一様に笑顔で、ステップを踏んでいる。
その姿がとても美しかった。
衝動的に襲ったその行為は、町の人々にフェリの名前を焼きつけた。そしてフェリが事実上奪い取った館に住み始めると、誰も近づかなくなり、周囲の家は次々に消えていった。
館の人々を襲ったことで、もてあますほどの命を手に入れたフェリは、前のように頻繁に人を襲わなくなった。
時折町に下りて、人々の姿を眺め、美しい人を探していた。単に見目が美しい、若い娘だけを探していたわけではない。白銀の色に染まった髪が美しい。汚れのない瞳が美しい。自分の目に留まった人を調べ、時を決め、その人が眠るころを見計らい、血を吸った。
はじめは、目当ての人をさらったこともあった。家の外に放置した身体は、どんなに綺麗に整えたとしても、野犬にあらされてしまうことが多かった。だから放置するのは、報復として館を襲いに来る者だけにした。
それを何度も繰り返し、何年もの月日が流れていた。

ルーシーは、ひとりで花屋を営む、まだ若く美しい女性だった。
調べてみれば、彼女は、フェリが住む館の主――ヘルネス家の血をひいていた。親を早くに亡くし、身よりもなくひとりだというのに、いつも笑顔を絶やさない子だった。
とても美しい人だった。

●

『あなたが……吸血鬼？』
初めて聞いたルーシーの声は、とてもあたたかく、澄んだ声だった。
『最近、あたしの様子をうかがっていたのは、あなただったのね？』
いつもどおり、フェリは寝静まったころを見計らって、家に侵入したつもりだった。
『残念ながら、今日は寝付けなくて、起きてたの。こんばんは』
突然家に侵入してきたフェリを見て、彼女は叫び声ひとつあげなかった。その青い瞳でフェリの姿を見、それが吸血鬼だとわかっても、恐怖の表情ですら浮かべなかった。まるでいつもの接客のように、笑顔まで見せて、フェリにそう言ったのだ。
予想だにしなかった出来事に、フェリは呆然と、ピンクのカーテンのかかった窓枠にしがみついていた。姿がばれれば逃げるべきなのに、ルーシーの悲鳴がなかったため、拍子抜けしてしまったのだ。
それでも冷静になろうとつとめ、部屋に上がりこんだ。彼女はフェリを追い出そうとするわけでもなく、いらっしゃいと声までかけてくれた。
『ルーシー・ヘルネスだな？』
『そうよ』
あまりに堂々とした姿に、フェリは怖気づいてしまいそうになる。これから殺めるべき人と言葉を交わすことなんて、今までほとんど

なかったからだ。
『あたしの血を、吸いにきたんでしょう？』
わかっているのなら、なぜ逃げ出そうとしないのか。すっかり勢いを折られてしまったフェリを見て、ルーシーはくすりと笑った。
『なんとお呼びしたらいいのかしら？　フェスタリオン伯爵？』
『フェリでいい。それに、僕には爵位も何もないはずだけど』
『ドラキュラ伯爵から、伯爵って呼んでるのよ。あの館に住んでるんだし、みんな伯爵、伯爵って言ってるわよ』
その館は、ヘルネス家の血を引いている、ルーシーのもののはずだ。けれど彼女はそれを知っているのか知らないのか、何も触れてこない。
『僕に血を吸われるっていうのが、どういうことかわかっているのか？』
『もちろん、わかってるわよ。あたし、あなたに殺されちゃうんでしょう？』
死に直面した人間が、どうしてこうも心穏やかなのか。それが、フェリには理解できない。舞踏会での人々の阿鼻叫喚の声は、今でも耳に残っているというのに。
そして彼女は、堂々とした風を貫きながら、フェリに言った。
『できれば、血を吸うの、もう少し待ってもらいたいの？』
『待つ？』
『あたし、妊娠してるのよ』
ソファーに座るお腹に手をあてながら、彼女は言った。
『そんな薄っぺらい腹に子供なんているもんか』
『だってまだ、そんなに月日重ねてないもの。長く生きてる吸血鬼にも、知らないことってあるのね』
その言葉が、厭味に聞こえないのが不思議だ。しげしげとお腹を見つめるフェリを見て、ルーシーはお腹をふくらませてもう一度撫でてみせる。
けれどやはり、見た目には妊婦だとわからない。彼女が嘘をつい

ている可能性も十分あった。
『そう言って逃げるつもりか？』
『そんな見え透いた嘘つかないわよ』
生きている時間は違うとはいえ、見た目の年はさほど変わらない。むしろ自分のほうが年上といわんばかりに、彼女は胸をはってみせた。
『フェリって、一度狙った人は逃がさないって聞くけど、なにもあたしの子供まで狙ってるわけじゃないんでしょう？』
『それは……そうだけど』
『だから、子供が産まれるまで待ってほしいのよ』
そうか、と納得しかけて、フェリは慌ててかぶりをふった。
『まだ子供がいるっていう証拠がない』
『つわりならあるけど、ここでうえーって吐かれても嫌でしょう？』
『それは……』
なぜだろう。彼女の言葉にまったく勝てない。清楚な見た目にだまされたようだけど、かなり達者な口をもっているようだった。
『もう少ししたらお腹が大きくなってくるから。せめてそれまで、待ってほしいの』
『逃げるかもしれない』
『だから、逃げないって言ったのに……』
あきれたといわんばかりに、彼女はため息をついた。
『そもそも、僕が子供を狙わないなんて言ってない』
『今襲うなら、あたし最高に苦しそうな顔してやるから』
彼女と話しづらいわけがようやくわかった。
ルーシーは、フェリのことを良く調べているのだ。
フェリの人の選び方。そして最期の作り方。話を聞いて、彼女は推測したに違いない。フェリの美意識が、苦悶の表情を浮かべた最期を作り上げるなど、断じて許さないことまでお見通しなのだ。
『子供が産まれるまで待ってくれるなら、おとなしくしてるわ。寝てるときにでも、なんでも、襲ってくれてかまわないから』

そして彼女は、まっすぐな瞳でフェリを見た。

7、ロイヤル・ハイネス―2

『お願い。子供まで殺さないでほしいの』
それは命乞いだった。
けれど、フェリが今までに見たことがない、命乞いだった。
自分の命はいくらでも差し出すから、子供だけは助けてほしい。言っていることはそうだ。けれどルーシーは、泣き叫ぶでも頭を下げるでもなく、その姿は半ば、刑の宣告のようでもあった。
『お願い』
思わずはいと言ってしまいそうになるぐらいの迫力がある。これが母親になる女性の強さなのだろうか。フェリは圧倒されてしまっていた。
彼女の目力がとても強い。澄んだ水底のような深い青は、低く燃え盛る炎のようにも見える。
『……わかった』
フェリは、そう言わざるを得なかった。
『ただし、どんなに待っても腹が出てこなかったら、僕も動かせてもらうから』
『わかったわ』
『逃げないように、毎日来る』
『毎日？』
ルーシーが、きょとんと目を丸くする。そして、先ほどの威圧も忘れてしまうほど、華やかに笑った。
『それは、にぎやかになるわね』
表情によって、与えられる印象がずいぶん変わる。顔を惜しげもなくくしゃくしゃにする、決して美しいとはいえないけれど、好感のもてる笑顔だった。
『いいわ。あたしは決して逃げない。逃げようとしたらすぐに血でも何でも好きにしていいわ。ただ、子供の命までは奪わないと約束

して』
『わかった』
彼女が約束の証として求めたのは、意外にも指きりだった。
『やぶったら、この指切り落とすから』
『……わかった』
その細い指は、からめるととてもあたたかかった。そしてルーシーは、話を終えると立ち上がり、『じゃああたし、寝るから』と宣言した。
『考え事して眠れなかったのに、フェリと話してたら眠くなっちゃった。お腹の子のためにも、身体をいたわることにするわ』
恐れも何も見せずに、彼女はフェリの頬を両手で包み込む。フェリが驚いて離れようとする前に、ルーシーは額に口づけてきた。
『これ、あたしの両親がいつもやってくれてたことなの。いい夢をみられますようにっていう、おまじない』
『おまじない……』
『フェリが毎日来てくれるなら、あたしもこれ、毎日やってあげるからね』
フェリの断りの声も聞かずに、彼女ははやばやとベッドにもぐりこんでしまう。
『おやすみ、フェリ』
『……おやすみ、ルーシー』
こうしてフェリは、彼女に流されるまま、十月十日を待つ約束をしてしまったのだった。

●

『……腹はまだ大きくならないな』
『そんなちょっとやそっとで、目に見えてわかるわけないじゃない』
訪れるなりじろじろと腹部を観察するフェリに、ルーシーは大仰に顔をしかめてみせた。

『窓から入ってくるの、やめない？　せっかく裏口のかぎあけといたのに』
『窓から入ったほうが早いじゃないか』
『次からちゃんと、ドアから入ってきて。ノックもしてね。あと、せめて、こんばんはって挨拶ぐらいはしない？』
『……こんばんは、ルーシー』
むすっとした表情で言ったフェリに、ルーシーはくすりと笑った。
『こんばんは、フェリ』
どうも、彼女といるといつもの調子が出ない。人とまともに言葉を交わすのが久しぶりなのもあるからだろうか。
通うのはいいけれど、フェリは家にいてもすることがなかった。けれどそのまま帰るのもつまらない。部屋を見回したフェリは、ふと、窓際に椅子がひとつ増えていることに気づいた。
『あ、それ、フェリの椅子ね』
『わざわざ、買ったのか？』
『まさか。物置から持ってきただけ』
どうやら昔、家族が使っていたものらしい。彼女の厚意をありがたく受け取ることにして、フェリはその椅子に腰掛けた。
座るとちょうど、使い古したソファーに座るルーシーと向き合う形になる。それにどう反応していいか困っていると、彼女はまた笑った。どうやらからかっているらしい。
『子供が産まれるまでは長いんだから、壁はってないで、仲良くしようよ』
ネグリジェの上にカーディガンを羽織って、彼女はキッチンへと足を運ぶ。寝室のドアを開け放って居間と一緒にしているのを見るととても不思議だったけれど、彼女に言わせれば『一人で暮らすならこれぐらいのほうが楽なのよ』とのことだった。
『夜ご飯、食べた？　あ、フェリなら朝ごはんかな？』
『食べてない。というか、食べない』
『どうして？』

『人の食事は、あまり意味がないから……』
たしかに、空腹を満たすにはちょうどいい。けれど栄養としては不十分であり、命を延ばすにはまったくもって意味をなさなかった。
『だからそんな細っこい身体してるのよ。シチューあるから食べなさい』
『いや……』
『というか、作りすぎたから、食べて』
皿いっぱいに盛られたシチューに、フェリは思わず目を丸くする。作りすぎたというよりも、あらかじめ誰か来るのを考えて作っていた気がしてならない。
しぶしぶテーブルに移動してスプーンを握ると、ルーシーがほっと安堵の息をついた。それをフェリは見逃さなかった。
『吸血鬼って、やっぱり血しか栄養にならないの？』
『いや、そういうわけでも……』
言いかけて、フェリは舌をやけどしそうになる。あちちと呟くと、ルーシーは水をくれた。まるで自分が子供に戻ったようだった。
『血はいつでも手にはいるわけじゃないから、代用もいくつかあるんだ』
『ワインとか？』
『よく知ってるな。あと、薔薇もいいんだ』
『……薔薇？』
ルーシーが、テーブルに乗った、薔薇の入った花瓶を指差す。
『これ、食べれるの？』
『食べれるというか、生気をもらうというか』
あまりにも彼女が不思議そうに言うので、フェリは薔薇を一輪取り、唇を寄せた。そっと息を吸えば、薔薇は枯れ、花弁は自らを支えられずに舞い落ちてゆく。
一瞬のことに、ルーシーは目をしばたかせるだけだった。
『すごいわ……』
『血とは違うけどな』

これまでの訪問で、彼女に吸血鬼についていろいろ質問されていた。ルーシーは読書家で、吸血鬼の出る本もいくつか知っているようで、創作と事実の違いを知りたがったのだ。
『じゃあ、これからは、薔薇も用意しとくわね。店のも庭のもたくさんあるから、薔薇には困らないわよ』
どうやら当面、食事に関して困ることはなさそうだ。彼女はフェリが、狙った人物の血を吸うまで、他の人間には手をかけないことまで知っていたのだ。
『薔薇もいろいろ種類あるけど、やっぱり血みたいに真っ赤な色のほうがいい？』
『僕は白薔薇のほうが好きなんだ。赤薔薇は味が濃いから』
『品種によっても味が違うの？』
ふぅんと、ルーシーはおもむろに薔薇を手に取り、かじってみる。けれどすぐに顔をしかめてしまった。
『人は……おいしいと思わないと思うけど』
『うん、おいしくないや』
舌の上にはりついた花びらをはがし、彼女は口をゆすぐ。かじりかけの薔薇も、フェリが片付けた。
『……この薔薇、変わった味がする』
『やっぱり？』
花瓶にいけられた薔薇を、フェリは手に取る。それは花束として作られていたようで、添え色のカスミソウなども混じっていた。
薔薇を主にまとめられているようで、赤い薔薇のほかに、オレンジがかった白薔薇もはいっている。そのバラを口にするのはフェリも初めてで、普通の白薔薇とは違う、果実のような甘い香りが特徴的だった。
『それ、ピーチ・アバランチェっていうの』
『店で仕入れたのか？』
『ううん、他の町に出かけた人が、あたしにプレゼントしてくれたの。近場じゃあまり手にはいらないものだからって』

その薔薇を見る瞳の色が、甘く変わったのに、フェリはすぐ気づいた。うっすらと色づいた頬。愛おしそうに花弁を撫でる指。なるほどな、と思ったフェリは、あえて何も言わずに次の薔薇を手に取った。

人からもらった薔薇を食べられることに、ルーシーは嫌そうな顔ひとつしなかった。むしろ、もっとあるよと言うあたり、フェリのほうが気を使ってしまいそうになる。

『好きな銘柄とか、あったらそろえるけど？』

7、ロイヤル・ハイネス―3

『じゃあ、ロイヤル・ハイネスで』
『あら奇遇。私も好きなのよ、ロイヤル・ハイネス』
フェリは味として。ルーシーは見た目として。目的は違うけれど、数多くある品種の中から同じものを選んだことに、なぜか親近感がわいた。
白い歯を見せながら笑い、ルーシーはふと、フェリの顔をまじまじと見つめた。露骨な視線に、フェリが顔をしかめてもおかまいなしだった。
『フェリは、ロイヤル・ハイネスに似てるわね』
『……どういう意味だ？』
『その白い髪とか肌とか、頬の色とか唇の色とか。それにしても、可愛い顔ね。女の子みたい』
褒められているのかけなされているのかわからなくて、フェリは眉間にしわを刻むことしかできなかった。
『ああでも、今年は庭の、うまく咲かなかったの。ここらへんじゃあまり手に入らないから、期待しないで待っててて』
来るたびに、約束ごとのようなものが増えてゆく。
フェリは彼女との間に増えて行くことに、すこしばかり、不安を覚え始めていた。

●

『こんばんは、ルーシー』
『こんばんは、フェリ』
ようやくその挨拶になれたころには、フェリの訪問も監視というような堅苦しさはとれ、ルーシーが寝る前の団欒のひと時、といったものに変わっていた。

彼女の作った料理を食べ、話をする。長いことひとりの生活を続けていた彼女にとって、会話をする相手がいるというのは、とても嬉しいことであるようだった。
フェリとしては、会話をする相手というものがいなくなってからの時間をあまりにも長く過ごしたため、最初は自分が声の出し方を忘れてしまったのではと思うほどに言葉が出てこなかった。ルーシーはフェリの凝り固まった声帯をほぐし、会話をさせることで、遠い昔のことなどを思い出させてくれた。
さすがにもう、わざとらしくお腹を見ることはしなくなった。ただ、彼女の手が頻繁にお腹を撫でるのを見ると、大きくならないことを望んでいた自分を忘れてしまいそうになる。
『もうしばらくしたら、店を休むことにしたの』
業務日誌を書く手を止めて、彼女はそう言った。
『お腹が目立ちだしたら、家にこもって大人しくしてるわ』
『別に、子供がいても働くには支障ないんじゃないのか？』
『働くには全然問題ないんだけどね。ちょっと事情があって、しばらく姿を消すことにしました。町にはいるけど』
その事情について、くわしく訊くのはやめた。彼女が時折見せる思案の表情は、産まれてくる子供に対しての期待と不安、というわけでもなさそうなのはうすうす気づいていた。
『収入とかは大丈夫なのか？』
『親が残してくれたのがいろいろあるからね、しばらくは大丈夫』
『食料とかは？』
『友達に頼んであるから大丈夫』
友達とは、隣の八百屋の、サマンサという子のことだろう。飾らない、豪快な笑顔が印象的な子だった。ただし、血を吸い、時をとめたいとは思わなかった。
『だからあたしのところに来るときも、誰かに見られないように注意してね？』
『いつもしてるよ』

『知ってる』
いつもの彼女の軽口だ。けれどルーシーは笑みを見せた反面、口もとが笑いきれずにひきつっていた。
『フェリ……』
『ん？』
『あまり綺麗な薔薇、出せなくなっちゃうけど、いい？』
他にもなにか言いたげなのを、彼女は隠しているようだ。けれどフェリはそれに気づかないふりをして、肩をすくめてみせた。
『別に、無理して出さなくてもかまわないよ』
ルーシーのもとでいただく薔薇は、どれもみずみずしく、のどを潤すものばかりだ。花瓶にささった薔薇をいつものようにいただきながら、フェリはちいさな嘘をついた。
『結局、ロイヤル・ハイネスも仕入れないままだわ。ごめんね』
『いいよ、別に』
また花屋を開いたときにすればいい。
そう言いかけて、フェリは気づいた。
次に花屋を開くのは、ルーシーが子供を生んだ後のこと。
ルーシーは子供を生んだ後、フェリに血を譲ると約束している。
花屋はもう、二度と開かないのだ。
『……フェリ？』
突然押し黙ったフェリに、ルーシーは声をかける。彼女自身、自分が花屋を再び開けるかどうか、考えているのか謎だった。
『僕も、薔薇を育ててみようかな』
『フェリが？　できるの？』
『わからないから、教えてほしい』
めずらしいフェリの素直な言葉に、ルーシーは一瞬きょとんとして、すぐにぱっと笑った。
『いいわよ。でも、けっこう難しいわよ？』
ルーシーの育てる薔薇の株を分けてもらえることになった。
彼女のかけらをもらえた気がして、嬉しく思う自分が、とても不

思議に思えた。

●

宣言どおり、彼女はそれから一月ほどたったころ、店の戸を完全に閉めてしまった。

切花はすべて処分してしまったけど、鉢植えなどは部屋に運んでいる。重そうな鉢を運ぶときは、フェリが不安になって、彼女の腕からひったくって運んだ。

二日に一回というペースで、サマンサがルーシーの様子を見に来る。たまにフェリが訪れる時間に重ねてくることがあり、あわてて身を隠すうちに、二人が幼いころからの親友だということを知った。

『ねえ、フェリ。訊いてもいい？』

『駄目って言っても、どうせ訊くんだろ？』

図星だったらしく、ルーシーは苦笑した。

いつもどおり、フェリは椅子に腰掛け、薔薇を食べていた。最近ズボンなどがきつくなってきたらしい彼女は、スカートを好むようになっていた。深緑の丈の長いワンピースがお気に入りで、よく着ていた。

『フェリは吸血鬼になる前、なにをしてたの？』

『吸血鬼になる、前……？』

質問の意味がよくわからず、フェリは首をかしげる。そして彼女のよく読む本の内容を思い出し、ああ、と呟いた。

『僕は、誰かに吸血鬼にしてもらったわけじゃないよ』

よく、吸血鬼の伝説の中に、血を吸われた者は吸血鬼になるという話がある。あるいは、吸血鬼の血を飲んだ者も仲間になる、という話もある。

残念ながらフェリには、血を吸おうとも血を飲ませようとも、人間を吸血鬼にする力は持っていなかった。

それは、フェリがそういう手段で吸血鬼になったわけではないか

らだ。
『僕は、生まれたときから、吸血鬼だったから』
『……そんなこと、あるの？』
きっと、どの本にも、吸血鬼の赤ん坊の話は無かったのだろう。
ルーシーは目をまるくして、フェリを食い入るように見つめていた。
『僕の両親が、吸血鬼になったばかりで、まだ若かったからかもしれないね。人間の生殖機能がまだ若かったから、きっと僕を身ごもったんだと思う』
吸血鬼は、不老不死になったとしても、限界がある面もある。年とともに髪は白くなるし、生殖活動もできなくなる。だから吸血鬼同士で子供ができるのは、本当に稀なことだった。
『人から吸血鬼になったんじゃ、こんな赤い瞳には産まれてこないよ。僕は吸血鬼の中でも、珍しい部類に入るんだ』
赤ん坊から青年になるまでの時間は、人間のそれと大して変わらなかった。青年の姿のまま、老化しなくなったのは、その年頃から血を多く摂取するようになったからだ。
『……そうか、だからだったのね』
『なにが？』
『フェリが、人間らしくないなって、思ってたの』
ルーシーの言葉の意味がうまくのみこめず、フェリはまた首をかしげる。彼女もうまく言葉にあらわせられないようで、唇をとがらせ、しばらく考えてから口を開いた。
『もし、自分が、吸血鬼になったら……って、あたしたまに考えることがあるの』
その手が、自分のお腹をそっと撫でた。どうも、彼女の癖になりつつあるようだ。
『生きるためには、血を吸わなければならない。でも、それはかつて自分も仲間だった、人間でしょう？　その人間の血を、ほんのすこし分けてもらうことはできても、あたしはそう頻繁に血を吸えないだろうなと思って』

7、ロイヤル・ハイネス―4

一瞬、フェリの行いを咎めているのかと思った。けれど、話すルーシーはそんなそぶりひとつ見せない。彼女の話をどう受け取っていいのかわからず、フェリはただただ困惑していた。

けれど、たしかに、彼女の言いたいことはわかる。

同じ仲間であった人間の血を吸うということは、自分の仲間を食べているということ。つまり共食いであり、カニバリズムであるということ。けれど実際の吸血鬼たちが、自分をカニバリストと思ってるかどうかは、フェリにはわからない。

フェリは生まれながらに吸血鬼だった。

だから、人の血は、食料であった。

『僕には、血を吸うことは生きることだったから……』

『そうよね。血がないと死んでしまうわよね』

フェリにとって人間は、血を身体の中に蓄えた、血の樽だった。

『血は、やっぱり、生き血じゃないとだめなの？』

『死体の血じゃ、意味がない』

『そっか……』

フェリはふと、ルーシーの血の味がどんなものか、考えてみようとした。

けれど、舌の上には、何の味も浮かばなかった。フェリの膝の上で横たわる彼女の姿ですら、想像するのが難しかった。

『生きるために、血を吸うのよね。あたしたしだって、生きるために、牛や豚のお肉を食べているわ。だからこそ、いただきますって、言うんだけど……』

どこか遠くを見るように視線を投げながら、彼女は呟く。ルーシーの言った『人間らしくない』という言葉に、フェリはひとり、納得してしまっていた。

フェリにとって人間とは。

はたして何だろう。
食料でしかないのだろうか。
ルーシーも食料なのだろうか。
そのお腹に宿る命も。
自分もたしかに、人間であった両親の血を、引いているはずなのだけど……

●

『なんかすごい、今日元気いいよ』
『ルーシーが？』
『お腹の子がよ』
フェリ、けっこう天然？　ルーシーが笑う。そして窓際にもたれるフェリに手招きをした。
『触ってみない？』
『いいよ』
『触ったことないでしょ？』
『いいってば』
拒むフェリに、ルーシーはもうと唇をとがらせる。そして立ち上がり、背を向けるフェリに腕をまわした。
『なにを……』
『いいから、じっとして』
背中に、彼女の胸よりも先に、お腹があたる。逃げようとするのをたしなめられ、じっとしていると、背中になにかが動くのを感じがした。
ルーシーの手は、フェリの手にまわされたまま。背中にぶつかるようなものは何もない。そうだとすれば、考え付くのは、彼女のお腹に宿る命だった。
『わかる？』
『うん』

『元気でしょ？』
『うん』
『これで、子供がいないなんて言わせないからね？』
『……うん』
お腹が目立ち始めたことで、約束が延長されたことも、暗黙の了解になっているのだと思っていた。けれどルーシーは、フェリが何も言わないことにすこしばかり不安を抱いていたのかもしれない。認めた後も、抱いた腕を離そうとしなかった。
『フェリに、お願いがあるの』
『なに？』
ルーシーのお願いは、これで何度目だろう。最初はうんざりしていたフェリも、麻痺し始めたのか、素直に聞くようになっていた。
『名前をつけてほしいの』
さすがに今回ばかりは、『だれの？』とは言えなかった。
『男の子か女の子か、わからないけど、名前をつけてほしいのよ』
なぜそんな大事な役を、フェリに頼むのか。サマンサに頼むべきではないだろうか。フェリはそう言おうと思ったけれど、背中に伝わる胎児のやわらかな動きとあたたかさに、言うことができなかった。
『お願い、フェリ』
肩に、ルーシーの頬が触れるのがわかる。やわらかくて、そしてあたたかい。フェリが触れる人間はみな、次第に冷たくなってゆくばかりだったのに、彼女の身体だけは、いつもあたたかく、肌は脈を刻んでいた。
『……ルーシーの名前は、どう書くんだ？』
『スペル？』
問われて、彼女は宙に文字をなぞった。
L・U・C・Y
指先が動くたびに、豊かになってゆく胸があたる。彼女の髪がくすぐったい。それを意識しないよう、心を穏やかに保ちながら、フ

エリは指先を見つめていた。
『……エル』
『エル？　それだけ？』
『いいんだ、エルで』
単に、ルーシーの頭文字をとっただけだった。彼女もそれを察したようで、苦笑が首もとをくすぐる。
『どっちが産まれても大丈夫な名前ね』
けれど、考え直せとは言わずに、それを受け取ってくれた。やたら背中にあたる感触がにぎやかになったのは、抗議なのか、喜びなのか、よくわからない。
『エルだって。よかったねー、名前決まったよ』
ルーシーのその呼びかけはもちろん、愛しい我が子のためのもの。背中に伝わる胎動に耐えられなくなって、フェリは彼女の腕から逃げ、窓枠へと飛び乗った。
『帰るよ』
『もう？』
そのまま飛び降りようとするフェリを、ルーシーはあわててひきとめる。窓にぶら下がり振り向いたフェリの頬を包み込み、彼女は額に唇を寄せた。
ルーシーのおまじない。それはフェリがどんなに拒んでも、毎日されていることだ。ただしフェリからは、一度もしたことがなかった。
『おやすみ、フェリ』
『おやすみ』
おまじないのあとに声をかけられても、照れくさくてぶっきらぼうな返事しかできなくなってしまう。そんなフェリにルーシーはにやりと笑って再び口付けようとするので、あわててふりほどくのもいつものことだった。
道に誰もいないことを確認して、フェリは窓から下りる。二階だということも関係なく、猫のように身体をくねらせ、音もなく着地

する。
　ルーシーは、フェリの姿が見えなくなるまで、ずっと窓を開け、見守り続ける。だからフェリは足早に、商店街を去った。
　そして持ち前の目で、彼女の部屋の灯りが消えたのを確認する。ルーシーが部屋の明かりを消し、ベッドに戻るまでの時間をしばらくそこで過ごし、ようやく館への帰路をたどるのだった。

●

『こんばんは、ルーシー』
　いつもどおり花屋を訪れると、返ってくるはずの声がなかった。
『……ルーシー？』
　彼女はフェリの椅子に腰掛けたまま、眠ってしまっていた。
　今日はフェリが来るのも遅かった。待ちくたびれて、睡魔に負けてしまったのだろう。器用に背もたれを枕に寝る身体を、フェリは起こさないよう注意しながら抱き上げる。
　人ひとりはいっているからだろうか。重い。出会ったころは細かった頬も、今はすこしふっくらとしている。お腹もすっかりまんまるになって、ゆったりとしたワンピースの上からでも十分確認できるほどに育っていた。
　日に日に母へと近づいてゆく身体をベッドに寝かせ、風邪をひかないように布団をかける。ルーシーはなにか寝言を呟いているけど、起きる気配はまったくなかった。
　自らもベッドの脇に腰かけ、フェリはルーシーの寝顔を見つめる。いつもは絶え間なく表情を変えているけれど、眠っているときはさすがに怒ったり笑ったりはしない。血色のいい頬と長いまつげが印象的で、一度見るとなかなか目を離せない寝顔だった。
　フェリが目にすることの多い人間の表情は、これだ。深い眠りに落ちているときの、無防備で安心しきった表情。至福のひと時を味わう、その幸せそうな寝顔は、どんな人間も総じて綺麗だと思える

表情だった。
フェリはその至福のときを、永遠なものへと変えさせている。
『ルーシー……？』
呼びかけて、フェリは返事がないことを確認する。そして布団を肩まで下げて、長い髪を指で梳きながら、白い首筋をあらわにさせた。

7、ロイヤル・ハイネス―5

抜けるほど白い肌。その奥に、かすかに青い血管がのぞく。耳をすませば、彼女の寝息とともに、心臓が打つ鼓動が聞こえてくる。そして身体をめぐる、血の流れまでが聞こえてくるような気がする。

川の流れにも似た、その音。激しく荒れ狂う、波の音。地面を揺らす大地の鼓動。人の、命が流れる、音。

その音を聞くたびに、フェリの身体は、熱く燃え滾る。

彼女の鼓動に呼応するかのように、フェリの心臓もまた、強く鼓動し始める。流れる血が頭に上り、耳の奥で音がこだまする。まぶたが見開かれ、髪の毛が逆立つように、肌がざわめくのが自分でもよくわかる。

つばを飲むのどが、やけに渇いている。

『……ルーシー？』

フェリは、彼女の耳元でそっとささやいた。

感情が高ぶり、震え始める指で、彼女の頬を撫でる。

唇、顎、喉。指をすべらせながら、むき出しになった鎖骨を撫でる。ルーシーが口の中で何か呟き、上下する喉を指の下で感じたとき、フェリの唇が動いた。

ごくり、と喉が鳴る。乾いた唇を、舌で湿らせる。口を開き、牙をむきだしにする。

彼女はまだ、目覚めない。

自分の吐息が、彼女の肌にかかる。肌に当たり、跳ね返ってくる自分の呼気で、息が震えていることに気づく。

間近で見てもなお、白く、美しい肌。なだらかなライン。薄い皮膚。

その下を流れる、赤い血潮。

『……ん……』
かすかに聞こえた声に、フェリの鋭く光る牙が離れた。
『……ルーシー？』
再度呼びかけてみるけれど、彼女はそれきり、何も言わない。ややあって規則的な寝息に戻り、フェリは深く息をついた。
両手で、自分の口を覆った。早くなりそうな息を、自分の吐いた息で紛らわせ、どうにか平静を取り戻そうとした。
自らの首筋に爪を立て、息を殺すほどに力をこめる。指先に触れる脈がやけに速い。こめかみから汗がにじんで、首もとまで伝うのがわかる。
それが落ち着いたころ、自分の指先を見ると、爪の間に血がたまっていた。フェリは指先に唾液を取り、傷ができたであろう首筋に塗る。
ルーシーの肌に傷がないことを確認し、こわばっていた身体からどっと力が抜けた。
布団を首もとまでしっかりとかけ、髪で耳元までしっかりと隠す。かすかに震えるまつげを見ながら、目にかかる前髪をそっとはらった。
金の髪の散らばる額に、フェリは口づける。
『おやすみ、ルーシー』
そして、部屋を後にした。

●

フェリは気まぐれに、日があるうちにルーシーのもとを訪れることにした。
太陽が空の端に残るとはいえ、すぐに日も沈む。雲が多く、日陰も多い。肌を隠すローブさえあれば、吸血鬼も夜の闇から抜け出すことができる。
ルーシーを驚かせようと、裏口から音を立てないようこっそりと

忍び込むと、彼女は同じく下の階にいた。
『――もう帰って』
てっきりフェリに言われたのかと思って身構えたけれど、彼女はフェリの訪問に気づいていないようだ。表の入り口をわずかに開き、誰かと話していた。
『もう来ないで。あたしはひとりでやってみせるから』
冷たくそう言い放って、ルーシーは扉を閉める。いつになく乱暴な手つきで鍵をかけなおし、二階の部屋に戻ろうとして、ようやくフェリの姿を見つけた。
きゃあ、と短い悲鳴を、彼女は慌てて手のひらで押さえ込む。もう片方の手がお腹をおさえたのを見て、フェリはフードを脱いだ。
『ごめん。驚いた？』
『驚いたわよ。出てきちゃったらどうするの』
彼女の言葉で、もうそんな時がきたのかと驚く。ゆっくりとした足取りで歩く彼女を気遣いながら階段をあがり、部屋に戻ると、ルーシーは深いため息をついてソファーに沈み込んだ。
『水、飲むか？』
『ありがとう……』
弱弱しい声でコップを受け取り、彼女は一息でそれを飲み干す。いつもは逆で、フェリが水をもらう側なので、なんだか妙な気分だった。
今日のルーシーは、とても、弱い。
『今のは、サマンサか？』
『まぁ、そんな感じ』
曖昧に流し、彼女はお腹をひとなでする。しばらく手をそえたまま、わが子の様子を確認する姿に、フェリは訪問相手が誰だったかを悟る。そしてそれを口に出していいかと迷っているうちに、ルーシーと目があった。
『今の……』
言っていいのか。いいのだろうか。

『この子の父親』
フェリの逡巡の間に、彼女が言った。
『顔、見た？』
『見てない』
『よかった』
今まで、フェリが訊くに訊けなかったことを、ルーシーは自らもちかけてくれた。
子供は一人でできるものではない。
相手がいないと授からない。
ひとりで花屋を経営し、一人で暮らし、ひとりで子供を産もうとしているルーシーの、相手となった人は一体誰なのか。
それはフェリがずっと、抱き続けていた謎だった。
『もう会わないって約束したのに、今さら来られたって困るよね』
自嘲気味に笑い、ルーシーは外を見やる。傾いた太陽は赤く色づきはじめ、差し込む光も弱弱しい。太陽の力は、フェリに届く前に消えてしまっているようだった。
カーテンを閉めながら、フェリは思う。どんなに姿を潜めたとしても、夜に窓からもれる光で、相手はルーシーがここにいることを知っているはずだった。ではなぜ、今までろくに会いにこなかったのか。
それはもちろん、事情があるに違いない。
『あの人ね、あたしが子供産むの、反対してるの』
もうすでに、子供を堕ろせる時期はとうにすぎている。臨月に入り、いつ産まれてもおかしくない。そこにきてまで反対しに来る相手に、彼女はまた、ため息をついた。
『相手は、独り身じゃないのか？』
『独身よ、まだ』
ルーシーの言葉で、フェリは察した。
『もうすぐ結婚するみたいだけどね。婚前に妻以外の女と関係を持って、ましてや子供がいるなんてばれたら大変でしょう？』

どんなにルーシーが内緒にするとしても。ひとりで育てるとしても。隠し子がいることには変わりない。未来にそんな危険を残すよりは、今、断ち切ってしまえばいいと、相手は考えているのだ。

『最初はね、父親が誰かだまっていれば、産んでもいいって話だったの。でも、こっちが覚悟決めたとたん、産むなって言い出したのよ』

『……それでも相手のこと、愛してるのか？』

『まぁ、前よりはってほどじゃないけど』

お腹を撫で、彼女は言う。もうすでに彼女から、いつかのような、赤らんだ頬は消えてしまっていた。

『なんていうか、好きな人の子供を産みたいっていうんじゃなくて、宿った命を殺すことをしたくなかったのよ』

『子供には父親がいないって、考えたりしなかったのか？』

『したわよ。でも、産むことにしたの。今までひとりだったあたしに、やっと家族ができるんだもの』

おかしい？　と訊かれて、フェリは返事に困る。残念ながら、フェリは男。子供を宿すことはできなかった。

『どんなに願ってもね、あたしの両親はもう帰ってこないの。命はひとつきりなのよ。この中にある命を、殺すのは簡単だわ。でも、同じ命は決して戻ってこないのよ』

『……』

黙りこんでしまうフェリに、彼女は苦笑した。

『もうわかってるだろうけど、妊娠を隠すために店を閉めて、みんなの目につかないようにしてるの。あたしのこと知ってるのは、サマンサと、あの人だけよ。まぁこんな田舎だから、いずればれるかもしれないけど……』

だから、産婆にもかかっていない。初産で不安なはずなのに、フェリが会う彼女はいつも気丈としていた。

そこで彼女は言葉を切り、徐々に光りだした月を見上げた。もうすぐ満月に差し掛かるのを見て、いつだか『子供は満月に産まれる

ことのほうが多いんだよ』と教えてくれたものだった。
『エルが産まれるとき、フェリも来てくれる？』
『ひとりで産むのか？』
『いちおう、サマンサには頼んでるんだけどね……あ、鉢合わせしたら危ないから、やっぱり産まれてからのほうがいいかな』

7、ロイヤル・ハイネス―6

たぶん、もうそろそろだと、彼女はそう予言する。やはり、月の満ち欠けと出産の関係性は本当なのかもしれない。
『でも、いざ産まれるとしても、フェリは館にいるから気づかないよね……』
『呼んでくれれば、聞こえる』
『本当？』
『なるべく、聞こえるようにしとく』
耳をそばだてていると、町の情報が大量に入り込んできて、音の洪水が強い頭痛を生むことになる。けれど、初産で心細いルーシーのためだと思えば、ほんの数日ぐらい我慢できるだろう。
『約束ね？』
『あぁ』
うなずくフェリに、ルーシーの表情が崩れて、今にも泣き出しそうな顔になった。今まで見たことのないその表情に、フェリはたまらず彼女を抱きしめた。
思えば、彼女をこうして抱きしめたのははじめてのことだった。ルーシーから触れられることは何度もあったけれど、フェリはいつもそれを拒むばかりだったからなおさらだ。
フェリの腕の中で、ルーシーはすこし、驚いたように身体を硬くしていた。けれどフェリの腕の力が、自分を守り抱いていることを知り、すぐに身体を預けるようになった。
『あたしのしてることは、間違ってるのかな……？』
彼女の呟きに、フェリはなにも言えない。ただただ抱きしめ、彼女が自分の中にすべて押し込んでしまおうとするのを、口ではなく態度で諭しているつもりだった。
決して涙を流そうとしない彼女がたまらなく切なくて、フェリはいつもしてもらうように、両手で頬を包み込む。額に口付けると、

その眦から一筋、涙がこぼれた。
『フェリ……』
フェリ、フェリと仔犬のように呼んでいたはずの声が、今は、消えてしまいそうなほどに小さい。いつものルーシーが、彼女なりの強さだということに、フェリはいまさらながら気づいた。
「大丈夫だ、ルーシー」
その細く、今にも壊れてしまいそうな身体を、フェリは強く強く、抱きしめ続けた。

●

それは満月の夜のことだった。
日没に起床し、しばらくベッドの中で時間をやりすごし、夜が更けるのを待った。そしてようやくベッドから出て、身なりを整え、髪の色がますます白くなったなと、ぼんやりと窓ガラスに自分を映していた。
天高く上った月を見上げ、雲ひとつない美しい夜空にひとり満足していたとき。フェリは不意に胸騒ぎを感じて、窓を開けた。
耳をすまして外の空気に意識を集中させるけど、もう誰もが眠りについた時間だ。町から、話し声はほとんど聞こえない。大きないびき。夜の営みの声。夜更かしして語り合う、少女たちの楽しげな声。
その中で、ひとつ、不穏な気配を感じるものがあった。
『……ルーシー？』
他の音にじゃまされて、よく聞き取れない。けれどそれは、ルーシーの声だと思われる。それが小さな声なので、誰と何を話しているかまではわからない。
サマンサだろうか。けれど、こんな夜中に会いにくるわけもない。産気づいたのだとしたら、こうも穏やかだろうか。初産で、慌てているのではないだろうか。

それに、この胸騒ぎは何だろう。
そろそろ彼女のもとを訪れようとしていたフェリは、すぐさま窓から外へと身を投げ出した。裏口から出るのが億劫だった。
はやる気持ちを抑え、町へと向かう。木々が立ち並ぶ一本道は、風にふかれて、ざわめきが波の音のようにこだましている。
なぜだか、いつもの道がとても長く感じる。いつもなら颯爽と風を切って走り抜けられるはずなのに、今日は向かい風。身体に強く吹き付け、フェリが町に行くのを拒んでいるようにも思える。
その風が、甲高い悲鳴を連れてきた。

――フェリ！

『！　ルーシー！』
たしかに聞こえた声に、フェリは力強く大地を蹴った。
風に乗って町から流れてくる香り。
この血のにおいは何だろう。
『ルーシー！』
フェリの発する、魂を吐き出すような叫びに応じるかのように、風が変わった。
背中を押す風に乗り、フェリは銀の髪をふりみだし、町へと駆け出していった。

町に着くと、血のにおいはいっそう強くなった。
丘の上に立つ教会の十字架が、月明かりを反射して輝いている。
フェリは十字架を恐れない。
今はむしろ、十字架に祈っていた。
ルーシーが無事であるように。
この血の臭いは、生命の誕生のものであるように。
一本道を走り続けたおかげで、フェリは裏口への道ではなく、戸

の閉められた表へとたどり着く。カーテンの閉めきられた窓から、光が漏れている。跳んで窓からはいろうとしたフェリの目の前で、ふいにカーテンがあき、窓が開いた。
逆光で、あらわれた人の顔はわからない。けれど背の高さと短い髪で、男だとわかった。
その男は、フェリに気づかず、窓からなにかを投げ捨てた。
フェリはとっさに、それを受け取る。
びちゃりと、手が濡れた。鉄のにおいが鼻をついた。受け取ったものが、血まみれになっていることを知った。
『ルーシー！』
自分でも驚くほどの大声が出て、男がびくりと反応する。そしてすぐさま窓から身を翻し、裏口から逃げようとする足音が聞こえた。
『ルーシー！』
男を追うよりも、まずはルーシーの身の安全のほうが問題だった。血にまみれた何かを、引き裂いたシャツの袖でくるみながら、フェリは地面を蹴り、窓から部屋へと乗り込んだ。
窓枠にかけた手が、ぬるぬるしたもので滑る。床も同様で、フェリはよろめき膝を突いた。
それが血だと気づき、フェリは部屋のさんさんたる有様に愕然とした。
水たまりのように床に広がったもの。壁に飛び散ったもの。それはすべて、血だった。つい先ほど、男がいたはずの窓枠まで、足跡地を踏みつけた足跡とともに、鮮血が幾本もの筋を引いている。
そして血だまりの中心に、彼女の姿があった。
『ルーシー！！』
『フェ……リ……？』
駆け寄り、抱き上げた身体は、血だらけでぬめり、腕から滑り落ちそうになった。
部屋に広がる血は、すべて、彼女のものだった。
『何があった！？』

訊くのはいいけれど、彼女は答えられない。あまりの痛みに息もできないようで、口をパクパクと動かしあえいでいた。
すがりつくように手を握られ、フェリは血に濡れた彼女の頬をぬぐう。そして身体をかがめ、深く口づけた。
舌をねじ込み、唾液を流し込む。傷口が多く、深すぎて、塗りこむよりこちらのほうが早かった。
思えば、初めてルーシーと交わしたキスだった。
痛みに苦しみ、悶えていたルーシーも、唾液が効き始めると落ち着きを取り戻していた。そしてフェリの顔を見て、はじめに口にした言葉は、
『エルが……』
だった。
『父親が来て、産ませないって、ナイフで……』
思い出して、錯乱しそうになるのを、フェリが必死になだめる。興奮すればするほど、彼女から流れる血の量が多くなってしまう。胸に深くつきたてられたと見られる傷は、彼女が呼吸するたびに、穴から血があふれ、流れ出していた。
『エル……エルが……』
『大丈夫だ』
フェリは血にまみれた何かを、彼女の前に差し出す。まとわりつく血をぬぐえば、それは小さな手を懸命に泳がせた。
フェリが抱きとめたとき、何かは、かすかな産声を上げた。
それはエルだった。
『生きてる。生きてるよ』
『エル……』
手の力もはいらないルーシーに、フェリはエルをさしだす。シャツの袖にくるまれたその小さな身体は、女の子だった。
『エル……』
わが子を目にして、ルーシーは涙を流した。けれどその息は、刻一刻と力を失ってゆく。これだけの傷を負ってなお、意識を保って

いられることのほうが、フェリには不思議でならなかった。
彼女はしばらく、エルを見つめていた。そして息を整え、目は娘を見つめたまま、言った。

7、ロイヤル・ハイネス―7

『フェリ。血を吸って』
『ルー……』
『約束したでしょ。子供が産まれたら、あたしの血を吸うって』
早く。ルーシーが、震える唇でささやく。フェリは呆然と、彼女の胸から流れる血を眺めることしかできなかった。
『生きてる血じゃないと、だめなんでしょう？　早くしないと、あたしも、長くないわよ』
ふふふ、と彼女は強がり、ようやくこちらを向いた。フェリの唾液により、痛みはないのだ。まるで睡魔に襲われているかのように、まぶたが力を失い、彼女はそれと懸命に戦っていた。
『ルーシーが死んだら、エルは誰が育てるんだよ……？』
『そんなの、フェリに決まってるじゃない』
『僕が？』
言われて、フェリは腕に抱いたエルを見下ろした。
考えていなかった。ルーシーの血を吸ったあと、残された子供をどうするかなんて。十月十日も一緒にいて、まったく考えていなかった。
『考えてなかったの？　あたしが死んだら、エルの血も吸うつもりだったの？』
『それは……』
子供のことは、なるべく、考えないようにしていたのもあった。
自分は、ルーシーとは、子供が産まれるまでの関係でしかない。産まれた子供のことは知らない。彼女のお腹にいる間だけ、エルはエルで、一度生まれてしまえばただの見知らぬ赤ん坊。
そう、思っていた。
『血を吸う約束は、あたしのものだけだったのよ。エルの血まで吸ったら、あたし、許さないから』

『でも、僕は父親じゃない』
『名付け親よ』
言われて、フェリは何も言えなくなった。
ルーシーは、ちゃんと先のことまで考えていたのだ。自分がいなくなった後、誰がエルを守り、育てるのかを。そのために、フェリに名前を考えさせた。適当な名前であれ、それはフェリが名づけたことになるのだから。
『もう、こんなんだから、母乳は出ないけど……お金はたくさん残してあるから。他にも、いろいろ、用意してるから。ベッドの下に、あるの、エルのために使ってね』
『ルーシー……』
『あたしの子供だから、図太く生きるはずよ』
『ルーシー……』
力がはいらす、宙でゆらめく手を、フェリは強く握り締めた。
『死なないでくれ』
『子育て、いや？』
『違う』
こんな状況になってまで、軽口を言うなんて。彼女もそれはわかっているようで、ごめんね、と呟いた。
『もうだめよ。あたし、すごく眠いもの』
『それは唾液のせいだ』
『違う。自分のことは、自分が一番わかるわ』
最後の力を振り絞り、彼女はフェリの頬に手を伸ばした。血塗れた指先が、フェリの頬に、赤い筋をつける。
『あたし、フェリに血を吸われて死ぬって決めてるの。フェリ以外の人に殺されるのは嫌なの』
『できないよ、僕にはできない』
『フェリが血を吸ってくれたら、あたしはフェリの命になるんでしょう？　あたし、フェリの中で、一緒にエルを育てるから』
『ルーシー……』

『ごめんね。あたし、母親失格よね』
彼女の涙の中に、かすかに、血が混じっている。その青い瞳は、次第に、瞳孔が開いていくようだった。
『あたしの、最後のわがままなの。お願いよ、フェリ……』
浅くなってゆく呼吸の中、ルーシーの目はもう、何も見えなくなっているようだった。
息ももう、浅くしか吸えていない。彼女がいつまで、話せるかもわからない。
『ルーシー――』
フェリは、彼女の胸に唇を寄せた。
首に傷をつける必要はなかった。これ以上、彼女の傷を増やしたくなかった。
心の蔵に一番近い、胸の傷。そこからフェリは、血を吸った。
『ありがとう、フェリ……』
ルーシーは、それ以上、何も言わなくなった。
弱弱しいながらも、鼓動はまだある。手を乗せたところはまだあたたかい。
あふれる血を、フェリはすすった。
あれほど待ち焦がれていたはずなのに。甘美な味を求めていたのに。
血は、何の味もしなかった。
かぐわしいはずの香りも、ただ鼻をつく鉄のにおいでしかない。滑らかな舌触りもない。泥水を口にしているようで、まったく喉を通らない。
けれど、フェリは飲み続けた。
ルーシーが生きているうちに。この手で、すべての血を飲み干す。それが彼女との約束であり、彼女の望む最期だった。
その約束だけは、なんとしてでも守らなければならない。
血に濡れた彼女の胸に、ぽたり、ぽたりと雫が落ちる。フェリの目から、透明な雫が落ちていた。

これが涙なのだとフェリは知った。
彼女の血を嚥下しようとするのに、呼吸がうまくできなくて、しゃくりあげてしまう。早く飲まなければ。気は急くのだけど、体がついてゆかず、おまけに声まで漏れてしまう。
これが嗚咽なのだとフェリは知った。
胸の痛みが、悲しみだと知った。
涙が、彼女への愛おしさで流れるのだと知った。
『……フェ……リ……』
最後の最後で、ルーシーは、フェリの頭に手を伸ばした。
血にぬれた銀の髪を、二、三度指でなで、力を失い床に落ちた。その手はもう、動くことがなかった。
最後の一口を、やっとの思いで飲み下す。そしてようやく、フェリは顔をあげた。
膝も、腕も、顔も。ルーシーの流した血にまみれて、フェリは呆然と座り込んでいた。
血だらけのルーシーを見ているのがたまらなくて、その美しい顔に飛び散った血をぬぐう。表情を隠す血糊がなくなり、いつもの見慣れた顔を見ることができた。さいわい、顔のどこにも傷はなかった。

ルーシーは微笑んでいた。

『ルーシー……』
涙を流すフェリの足に、なにかが触れた。
それはエルの、小さな小さな手だった。
『エル……』
フェリは、おそるおそる、エルを抱き上げた。
まだへその緒も残っているのに。生まれるべき日ではないのに。
それでもルーシーの残した命は、懸命に、生きようとしていた。目じりについた体液のようなものをぬぐおうと指を伸ばすと、しかと

つかみ、離さなかった。
エルを抱えながらも、フェリには、これからどうしたらいいかさっぱりわからなかった。
身体についた血を洗い流してあげなければ。では、このへその緒はどうしたらいいのか。ミルクはどうしたらいいのか。
教えてくれる人は、誰もいない。
『僕にはできないよ……』
それを聞いてくれる人ですらいない。
うなだれるフェリの身体の中を、なにか熱いものがしみわたってゆく。口から、のどへ。のどから、胃へ、お腹へ。そして、胸の奥から、全身へと、熱い何かが染み渡ってゆく。
それは、ルーシーの血だ。
彼女の血の中に眠っていた、生きるための力だ。
けれど、彼女はもういない。
指先まで、爪の先まで行きわたる、彼女の残した命。彼女の生きるべきだった、命。
エルを抱くはずだった、命。いつくしみ、愛すはずだった命が、今、フェリの身体を駆け巡り、吸収されようとしている。
全身を爪でかきむしり、引き裂きたくなるのをこらえ、フェリは窓から、月を見上げた。
『――ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！』
そして、狼のように、吠えた。
腕の中で、エルが応えるかのように、力強い産声をあげ始めた。

8、アマランサス―1

8　アマランサス

すべてを語り終え、フェリは深く息をついた。
そしてエルも、何も言えずに、ただ座っていることしかできなかった。
話すことで体力を消耗したのか、フェリは息が荒いまま、何も言えないようだった。時折、息苦しそうに、手が胸元をつかんでいることがある。いつものエルなら真っ先に背中をさすりに行くはずなのに、今日はなぜか、身体が動かなかった。
「……あたしは、望まれない子供だったの？」
ややあって出たエルの言葉に、フェリは一言、違うと言った。
「だって、そうじゃない？　あたしがいなかったら、ルーシーさんは殺されたりしなかったんでしょう？」
「たぶん、そうしたら僕が真っ先に血を吸ったと思うけどね」
遠くを見据えながら、フェリは吐き出す息とともにそう言った。ひどく疲れた様子で、椅子に腰掛ける背中はぐったりと丸まっていた。
「ルーシーは、本当に、エルの誕生を心待ちにしていたんだよ。もし僕が現れなかったら、そうだな……きっと、この町から出て行っただろうね。エルを守るために」
エルを産むことを黙認されていたはずが、どうも相手の反応がおかしくなってきた。このままでは、反対されてしまうかもしれない。姿を消して子供を産み、町に戻ったとしても、相手はいい顔をしないだろう。

ルーシーは、エルがお腹にいる間、いかにエルを父親から守るかをずっと考えていたのだろうとフェリは語る。
「そこに、僕が現れた。僕が狙った人は必ず命を落とすって言われてたから、ルーシーは自分の死を覚悟した。でも、お腹の子だけは生かしたいと思った」
そして、フェリと約束をした。そして反対し続ける父親の訪問に、なんとしてでもお腹の子を守ることを考え、そしてフェリを考えた。
「自分が死んで、もしエルをサマンサに引き取ってもらったとしたら、父親は自分の子供だとすぐに気づいてしまう。だからエルをこの町から隠す必要があった。僕が適任だったんだよ」
「……フェリは、あたしをいやいや育ててきたの？」
「まさか。嫌だったら僕はさっさと殺すか捨てるかしただろうね」
渇いた口を潤そうと、フェリはワインを口にする。その唇も、次第に血の気を失いつつあった。
「自分のせいで、とは考えないでほしい。ただ、エルは愛されていたということを知っていてもらいたかったんだ」
「でも……」
フェリが、首を振る。髪の間から、広がり続ける腐蝕がかすかに見えた。
「エルの母親は、ルーシー・ヘルネスっていうんだ。だからエルは、エル・ヘルネス。この館に住んでた人たちの、最後の生き残りだ」
「生き残りだなんて言われても、嬉しくない」
エルの呟きに、フェリはそうだろうとうなずいた。
「自分の父親が誰か、知りたい？」
「知りたくない」
即答に、今度は笑う。ただし、髪で隠されているため、ほとんど見えなかった。
「もう、あたしのことはいいよ。フェリのことを聞かせてよ」
「僕の？」
「フェリは、あたしを育てるようになって、血を吸わなくなったの

？」
　ルーシー・ヘルネスが、フェリ伯爵の最後の犠牲者。つまり彼は、エルを手に抱いたときから、町の誰も襲わなくなっていたのだ、
「なんか、あれ以来、血がだめになったんだ。別に僕は、たくさん血を吸ったおかげで、あと数百年は軽く生きられる身体ではあったからね。エルを育てるには十分だよ」
　ワインのグラスを置く手が、震えている。本人も手の異変に気づいたのか、しきりに手を握ったり開いたりしては、ちゃんと動くかどうかを確かめているようだった。
「エルを育てるようになってから、僕は、町の人たちと話をするようになったんだ。そうしたら、今までただの血の樽だと思ってた人たちが、ルーシーみたいに思えてきてね。血を吸いたいとか、そういうの、思わなくなったんだ」
「ルーシーさんのこと、愛してたの？」
「できればルーシーのことを、お母さんって呼んでくれないか？」
　自分の口を押さえるエルに、フェリは「無理しなくてもいいよ」と言う。そしてエルの問いに答えるように、まぶたを伏せ、そして吐息でやわらかく微笑んだ。
「愛してたよ、ルーシーのこと。そしてお腹の中にいる子供も、愛しく思うようになっていたよ」
　初めて、人を好きになったと、彼は呟いた。
「でもまだ、あのころの僕は、愛しいとかそういうのが、よくわからなかったんだ。今思い返して、ようやく理解できる感じで、あのころは自分の中でもうまく整理がついていなかったな」
　愛しい、が、よくわからなかった。エルが生まれるのが楽しみな反面、恐ろしくもあった。それは、ルーシーが命を失ったとき、残された自分がなにを思っているかがわからなかったから。
　自分の手で、彼女を殺し、はたして自分はその子供をどうするつもりだったのか。
　自分は本当に、ルーシーの血を吸えるのか。

それについて、深く悩んでいたらしい。そのからみにからんだ思考は、何年たった今の自分でも、うまく解きほぐすことができないと言った。
「いざ、ルーシーが死んで、なにかが僕の中で変わったんだ。目に焼きついたルーシーの死に顔を思い出しては、人は生きているときが一番美しいんだなって、思うようになった」
「フェリ……」
「そして同時にさ、ルーシーの血を吸った自分が、とても恨めしく思えるんだ。あの時、僕が違う行動をとれば、彼女は助かったのかもしれないのに。僕はその命を奪った。ルーシーの美しさを、永遠に、うばってしまったんだ」
ルーシーは、もういない。どんなに望んでも、会えることはない。
自分がその命を奪ったのだから。
「時が経つごとに、エルが大きくなって、ルーシーに似てきてさ……」
「似てないよ。あたし、全然綺麗じゃない」
「髪も目も、ルーシーとは違うよ。でもね、たまに見せる表情とか、話し方とかが、よく似てるんだ。それを見てると、ルーシーのことを思い出して、ここがすごく苦しくなる」
動くほうの手で、フェリは自分の胸を強く押さえる。シャツに、血膿の混じった体液がにじんだ。もう、胸まで腐蝕が広がっていた。
「エルももう大きくなって、好い人があらわれたんだ。だから僕も、エルと離れようかなって思ってるうちに、身体がこうなっちゃったから……ちょうどいいのかもしれないね」
「その腐蝕は、もうどうにもならないの？」
うん、とうなずくフェリに、エルは「嘘つき」と言い切った。
「昔、話してくれたとき、言ってたじゃない。薬があるんだって」
「……エルは本当に、よく覚えているね」
苦笑のこもった呟きは、肯定を意味していた。油の切れた人形のように、ぎこちない動きで、彼は自分の頬の腐蝕に手をやった。

ほんの少し撫でただけで、傷口から血が流れる。化膿し、悪臭を放つ血膿が流れる。腐敗し、流れ出した体液がテーブルを汚した。
「血を吸えば、治るよ」
フェリはその体液を見下ろし、ひとり自嘲気味に笑う。拭い取ろうとして伸ばした手が、ワインのボトルに当たり、真っ白なテーブルに割れた瓶から赤いしみが広がった。
「人の血は、命を延ばすほかにも、僕たち吸血鬼の傷を癒す力があるんだ。すこしぐらい太陽にあたったとしても、血を飲めば、治る」
「じゃあ……」
「でも僕は、もう、血は口にしない」
エルは、フェリの目の前に、自らの白い腕を突き出した。
「あたしの血をあげる！」
「だめだよ」
「娘の血ならいいでしょう！」
どんなにだめだと言われても、エルは手を引かなかった。そんなエルの頑固さは、たしかに、ルーシーに似たのかもしれない。しばらく沈黙したフェリは、ふいにエルの手を取り、「足りないんだ」と呟いた。
「足りないんだ。ここまでひどいと、たとえエルひとりの血を飲み干したとしても、全然、意味がない。サマンサや、ジャスティンや、町のみんなの血を吸って、ようやく落ち着くだろうね」
エルの手の甲に軽くキスをして、フェリは手を離した。
「それでもエルは、僕に生きてほしいって、言う？」
「……」

8、アマランサス―2

言葉につまり、エルは唇を噛む。
「だって、フェリは……」
「僕は？」
「フェリは、あたしのお父さんじゃない！　お父さんが死ぬのを、だまって見ていられる子供なんて、いるわけないじゃない！」
叫ぶと同時に、目から、ぼろぼろと涙が落ちた。
「人の命を奪うのが、いけないことなのはわかってる。でも、フェリはあたしの家族でしょう？　家族に生きてほしいと思うのは、おかしいの？」
「エル……」
「あたしは、フェリが吸血鬼でも、みんなから嫌われていても、フェリのことを愛してるわ！　だって、フェリはあたしを愛してくれたもの！」
違う。嘘だ。自分のついた嘘に、エルの目からまた、涙がこぼれた。
正直な気持ち、心の底では、素性を打ち明けることのできない自分が嫌になっていた。フェリが自分を育てさえしなければ、孤児院にあずけられ、育てられでもしていれば。そうすればエルは、ジャスティンに、隠し事をせず接することができたかもしれない。
フェリが吸血鬼でなければ。町のみんなを襲わなければ。自分は心の底から、あの町の人たちと接することができたのに。
フェリがいなければ。フェリさえ、いなければ……。
そう思ったことが、何度もあった。
「フェリ……」
けれど、自分は、彼がいなかったら生きてこれなかった。
母は、エルを守るために、フェリに我が子を託した。そしてフェリは、今までエルを大事に守り、育ててくれた。

どんなときでも。何があっても。フェリはいつも、エルを慈しみ、愛してくれた。
だからこそエルは、人を愛することを知った。
「死ぬなんて言わないで。フェリが死ぬのをだまって見ていられないよ。意味がなくても、あたしの血を全部使ってほしいよ」
自分はまだ、フェリに何も返していない。今まで受け取ってきた想いを、何一つ、返すことができていない。
だから、フェリにはまだ、生きていてほしかった。
「僕は、血を吸わないって決めたんだ。だから、こうなったらもう、終わりなんだよ」
「でも！」
「いいんだ。僕はこれまで、たくさんの人の命を奪ってきた。本当なら、とうに死んでいる命なんだよ」
「でも……」
「僕は、エルを育ててきた時間が、今まで生きてきた中で、一番素敵な時間だったと思ってる。不思議だね、自分まで人間になれたような気がしたんだ」
町に買い物に行き、人々に触れた。今まで自分が見ていなかったものが、見えるようになった。エルが生きるためのものを作り、エルを育てるための知恵をくれる人たちまでが、たまらなく愛しく感じるようになった。
「今ここで、血を吸ったら、僕は昔の自分に戻ってしまうような気がするんだ。エルの花嫁姿を見られないのは寂しいけれど……でも僕は、エルがしわしわのおばあちゃんになっても、自分がこの姿のままでいることのほうが、たまらなく寂しいよ」
フェリは立ち上がり、おぼつかない足取りでエルへと歩み寄る。最初は逃げようとしたエルも、今にも倒れそうなフェリを見ると、手をかさずにはいられなかった。
「どっちにしろ、僕は町の人に姿を見られてしまったんだ。今ごろ町では、伯爵が戻ってきたって騒ぎになっていると思う。今度こそ

は、この館を襲われるかもしれない。そうしたら、エルがここに住んでいたことも、ばれてしまうかもしれない」
「あたしはそれで、かまわない！」
「だめだ。そうしたら、エルはひどい目に遭わされてしまう。いいかい、早めに、この館から自分のものを運び出すんだ。館に火をつけて、消してしまってもかまわないから」
エルはフェリのその教えに、つい、うなずいてしまう。彼の低い声は、どんなに拒んでも、エルの頭の奥へ奥へと染み渡っていく。
「僕は、ここで姿を消すほうがいいんだよ。フェリ伯爵は、とうの昔に消えてしまった。そう、みんなに思われることが、一番いい……」
頬を包み込まれ、額にキスされる。そしてその唇が、自分の唇に近づき、エルは逃げようとした。けれどフェリは、傷を負ってもいてもなお、自分より力が強かった。
「いやだ。いやだよ、フェリ！」
かつてルーシーにしたように。フェリはエルの唇に、自らの舌をねじこむ。そして唾液を流し込み、吐き出そうとするあごをおさえ、無理やりに嚥下させた。
唇が離れ、エルはその唾液が、身体をめぐってゆくのを感じた。
「いやだ、いや……」
そしてそれが頭に回るころには意識も朦朧とし始め、まぶたを閉じれば眠りに落ちてしまうことを知る。
次第にかすんでゆくフェリの姿が、たまらなく愛しくて。エルは力のはいらない腕で、フェリの身体を抱きしめた。
「お父さん……」
彼の唇が動いたけれど、なんと言ったかは、聞き取れなかった。

●●●

崩れ落ちるエルを抱きかかえ、フェリはその身体を椅子に座らせ

た。
ほんの少し動いただけで、額から汗がにじむ。焼け爛れた肌は汗をかけないのか、かわりに血が流れていた。
窓から空を見やり、フェリは夜明けを知る。ガラスに自分の姿を映し、乱れた服と髪をさっと整えた。
「……っ……」
止まることのない腐蝕の痛みに、眉根を寄せる。痛みには波があり、その感覚は少しずつ短くなってくいるようだった。逆に痛みの時間は長くなり、フェリはその間、息をつめてじっと耐えた。
波が引き、ほっと息をつく。そして、自分に残された時間を知る。もう一度空を見て、フェリはエルの身体を抱き上げようとし――体液で汚れてしまうと思い、ローブを羽織ってから娘のそばに膝をついた。
「ごめんね、エル……」
もう、言葉は届かないとわかっている。頬を撫でながら、フェリはその寝顔を目に焼き付けた。
「こんな親で、ごめんね」
最後まで一緒にいられなくて、ごめん。
ルーシーから託された命。立派に育てあげると約束したはずなのに。結局自分は、中途半端なまま、エルの前を去ろうとしている。
「背負わせて、ごめん」
そしてフェリは、エルにさまざまなものを背負わせてしまった。育ての親が、町に悪名をとどろかせた吸血鬼であること。そのせいで、自分の素性も明かせず、いつも胸に晴れることのない闇を抱えたまま生活していたことを。
そして真実を知ってなお、自分だけの力では、解きほぐすことができない気持ちを残してしまったことを。
「エル……」
背負うべきではない、罪を感じて生きさせてしまったことを。背負う必要のまったくない、恨みを、憎しみを、抱えさせてしまった

ことを。
どんなに謝ったとしても、彼女の負担が減るわけでもない。口でならいくらでも言える。けれど、町の人々の負った傷は、エルにもフェリにも、癒すことなどできない。
時が解決するのを待つしかない。
「ごめんね……」
そして、その時を、ともに過ごせないフェリ。なんて不甲斐無いのだろう。
「一緒にいられなくて、ごめん……」
きっとエルは、フェリを許すことなどできないはずだ。
今自分がしようとしていることは、子供を捨てる親と同じだ。ルーシーのように誰かに命を託すこともなく、ただ、自分の一存で、彼女のそばを離れようとしている。
許してくれないのはわかっている。
けれど、フェリにはもう、血を吸いたいという気持ちは起きなかった。薬だと思って、嫌々口にすることもできない。血の臭いをかいだだけで、頭が狂ってしまいそうだった。
エルのためだと思っても、できない。
「ごめん……」
かつて自分は、エルの血を吸おうとしたのだから。
ルーシーを亡くして、慣れない育児に明け暮れていたとき。彼女の残したものはエルのミルクや手で編んだと思われる着替えと、それからわずかなお金だった。
そのお金もすぐに底をつき、館に残された金品を売り、それで物を買った。
あれよあれよという間に時間がすぎ、エルはなんとか大きくなった。
そして歩き回るようになり、傷がたえなくなったころ。唾液で傷を癒そうと、傷口を舐めたとき。久しぶりに、血に触れた。
本能が、その味を、思い出しそうになった。

けれどもそれより先に、その血が、ルーシーの最期の記憶を呼び起こした。あふれる血潮をすすった自分。あのときの血の香りと、味。それは強い嘔吐とともに、フェリを襲った。

8、アマランサス―3

本能は、血を求める。けれどフェリ自身は、血を拒絶する。
その葛藤を、一体何年続けたことだろう。
そして今。フェリの本能は、エルの血を吸えと囁いている。今、眠っている隙に。その白い首筋に牙をつきたて、血を飲み干せとわめいている。
ぶるぶると震える身体が、顔が、牙が。エルの身体に近づいてゆく。嫌悪しているはずの、あの血の味、におい。それを再び、求めようとしている。
「……うぅっ」
再び襲う痛みに、フェリは身体を折った。
荒い息をつき、暗くなる視界の奥底で、金の髪をした女性があらわれる。彼女は青い瞳で、フェリを見ている。なぜ今、彼女の顔が浮かぶのか。
『フェリが血を吸ってくれたら、あたしはフェリの命になるんでしょう？　あたし、フェリの中で、一緒にエルを育てるから』
彼女はきっと、死の間際に、本当にそう思っていたに違いない。
「ルーシー……」
けれど、フェリの中にルーシーはいない。
血は、ただの血だ。その中にある命も、ただの命だ。たとえそれが彼女の身体からとったものだとしても。彼女の中で生きていたものだとしても。
ルーシーは、どこにもいない。
「ルーシー……」
呟き、フェリは唇を噛みしめる。ふと、目に、エルの黒い髪に隠れた髪飾りがうつった。
ルーシーが好きだと言った薔薇に、よく似ている。フェリが好んだ薔薇に、とてもよく、似ている。

ルーシーの血を、継いだ子供。ルーシーが最後に残した命。それが、エルだ。
ルーシーは、エルの中で、生き続けている。
「エル……」
その命を、再び奪うことが、フェリにできるはずがなかった。
「ごめん。ほんとうに、ごめん」
最後の最後に、命を奪おうとまで、してしまった。そんな自分に、エルはなんとしてでも生きて欲しいと言った。
目じりに涙を残すその寝顔を、フェリはじっと、見つめる。そして額にかかる髪をはらう。
「愛しているよ……」
母によく似たそこに口づけ、フェリはその身体を抱き上げた。右腕はまだ、すこしだけ、力を残していた。
うまく動かない足に力をこめて、一歩一歩、慎重に歩く。エルはまだ起きない。もう窓から飛び降りる力も無く、遠回りながらも、フェリは裏口から館を出た。
門扉の影に隠れるように、花が残っていた。けれどそれは薔薇ではない。薔薇のように目を引くような、きらびやかさはない、質素で小さなアマランサス。Ａｍａｒａｎｔｈｏｓ――しおれないという意味に、フェリは一人苦笑する。
庭の薔薇たちは、すべて枯れてしまっているのに。そして自らも今、枯れてしまいそうになっている。
いつもエルと一緒に歩いた、町への一本道。空は深い藍から、次第に明るさを取り戻してゆく。なんとしてでも、日が昇る前に、たどり着かなければならない。
いつもはすぐに見えるはずの教会の十字架が、今日はとても、遠くにある。
もうすでに、空は明るくなっていた。けれど、たちこめる朝もや

のおかげで、光がフェリにまで届かない。このもやが晴れるまでが、自分に残される、ほんのわずかな時間だった。
花屋の前で立ち止まり、フェリは窓を見上げた。
あの時。自分はこの手で、エルを抱きとめたのだった。
小さくて、生きているのかですら謎だったあの子が。生きていけるかですらわからなかったあの子が。今、自分の手におさまりきらないほど、大きくなった。黒い髪はルーシーのものとは違うけど、眠りに落ちるその寝顔は、彼女の血を引いている。自分はどれだけ、その寝顔に心動かされたことだろう。
耳をすませば、眠りの中にいる町の様子が伝わってくる。いくつもの吐息が重なりあう空気の中。フェリは花屋の窓の奥で、あわただしく起き上がる気配を感じた。
「――エル！」
ジャスティンが目覚めた。そして、エルがいないことに気づく。布団を跳ね除け、ベッドから飛び降りる。まぶたの裏に、そんな様子がありありと浮かんでくる。
彼は、カーテンを開けて、窓の外を見る。
そして、フェリと、その腕に抱かれたエルに気づく。
「――エル！」
ジャスティンは、突然あらわれたフェリに驚きはしたものの、腕の中で眠るエルに気づくとすぐに降りてきた。
閉め切っていた店の戸を開け、彼は半裸の状態で飛び出してくる。朝もやに包まれた中、何もはおらない上半身はさぞ寒かろうに、彼はそんなそぶりをまったく見せなかった。
「あんた……」
ジャスティンが、フェリを見て、複雑そうな表情を浮かべる。きっとエルから話を聞いているはずだけど、まだ頭の整理がついていない。もちろん聞いた話は、そんなにすぐに、考えがまとまるようなことではない。
それでも彼は、エルを差し出すと、すぐにその腕に抱きかかえた。

「眠ってるだけだよ」と言うと、安堵の息をついた。
「おれ……」
ジャスティンは、太陽の腐蝕を知らない。傷が醜く引きつるフェリの姿を見て、困惑しているようだった。前日に会ったときよりも確実に、この傷はひどくなっているのだから、驚くのも無理は無い。
なんと声をかけたらいいのか分からない。表情がそう言っている。フェリはそれに微笑み、腐敗し続ける身体をふたりから離した。
「エルを、頼みます」
その一言で、彼は察したらしい。力強くうなずくとともに、朝もやが、少しずつ晴れ間を見せ始めた。
こまかな粒子の隙間から漏れ出す光に、フェリの肌が煙をあげる。不思議と痛みは感じず、むしろ、逃げ続けていた太陽のあたたかさというものをはじめて知り、心地よい眠気を覚えるようでもあった。
「あの、おれ……！」
なにか言わなければ。ジャスティンが焦って声をあげる。その腕の中で、エルが意識を取り戻したのか、もたげていた首を上げた。
一瞬、自分の置かれた状況がわからなかったのだろう。動かない。ジャスティンの胸に顔をうずめていたため、フェリからその表情はうかがえなかった。
「――フェリ！」
ようやく、気づいたようだ。エルがこちらを向いた。ジャスティンの腕を離れ、駆け寄ろうとしたけれど、うまく動かない身体は転びそうになって再び彼に支えられるだけだった。
フェリは、日の出を感じ、道の先にある教会を見る。きらめく噴水の先に、教会の屋根につけられた、大きな十字架が輝いている。
昇った太陽の光を、十字架が反射する。
その輝きが、フェリの身体を包み込んだ。

○○○

エルが最後に見たフェリは、太陽の光を全身に浴びていた。
目がくらむほどの真っ白な光は、彼の腐蝕のすべてをも包み込み、残された姿はまるで綺麗なままであるようだった。
その中で、彼は笑っていた。
目から涙が出るのも追いつかないほどの、わずかな時間の中。ジャスティンの腕に抱かれるエルを見て、彼は微笑んでいた。
それは、今まで見たこともないほどに穏やかで、慈しみにあふれた笑みだった。

エピローグ

エピローグ

フェリが消えた日から、一月がすぎようとしていた。

抱えていた花束を、エルはそっと、地面に寝かせた。

教会に来たのは初めてだった。

そしてそのすぐそばに、ルーシー・ヘルネスのお墓があるのを知ったのも、つい最近のことだった。

自分の母である人。その人が好きだといった花を、エルはジャスティンに頼んで仕入れてもらった。

月に一度の大量注文で、とても忙しいはずなのに。彼は真っ先にエルの花束を作り、店のことはいいからと送り出してくれた。

ジャスティンもまだ、身のまわりで起きた出来事に対して、頭の整理がつききれていないようだった。けれど、エルに対する態度は変わらなかった。

むしろ仲が深まっている気がするのは、うぬぼれではない。一緒に暮らすようになってから、お互いに必要とし合っていた。前よりもお互いを理解しあい、エルが悲しみに打ちひしがれているときは、ともに抱き合い泣いてくれた。

ルーシーの墓は大きな木の根元にあり、風にざわめく梢の音がとてもよく響いた。はらはらと落ちる葉が墓前に降りそそぎ、春は木に、綺麗な花が咲くのだろうと思った。

エルは膝を折って、墓前にしゃがみこむ。そして墓石に彫られた母の名前を、何度も何度も目で追った。

フェリの墓は、どこにもない。彼はあの光の中、消えてしまったのだから。
けれどエルは、フェリもまた、ここで眠っているのではと思っている。
最期を迎えた彼は、教会を見ていた。ここに、ルーシーが眠っているのを知っていたのだ。
きっと彼は、生前、何度もここを訪れたに違いない。エルを育てることの不安で押しつぶされそうになったとき。エルがはじめて立ったとき、しゃべったとき。すがることもあれば、喜びの報告をしたこともあったに違いない。
だからエルは、花束を二つ用意した。
中身は同じ。包装も同じ。ひとつの大きな花束を作ればいいものを、ジャスティンもだまってエルのお願いどおりにしてくれた。
花束の花弁を撫で、エルは自分の髪飾りに触れる。はじめて見るその薔薇は、たしかに、髪飾りとよく似ていた。

ロイヤル・ハイネス。

重なりあう花びらが、中心に近づけば近づくほど、濃いピンクへと変わってゆく、大輪の薔薇。はじめて見たとき、エルはその美しさに瞳を奪われていた。
フェリとルーシー。二人が、好きだといった薔薇。それをエルもまた、好きになった。
そしてその薔薇は、どこかフェリを髣髴とさせるものがあった。真っ白な髪や肌。それに、うっすらと色づいた頬や唇。ルーシーが、フェリに似ているといっていた意味がよくわかる。
花束と墓石とを見比べながらも、エルは声をかけるということができなかった。今日、こんなことがあったよ。誰々は元気だよ。そんな言葉ですら、出てくることがなかった。
フェリは、町の人に姿を見られたと言っていた。その中にはジャ

スティンが含まれるけど、彼はもちろんそれを口外することは無かった。
では、フェリが懸念していた町の人とは誰だろう。エルは考え、意外な人物を知った。
サマンサだった。
彼女の愛しの君は、フェリだった。彼女はフェリが消えてしばらくしたあと、そう、エルに教えてくれた。
恋をした人が、最愛の友を殺した人だという事実に、しばらく心を弱らせていたことがあった。でも彼女の持ち前の笑顔は、自分をも強くし、最近では新しい恋人もできたようだった。
町の外れの館は、そのまま形を残している。まだ荷物のすべてを運びきれていないので、エルはまめに通っていた。
町の人々を安心させるためには、館を消してしまったほうがいいのかもしれない。けれどエルに、火をつけるつもりはなかった。あの館は自分の育った家なのだから。
吸血鬼を恐れる心は、まだまだ消えないかもしれない。けれどサマンサや町の人々は、すこしずつながらも、過去から歩みだし始めている。
フェリのことは人々の記憶に残るだろう。けれど時が経てば、あの有名な吸血鬼のようになってしまうはずだ。
それを報告するべきだろうか。けれど、言葉が出ない。エルはただただ、口を閉ざしていた。
しばらくだまって墓石に触れ、エルは店に戻ろうと腰を上げた。風が吹いて、頭に葉がいくつもふりそそでいた。
「……？」
土を踏む、たしかな足音が聞こえて、エルは振り向いた。
一人の男性が、ほんの少し前にエルがそうしていたように、花束を抱えて歩いてくる。その人はエルに気づくと、どうもと頭を下げた。それは、墓場のあちこちで見られる光景だった。
道をあけようと、エルは墓から離れる。するとその人は、ルーシ

ーの墓石の前で、足を止めた。
「こんにちは、ニコラさん」
「君は、花屋の……」
置かれた花束を見て、彼――ニコラ氏はエルを見る。そして花束と顔とを見比べ、エルが墓参りしていたことを知ったようで、目深にかぶっていた帽子をはずした。
「この薔薇は、君が……？」
「はい」
彼も、エルが隣町から来た子だと人づてに聞いて知っているに違いない。しげしげと顔を見つめられ、エルは以前のように視線から逃げることなく、堂々と見つめ返した。
「ニコラさんも、ルーシーさんの？」
「……あぁ」
赤い薔薇の花束を、彼も墓前におく。エルはその場を去ろうと、そっと背を向けた。
「――待ってくれ」
呼び止められ、振り向く。
「君の名前は？」
「エルです」
「君の親は……？」
「隣町にいます」
風にふかれ、ニコラ氏の短い髪がなびいている。帽子をはずしたおかげで、エルははじめてまっすぐに、彼の顔を見ることができた。
ニコラ家は、この町で唯一、黒い髪と瞳をもつ一族だった。
「君の母親は、この墓に……？」
「いいえ」
エルは嘘をついた。
私の母は、ルーシー・ヘルネス。
そして父は、フェリ伯爵。
言おうと思えば、簡単に口にできる。けれどエルは、自分と同じ

黒曜石の瞳を見上げ、フェリのように柔和に微笑んでみせた。
「両親とも、健在ですよ。今日は、花束を届けにきただけです」
それでは。頭を下げて、エルは今度こそ、ニコラ氏に背を向けた。
背中にまとわりつく視線には、気づかないふりをした。
自分の父はあなたではない。
自分をここまで、愛し、育ててくれた父親は、フェリ以外にはいないのだから。
エルは決して、ニコラ氏を振り向こうとはしなかった。

教会を去り、町の中央まで歩いたところで、エルは見慣れた茶色い頭を見つけた。
「――ジャスティン！」
「エル。もういいのか？」
うん、とエルはうなずく。そして、手ぶらになっている腕に、自分のをからめる。いつしかこの流れも、自然とできるようになっていた。
「配達、終わった？」
「ああ。今月は少なかったから」
一緒に店に戻りながら、エルはジャスティンを見上げる。その視線に彼は首をかしげたけれど、とくに何も言わなかった。
「花束、どうもありがとう」
「どういたしまして。あれぐらいならお安いご用さ」
エルは背伸びをして、その頬にキスをした。
彼はそれに驚き、目を見開いたけれど、すぐに微笑を浮かべて、エルの額にキスを返した。
視線をからめるジャスティンの向こうに、噴水のきらびやかなしぶきが見える。
髪飾りに触れる指がくすぐったくて、エルは首をすくめる。口からは自然と、笑みがこぼれていた。

父がいつも微笑んでいた理由が、エルにもすこし、わかった気がした。

END

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8218h/

ロイヤル・ハイネス

2010年10月8日12時48分発行